

和歌山市内遺跡発掘調査概報

— 平成14年度 —

秋月遺跡第10次調査
車駕之古址古墳第6調査

2004

和歌山市教育委員会

序 文

和歌山市には、旧石器時代から江戸時代に至るおよそ400ヶ所以上にものぼる遺跡が確認されています。それらの遺跡は、私達の祖先の残した貴重な文化遺産であります。近年、遺跡内での開発行為が盛んになり、遺跡が危機にさらされることも少なくありません。

当市におきましては、主に個人による開発に対処するため、平成7年度から国庫補助金・県費補助金により市内遺跡発掘調査事業を実施しています。

本書には、平成14年度に実施した秋月遺跡と木ノ本所在の車駕之古址古墳の発掘調査の成果を収めています。調査により、弥生時代から近世にかけての遺構・遺物を検出し、各時代の様相を把握できる良好な資料を得ることができました。この報告が、地域の歴史解明に少しでも寄与できれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査にあたりご協力いただきました土地所有者及び関係された方々に深く感謝いたします。

平成16年3月31日

和歌山市教育委員会

教育長 山口喜一郎

例 言

- 1 本書は、平成14年度国庫補助事業として計画し、財団法人和歌山市文化体育振興事業団に事業の委託を行った埋蔵文化財発掘調査の概要報告書である。
- 2 調査対象経費の総額は520万円であり、国1/2、県1/8、市3/8の補助率である。
- 3 本年度の調査対象は下記のとおりである。

事業名	調査地	調査期間	調査面積	調査担当
秋月遺跡第10次調査	和歌山市太田155-2地内	平成14年7月18日～平成14年8月2日	70㎡	川口修実
車駕之古址古墳第6次調査	和歌山市木ノ本719-1地内	平成14年12月16日～平成15年2月19日	100㎡	川口修実
平成14年度出土遺物整理事業		平成15年1月20日～平成15年2月14日		井馬好英

- 4 発掘調査に係わる事務局は下記のとおりである。

【和歌山市教育委員会】

教育長 山口喜一郎
文化財室長 榎本 直樹
文化財班長 田中 郁次
文化財専門員 大野左千夫
学芸員 益田 雅司

【財団法人和歌山市文化体育振興事業団】

理事長 喜多 誠一
総務室長 高野眞次郎
総務室班長 久保 雅英
事務主任 山口 美二（文化財事務担当）
学芸員 川口 修実（発掘調査担当）

- 5 報告書刊行に係わる事務局は下記のとおりである。

【和歌山市教育委員会】

教育長 山口喜一郎
文化振興課長 榎本 直樹
文化財班長 大野左千夫（～平成15年9月16日）
榎本 邦雄（平成15年9月17日～）
学芸員 益田 雅司

【財団法人和歌山市文化体育振興事業団】

理事長 宇治田克夫
事務局長 土岐 朗
総務課長 久保 雅英
事務主任 山口 美二（文化財事務担当）
学芸員 川口 修実（報告書担当）

- 6 本書のうち発掘調査の概要部分については調査担当者である川口修実が担当し、本書の構成については益田雅司が行った。
- 7 写真図版の遺物に付した数字番号は実測図番号に対応する。
- 8 出土遺物整理事業については、和歌山城跡第9次調査出土遺物のうち、未洗浄遺物コンテナ18箱分の洗浄作業を対象として実施した。
- 9 本書の作成にあたり、関係機関等の方々に有益な御教示・御指導を賜ったことに感謝の意を表します。

本文目次

秋月遺跡第10次調査

1. 調査の契機と経過	1
2. 位置と環境	2
3. 既往の調査	4
4. 調査の概要	6
(1) 調査の方法	6
(2) 基本層序	6
5. 遺構	7
(1) 第3遺構面検出の遺構	7
(2) 第2遺構面検出の遺構	10
(3) 第1遺構面検出の遺構	12
6. 遺物	12
(1) 弥生時代の土器	13
(2) 奈良・平安時代の土器	15
(3) 鎌倉時代の土器	15
(4) 室町時代の土器	17
(5) 瓦	18
(6) 石器・石製品	19
(7) 木製品	19
7. まとめ	20

車駕之古址古墳第6次調査

1. 調査の契機と経過	23
2. 位置と環境	24
3. 既往の調査	26
4. 調査の概要	29
(1) 調査の方法	29
(2) 基本層序	29
5. 遺構	31
(1) 第5遺構面検出の遺構	31
(2) 第4遺構面検出の遺構	34
(3) 第3遺構面検出の遺構	34
(4) 第2遺構面検出の遺構	34
(5) 第1遺構面検出の遺構	37

6. 遺物	37
(1) 埴輪	38
(2) 平安時代の土器	43
(3) 鎌倉・室町時代の土器	43
(4) 江戸時代の土器	45
(5) 輸入陶磁器	46
(6) 土製品	47
(7) 石器・石製品	47
7. まとめ	48
(1) 車駕之古址古墳の復元と遺構面の変遷について	48
(2) 出土した埴輪について	49
報告書抄録	52

図版目次

- 図版1 秋月遺跡遺構 調査前の状況(南から)、第3遺構面全景(南から)
- 図版2 秋月遺跡遺構 第3遺構面全景(東から)、第3遺構面調査区西半部全景(北から)
- 図版3 秋月遺跡遺構 SK-14(南東から)、SK-14土層堆積状況(南から)
- 図版4 秋月遺跡遺構 SK-18・12(南から)、SK-18・12土層堆積状況(南から)
- 図版5 秋月遺跡遺構 SK-15(東から)、SK-15(南から)
- 図版6 秋月遺跡遺構 第2遺構面全景(南から)、第2遺構面全景(東から)
- 図版7 秋月遺跡遺構 SD-3(南から)、SD-3土層堆積状況(南から)
- 図版8 秋月遺跡遺構 SK-4(北から)、SK-4土層堆積状況(東から)
- 図版9 秋月遺跡遺構 北壁土層堆積状況(南から)、東壁土層堆積状況(西から)
- 図版10 秋月遺跡遺物 弥生土器
- 図版11 秋月遺跡遺物 奈良・平安時代の土器、鎌倉時代の土器
- 図版12 秋月遺跡遺物 鎌倉・室町時代の土器、瓦、石器・石製品、木製品
- 図版13 車駕之古址古墳遺構 車駕之古址古墳第2次調査時航空写真(南から)、
調査前の状況(南から)
- 図版14 車駕之古址古墳遺構 第5遺構面全景(南西から)、第5遺構面全景(北から)
- 図版15 車駕之古址古墳遺構 第5遺構面全景(南から)、前方部(南西から)
- 図版16 車駕之古址古墳遺構 前方部(西から)、前方部(南から)
- 図版17 車駕之古址古墳遺構 外堤(北から)、外堤(東から)
- 図版18 車駕之古址古墳遺構 第4遺構面全景(北から)、第4遺構面全景(南から)
- 図版19 車駕之古址古墳遺構 第4遺構面検出溝群(西から)、第4遺構面検出溝群(西から)
- 図版20 車駕之古址古墳遺構 第3遺構面全景(北から)、第3遺構面全景(南から)
- 図版21 車駕之古址古墳遺構 第3遺構面検出溝群(西から)、第3遺構面検出溝群(西から)
- 図版22 車駕之古址古墳遺構 第2遺構面全景(北から)、第2遺構面全景(南から)
- 図版23 車駕之古址古墳遺構 第2遺構面検出溝群(西から)、第2遺構面検出溝群(西から)
- 図版24 車駕之古址古墳遺構 第1遺構面SX-1(南から)、SX-1断割状況(南から)
- 図版25 車駕之古址古墳遺構 南壁土層堆積状況(北から)、西壁土層堆積状況(東から)
- 図版26 車駕之古址古墳遺物 円筒埴輪口縁部、胴部
- 図版27 車駕之古址古墳遺物 円筒埴輪胴部、底部
- 図版28 車駕之古址古墳遺物 朝顔形埴輪、形象埴輪、平安時代の土器
- 図版29 車駕之古址古墳遺物 平安時代の土器、鎌倉・室町時代の土器
- 図版30 車駕之古址古墳遺物 江戸時代の土器、輸入陶磁器、土製品、石器・石製品

秋月遺跡 第10次調査

1. 調査の契機と経過

今回の調査は、和歌山市太田155-2地内において個人住宅が建築されることになり、この建築用地が『和歌山県埋蔵文化財包蔵地所在地図』に記載された周知の遺跡である秋月遺跡(遺跡番号331)の範囲内に相当することから、工事に先立ち発掘調査を実施することになった。

秋月遺跡は紀ノ川南岸の微高地上に立地し、紀伊国の一宮である日前・国懸神宮の周辺にひろがる遺跡である。本遺跡は、弥生時代から江戸時代にわたる大規模な複合遺跡として周知されており、県内最古とされる古墳時代前期の前方後円墳が検出されたことでも著名な遺跡である。また、本遺跡の南側は河南条里と呼称され、紀ノ川南岸部でも条里地割が良好に残っている地域である。

調査対象地は秋月遺跡の範囲内でも西部にあたり、1997年に財団法人和歌山県文化財センターが調査を実施した調査地の南側隣接地にあたる(第1図)。この調査では部分的に遺存しているものを含め、弥生時代中期から江戸時代にかけて5面の遺構面が確認されている。この成果から、本調査においても複数の遺構面の存在と中世を主とした遺構・遺物の検出が予想された。

本調査は和歌山市教育委員会が国庫補助金を得て実施したものであり、財団法人和歌山市文化体育振興事業団が同教育委員会から委託を受けて行った。現地における調査の期間は、平成14年7月18日から同年8月2日までの約2週間を要した。調査対象面積は70㎡を測る。現地調査は、まず7月18日に地区設定を行い、翌日に機械掘削を行った。人力掘削は7月20日から開始し、7月31日までの10日間を要した。写真撮影は第2遺構面を7月24日に、第3遺構面を7月30日に全景写真撮影をそれぞれ行った。機械による埋戻しは8月2日に行い、全ての作業を終了した。



2. 位置と環境(第2図)

和歌山市は和歌山県の北西端に位置し、北は和泉山脈を境に大阪府泉南郡岬町・阪南市に、東は和歌山県那賀郡岩出町及び貴志川町に、南は海南市に接し、西は紀伊水道に面する。本市は和泉山脈の南裾に沿って西流し、紀伊水道に流れ込む紀ノ川により形成された和歌山平野を中心に立地する。今回報告する秋月遺跡(1)は、和歌山平野の中央部、紀ノ川南岸の微高地上に立地している。

次に周辺の遺跡について概観すると、縄文時代の遺跡としては鳴神貝塚(9)や吉礼貝塚などがある。鳴神貝塚は、近畿地方で最初に発見された貝塚として著名であり、縄文時代晩期の耳栓をし、伸展葬の状態で埋葬された人骨が検出された他、縄文時代中期から後期の遺物が出土している。吉礼貝塚からは、縄文時代前期前半から後期にわたる遺物が出土しており、紀ノ川流域における縄文時代の遺跡では最古のものである。これらの貝塚から出土する貝類は、海水系のもが多数見られることから、海岸線が岩橋山塊西側にまで及んでいたことを示している。

弥生時代以降、当地域周辺は紀ノ川の堆積作用による陸化の進行が最も早く進行した地域である。当遺跡周辺の平野部には太田・黒田遺跡(2)、秋月遺跡、鳴神Ⅳ遺跡(5)などが知られる。太田・黒田遺跡は、前期後半から中期を中心として営まれた県内最大規模の集落跡である。近年の調査によって2重の環濠が検出され、前期段階では環濠集落であることが確認された。出土遺物には鹿が描かれた絵画土器や銅鐸、銅鏃、直柄広鋤や一木平鋤など注目される遺物が多くみられる。また秋月遺跡においても、近年の遺跡東端部における調査によって前期の自然流路や石器製作土坑などが検出され、前期段階における集落の形成が確認された。これら弥生時代の遺跡では、後期段階の遺構・遺物の出土は極めて少なく、古墳時代前期まで集落の形成は見られなくなる。

古墳時代の集落も引き続き、平野部を中心に立地しており、友田町遺跡(4)、大日山Ⅰ遺跡(12)、鳴神遺跡群からは多数の竪穴住居、掘立柱建物などの遺構が検出されている。これら岩橋山塊西部の遺跡では、音浦遺跡(8)、大日山Ⅰ遺跡、鳴神Ⅴ遺跡(6)、鳴神Ⅱ遺跡(10)から現代の用水路と流路方向を同じくする溝が検出されている。その中には旧河道を再掘削しているものもあり、この地一帯が水路として重要な地域であったことが知られる。またこれらの遺跡からは、滑石製模造品や手捏ね土器等の祭祀遺物が出土していて、河川や用水に関わる祭祀が行われたとも考えられる。古墳の築造は、前期末には花山丘陵上に花山古墳群(11)が造営されるが、平野部に位置する秋月遺跡、鳴神Ⅴ遺跡でも、庄内式新段階から布留式古段階にかけての前方後円墳、方墳が集落の近傍で検出されており、それに先行するものとして注目できる。その後、中期後半～後期にかけて岩橋山塊には岩橋千塚古墳群(13)が形成され、連綿と古墳の造営が続けられたが、一方では中・後期の方墳が秋月遺跡、鳴神Ⅳ・Ⅴ遺跡において築造されており、鳴神Ⅴ遺跡では土坑墓、箱式石棺墓が確認され、平野部においても墓域が展開していたことが知られる。

歴史時代以降は、秋月の地に鎮座する日前・国懸神宮が『日本書紀』にその名が見え、その起源説話が記されている。またこの地域南方一帯は、県内最大規模の条里制地割が良好に残っている地域であり、これらは河南条里と呼称されており、それに関わる遺跡が多く存在している。

奈良時代では、太田・黒田遺跡、秋月遺跡、大日山Ⅰ遺跡が知られる。太田・黒田遺跡では、建物遺構は未確認ながら、大型の井戸が2基検出されている。井戸底からは斎串、あるいは和同開珎42枚・万年通宝4枚などがまとまって出土しており、井戸祭祀に関わるものとして注目される。その他奈良時代前

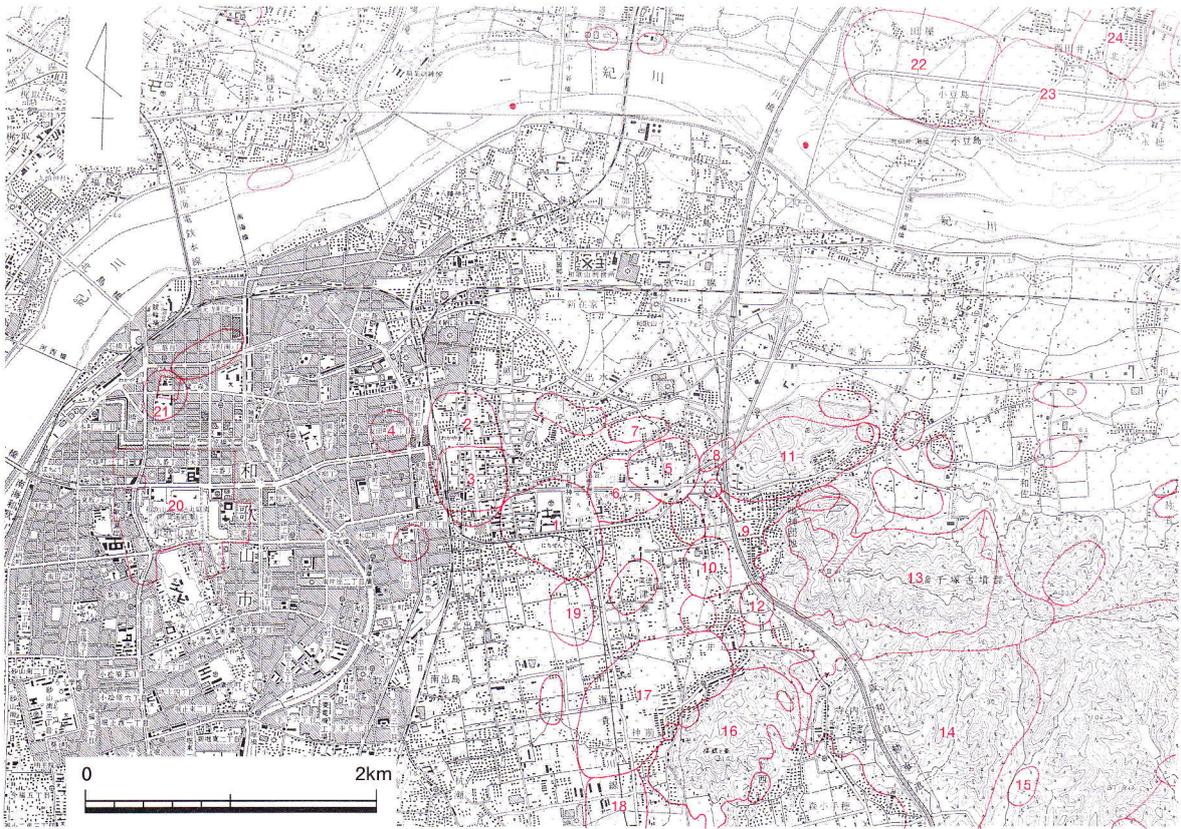
期から後期の瓦、円面硯等が出土していて、郡衙跡とも推定されている。

平安時代には、当遺跡にも神宮寺・貞福寺の存在が指摘でき、当該期の瓦が多量に出土しているが、明確な遺構は確認されていない。鳴神Ⅴ遺跡では段構成土と呼ばれる土壇状遺構から、平安時代中期の多量の遺物が出土しており、特に緑釉陶器、灰釉陶器、初期貿易陶磁器、陶硯、土馬などの特記すべき遺物が出土している。この他、詳細は不明であるが、大日山Ⅰ遺跡においても多数の掘立柱建物が検出されていて、奈良時代から平安時代にかけてのものと考えられる。

鎌倉時代には、鳴神Ⅴ遺跡において溝、河道、石組井戸群、土坑墓などが検出されているが、前代までに比して大要が明らかな遺跡は少ない。

室町時代には、太田・黒田遺跡において大型の濠状遺構、溝が確認されている。濠状遺構は、幅約10m、深さ3m以上、長さは約130m分が確認されていて、ともに16世紀後半に埋められている。これらは廃絶時期が共通することから、雑賀衆の太田城跡(3)に関わるものと推定される。

江戸時代の遺跡としては、和歌山城跡(20)とその城下町があげられる。鷲ノ森遺跡(21)は三の丸北側の町屋に相当し、調査の結果江戸時代の遺構面が3面以上検出され、道路、排水施設、鍛冶炉、礎石建物、井戸、便所、蔵、水琴窟等多くの遺構・遺物が出土している。また鍛冶作業は江戸時代前期に盛行し、中期には衰退するなど、城下町の変遷が明らかにできる遺跡として重要である。



番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
1	秋月遺跡	弥生～江戸	7	鳴神Ⅵ遺跡	弥生～江戸	13	岩橋千塚古墳群	古墳	19	津秦遺跡	弥生
2	太田・黒田遺跡	弥生～江戸	8	音浦遺跡	古墳	14	寺内古墳群	古墳	20	和歌山城跡	江戸
3	太田城跡	安土・桃山	9	鳴神貝塚	縄文～弥生	15	吉礼砂羅谷窯跡	古墳～奈良	21	鷲ノ森遺跡	弥生～江戸
4	友田町遺跡	弥生～平安	10	鳴神Ⅱ遺跡	弥生～平安	16	井辺前山古墳群	古墳	22	田屋遺跡	弥生～古墳
5	鳴神Ⅳ遺跡	弥生～江戸	11	花山古墳群	古墳	17	井辺遺跡	弥生	23	西田井遺跡	弥生～室町
6	鳴神Ⅴ遺跡	弥生～鎌倉	12	大日山Ⅰ遺跡	古墳～奈良	18	神前遺跡	弥生～江戸	24	北田井遺跡	弥生～古墳

第2図 秋月遺跡周辺の遺跡分布図

3. 既往の調査

本遺跡の調査は、昭和 45(1970)に社団法人和歌山県文化財研究会の調査以来、和歌山県教育委員会関係の調査が 8 件、和歌山市教育委員会関係の調査が 10 件を数える。このうち市関係の第 1～5・7 次調査と県関係の主要な県Ⅵ平成 5 年度調査までの概略は『秋月遺跡第 6 次発掘調査概報』に、市 6 次と県Ⅶ・Ⅷ平成 9・10 年度調査までの概略は『秋月遺跡第 8 次発掘調査概報』にそれぞれ記載がある。よって以下では、平成 11 年度以降新たに調査された調査成果を略述する。

市 8：平成 11 年度(第 8 次)調査 微高地を中心に弥生時代から江戸時代にいたる遺構・遺物が検出された。弥生時代では前期の自然流路、石器製作土坑があり、前期集落の存在が明らかになった。古墳時代では前期の溝・土坑・井戸、中期の竪穴住居や土坑があり、前期の遺構から土器編年の指標となる一括遺物が出土した。古代以降では奈良時代前期の井戸、中世の土坑・溝があり、「神宮寺」の関連遺物として平安時代後期から中世にいたる瓦が多量に出土した。江戸時代には屋敷を区画する大規模な溝が掘削され、微高地を中心に集落域として利用された状況が確認された。

市 9：平成 13 年度(第 9 次)調査 第 8 次調査の北側隣接地にあたり、弥生時代から江戸時代にいたる遺構・遺物が検出された。弥生時代では前期の土坑や土器棺の可能性のある遺構、古墳時代では前期の竪穴住居・井戸、前期から後期の土坑が確認されている。後期の土坑には祭祀土坑があり、須恵器を主とした土器群や馬の頭骨が出土している。古代以降では鎌倉時代の遺構が最も多く、調査区中央部を東西に貫く大溝や、石組井戸、土坑がある。また遺構は未確認であるが、第 8 次調査と同じく平安時代後期から中世の瓦が多量に出土し、「神宮寺」との関連が考えられる。

次に、今回の調査は既往の調査の中で最も西側に位置し、1997 年に財団法人和歌山県文化財センターが交番建設に伴い発掘調査を実施した調査地(県Ⅶ)の南側隣接地にあたる(第 3 図)。この調査では部分的に遺存しているものを含め、5 面の遺構面(第Ⅰ～Ⅴ遺構面)が確認されている。よって以下では、本調査地周辺の調査事例として北側隣接地の成果を各遺構面ごとに記述する。

【第Ⅰ遺構面】近世の水田耕作面であり、鋤溝や畦畔が確認されている。耕作層に含まれる遺物の年代から 18 世紀後半以降に水田化されたと考えられている。

【第Ⅱ遺構面】溝 1 条のみが確認されている。遺構面の年代は、上・下層に包含される遺物の年代との対応関係から 15 世紀後半～18 世紀前半の範囲と考えられる。

【第Ⅲ・Ⅳ遺構面】同一遺構面の可能性がある中世の遺構面で、遺構は新旧二時期に大別される。新段階は東西の方向をもち南側に屈曲する可能性がある堀状遺構や土坑、溝があり、埋没年代は 15 世紀前半頃と考えられる。古段階は溝、土器群があり、13 世紀前後に比定される完形の土器類が多量に出土しており、土器投棄を必要とする儀式に関連する遺構と考えられている。

【第Ⅴ遺構面】弥生時代中期から 8 世紀にかけての遺構面である。弥生時代中期後半の溝・土坑、古墳時代前期の溝、7 世紀後半から 8 世紀にかけての掘立柱建物が 2 棟検出されている。2 棟の掘立柱建物については、いずれも総柱建物で規格が同一であることから、同時期に計画的につくられた倉庫状建物と考えられている。

以上のように北隣の調査成果から、本調査では弥生時代から江戸時代にわたる複数の遺構面の存在と、中世の堀状遺構(堀状遺構 23・土坑 24)の南側延長部の存在が調査前に予想された。



〔市関係〕

地点	調査年度	調査の原因・種類	面積	調査主体	文 献	発 行	文献発行年月
1	1985	市立日進中学校自転車置場建設	約72㎡	市教委			
2	1986	クラブ部室建設	約60㎡	市教委			
3	1987	私立日前幼稚園舎建設	周園トレンチ	市教委			
4	市立日進中学校体育館倉庫建築	約70㎡	市教委	『秋月遺跡現地説明会資料』	市教委	1987.10.	
5	1988	下足箱建設	約8㎡	和文体	『和歌山市埋蔵文化財発掘調査年報1』	和文体	1992.3
6	1997	校舎及び屋内運動場建築に伴う遺跡確認	約260㎡	和文体	『秋月遺跡第6次発掘調査概報』	和文体	1998.3
7	個人住宅建築	約2㎡	市教委				
8	1999	市立日進中学校屋内運動場建設	約900㎡	和文体	『秋月遺跡第8次発掘調査概報』	和文体	2000.3
9	2001	市立日進中学校校舎建設	約800㎡	和文体	『秋月遺跡第9次発掘調査概報』	和文体	2002.3
10	2002	個人住宅建築	約70㎡	和文体	本報告書にて記載	市教委	2004.3

〔県関係〕

地点	調査年度	調査の原因・種類	面積	調査主体	文 献	発 行	文献発行年月
I	1970	県道和歌山港鳴神線建設	約240㎡	和文研	『秋月遺跡』、『和歌山県史 考古資料』	和歌山県	1983.2
II 1	1985	県立向陽高校特別教室建築	約1,000㎡	市教委	『秋月遺跡発掘調査現地説明会資料』	和文研	1985.9
					『和歌山県秋月遺跡』、『日本考古学年報38』	日本考古学協会	1986.2 1987.4
II 2	合併浄化槽建設	約190㎡	市教委				
II 3	排水施設埋設立会	約400㎡	市教委				
III	1986	硬式テニスコートボール基礎	グリッド6ヶ所	県教委			
		軟式テニスコートボール基礎	グリッド6ヶ所	市教委			
		ラグビーゴールボール基礎	グリッド2ヶ所	市教委			
IV 1	1987	グラウンド整備・排水施設	約530㎡	市教委			
IV 2	グラウンド北西隅砂場	約120㎡	市教委				
IV 3	バレーコートボール基礎他	グリッド5ヶ所	市教委				
IV 4	北西隅テニスコートボール基礎	グリッド6ヶ所	市教委				
IV 5	グラウンド内グリッド	グリッド9ヶ所	市教委				
IV 6	危険校舎改築1次	約390㎡	和文セ	『秋月遺跡』	和文セ	1994.3	
V	1992	危険校舎改築2次	約60㎡	市教委			
VI	1993	和歌山県警太田交番建設	約300㎡	市教委	『秋月遺跡発掘調査概報』	市教委	1997.10
VII	1997	県立向陽高校体育施設(プール)整備	約520㎡	市教委	『(財)和歌山県文化財センター年報1998』	市教委	1999.6
VIII	1999						

和文研(一社) 和歌山県文化財研究会、県教委一和歌山県教育委員会、和文セ(一財) 和歌山県文化財センター、市教委一和歌山市教育委員会
和文体(一財) 和歌山市文化体育振興事業団

第3図 既往の調査地点及び既往の調査一覧

4. 調査の概要

(1) 調査の方法

調査は工事計画範囲内の建物基礎部分にあたる地点において、南北約7m、東西10mの調査区を設定した。

調査の方法について、まず重機による掘削は上層に堆積した近現代の整地土、旧耕作土(第1層)、近世期の遺物包含層(第2層)までとし、第3層以下の遺物包含層と遺構の掘削については人力掘削によって行った。

図面による記録は、平面図に関しては国土座標軸(日本測地系)を基準とした値を使用し、このラインを基準として実測を行った。また、壁面土層断面図や遺構平面図及び土層断面図については1/20の縮尺を用いた実測を行い、遺物出土状況図は1/10の縮尺を用いた。土層の色調及び土質の観察については、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』を用い、遺跡の水準は、国家水準点(T.P.値)を基準とした。

(2) 基本層序

当調査地の基本層序は第4図に示した通りであるが、第3層より上層では調査区の北側と南側において堆積状況が異なっている。表土は近現代の造成土(整地土第1層)が調査区全域に70～110cmと厚く堆積している。この整地土下には、ほぼ調査区全域において旧耕作土である灰色粗砂層(第1層)が20～30cmの厚さで水平堆積する。北側では第1層下に灰色のシルト混粗砂層(第2層)が15～20cmの厚さで堆積している。第2層は遺物が少量で明確な時期は明らかではないが、下面の遺構の年代から近世以降の遺物包含層と考えられる。この第2層上面が第1遺構面であり、近世以降の溝状遺構を確認した。

南側では、整地土第1層下に褐色系の粗砂混シルトからなる整地土が堆積しており(整地土第2・3層)、さらにその下層には灰色の粗砂層が調査区南半に堆積する。この粗砂層は畝状に堆積していることから、耕作に関連した堆積土層と考えられる。また、層位の関係から、この粗砂層は第1層と第2層の間に堆積する土層と判断できる。

第3層は約15cmの厚さをもって堆積するにぶい黄色の粗砂混シルトで、弥生時代から中世前期までの遺物を少量含み、包含する遺物の年代から中世前期の遺物包含層であると考えられる。この第3層上面が第2遺構面であり、鎌倉時代から室町時代の遺構を検出した。

第4層は、灰黄褐色の粗砂混シルトで、約30cmの厚さで堆積する。この第4層上面が第3遺構面にあたり、弥生時代中期後半から鎌倉時代の遺構を検出した。

第4層には土層内に極少量の遺物が含まれており、



整地土第1層	2.5Y6/4	(にぶい黄)粗砂混シルト
整地土第2層	10YR6/1	(褐灰)粗砂混シルト
整地土第3層	2.5Y6/6	(明黄褐)粗砂混シルト
粗砂層	5Y4/1	(灰)粗砂
1	N5/0	(灰)粗砂
2	5Y6/1	(灰)シルト混粗砂
3	2.5Y6/3	(にぶい黄)粗砂混シルト
4	10YR5/2	(灰黄褐)粗砂混シルト
5	2.5Y6/2	(灰黄)粗砂混シルト
6	10Y5/1	(褐灰)シルト
7	2.5Y5/2	(暗灰黄)粗砂

第4図 調査地土層柱状模式図

第3遺構面検出の遺構の年代から、弥生時代の遺物包含層と考えられる。

第5層以下については、土坑12・18内において、一部深掘部分を設け、下層の状況を確認した。第5層は灰黄色の粗砂混シルトで、約30cmの厚さを測り、第6層は褐灰色のシルトで、約20cmの厚さを測る。第7層は暗灰黄色の粗砂層で、20cm以上の厚さをもって堆積する。第5層以下については、明確な遺物の出土が確認できなかったため、無遺物層の可能性が考えられる。

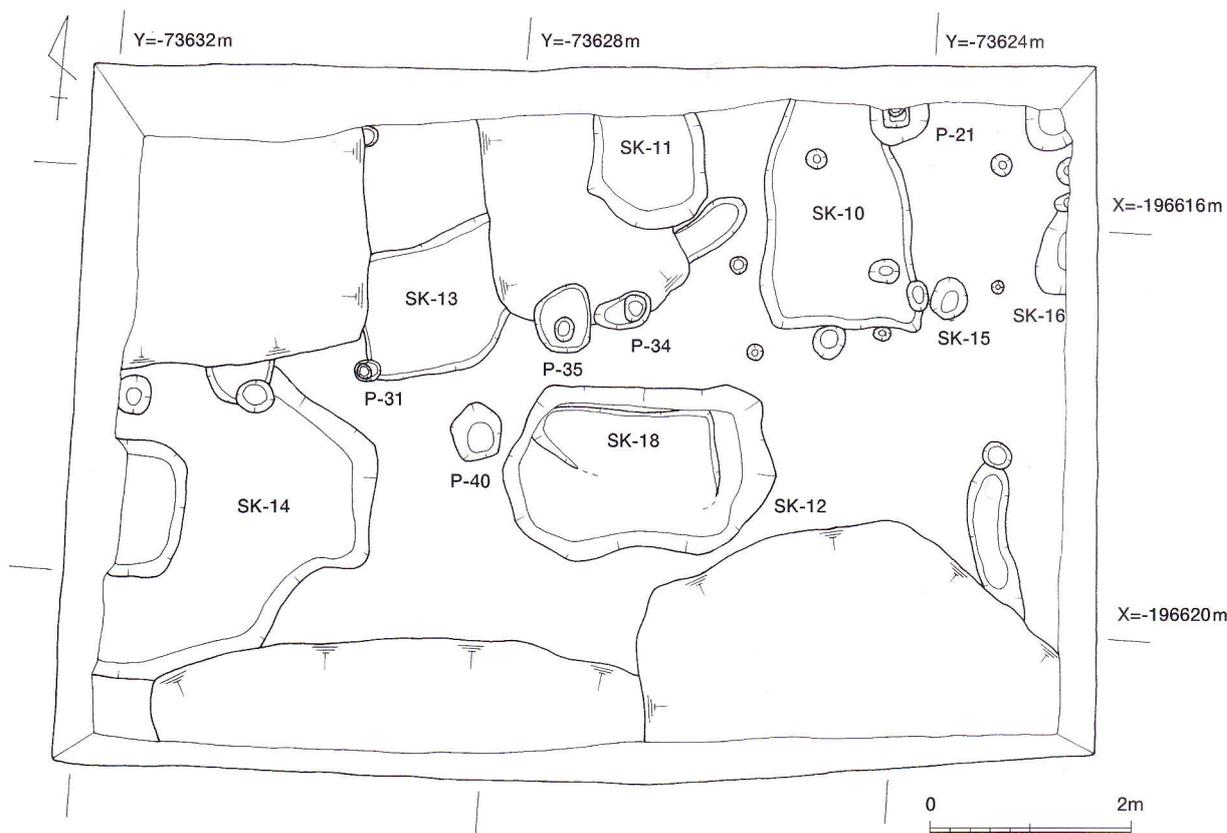
5. 遺構

本調査では、遺構面を3面確認した(第1～3遺構面)。遺構は攪乱が著しい調査区南西部を除くほぼ全面において検出した。まず最下面の第3遺構面では弥生時代中期から鎌倉時代にかけての遺構を検出したが、弥生時代の土坑(SK-14・18・15)からは完形の土器が、古墳時代の土坑(SK-13)からは滑石製紡錘車がそれぞれ出土した。第2遺構面では鎌倉・室町時代の遺構を検出し、調査区北西部において幅2.3m以上を測る規模の大きな溝(SD-3)や井戸(SK-4)などを確認した。第1遺構面は調査期間の都合上、面的な調査は行えていないが、壁面における土層観察から溝状遺構を確認した。

以下、時期の古い遺構から各遺構検出面ごとに説明を行い、主要な遺構については個別に記述を行う。

(1) 第3遺構面検出の遺構 (第5図、図版1の下～2)

第3遺構面は、第4層上面において検出したものである。遺構面の標高は約2.8mを測り、弥生時代中



第5図 第3遺構面遺構全体平面図

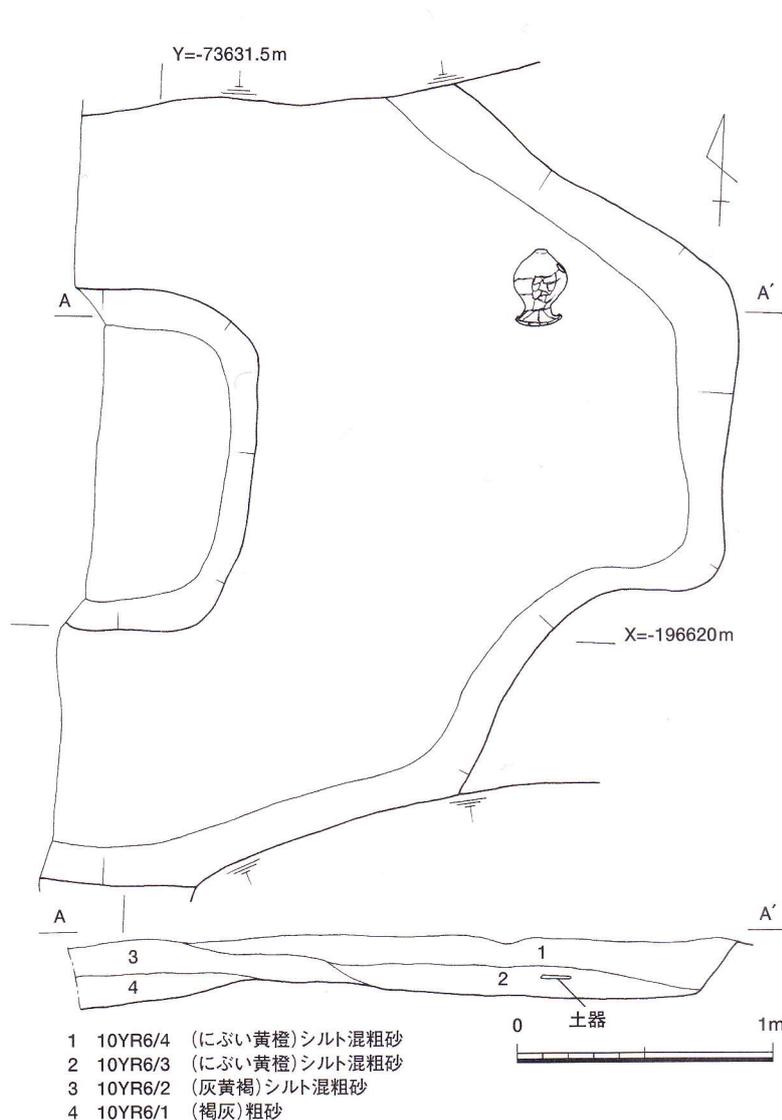
期の土坑4基(SK-10・14・15・18)、古墳時代の土坑1基(SK-13)や中世の土坑3基(SK-11・12・16)、ピット21基などを検出した。ピットの所属時期については明らかなものは少ないが、大半の遺構は鎌倉時代のピットであるP-21・34と覆土が同一のものであることから、その多くは鎌倉時代の遺構であると考えられる。P-35・40は遺存状態が悪いが、やや規模の大きな方形のホリカタをもち、覆土もP-21・34とは異なることから、その時期は鎌倉時代より遡る可能性がある。

[SK-14] (第6図、図版3)

SK-14は、調査区の南西部で検出した不定形な土坑である。北側を上面の遺構により南側を攪乱によって削平されており、西側は調査区外へ延びるため、遺構の規模・形状は明らかではないが、東西2.5m以上、南北3.2m以上、検出面からの深さ30cmを測る。覆土は、東側に黄橙色のシルト混粗砂層が2単位(1・2)、西側には灰黄褐色のシルト混粗砂層(3)が堆積している。また、西側では上層の堆積層(3)下において褐灰色の粗砂(4)によって埋没した土坑状の落ち込みを検出したが、伴出遺物は確認できなかった。出土遺物は弥生土器の壺が少量出土したが、遺構北東部の底面において弥生時代中期の広口壺(第12図1)が口縁部を南側に向け、上部の圧力に潰されているが完形の状態で出土した。この土器の体部中位には1箇所穿孔が認められる。これら出土遺物の年代から、弥生時代中期中葉から後葉にかけての遺構と考えられる。

[SK-18] (第7図、図版4)

SK-18は、調査区の中央部で検出した中世の土坑(SK-12)の下面で検出した遺構である。南側はSK-12の削平により遺存していないが、遺構の規模は東西1.9m以上、南北0.6m以上、検出面からの深さは遺存状況の良好なところで40cmを測る。覆土は2単位に分けられ、上層は褐灰色の粗砂混シルト(10)、下層は灰黄褐色の粗砂混シルト(11)がほぼ水平に堆積している。出土遺物は弥生土器の壺・甕、サヌカイト製のスクレイパーなどが少量出土したが、遺構中央部において上層から口縁部を西側に向けた



第6図 SK-14 遺構平面図及び土層断面図

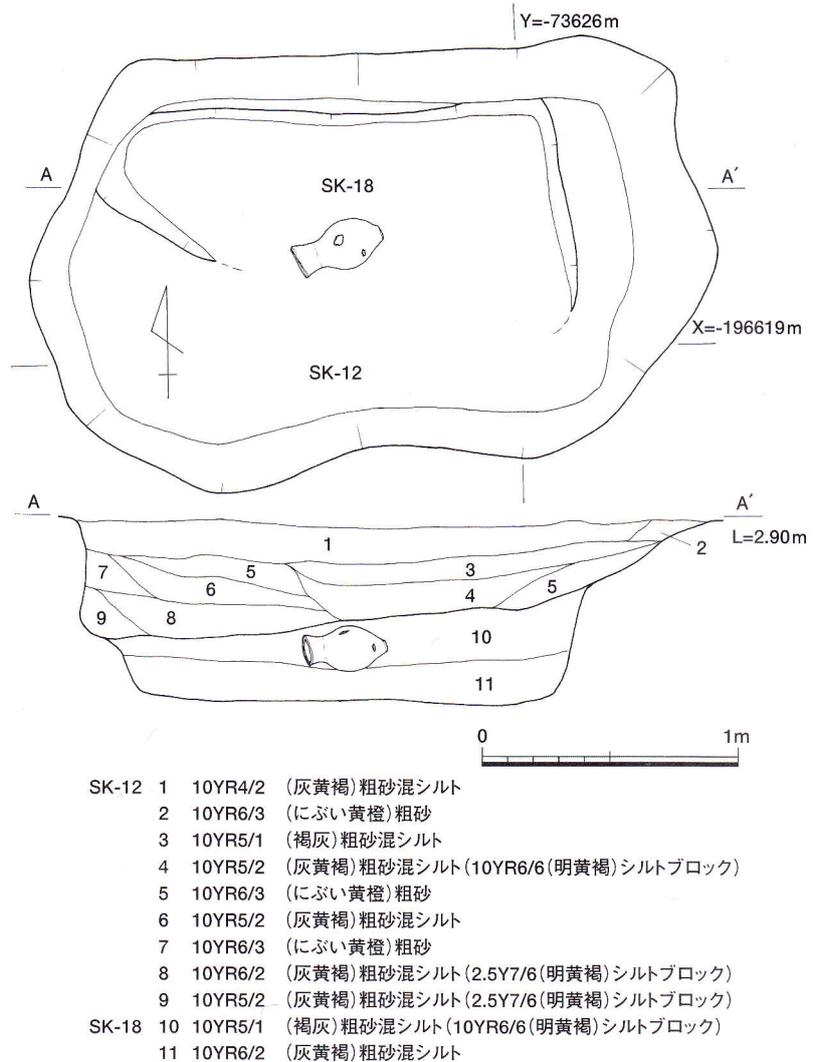
弥生時代中期の直口壺(第12図4)が完形の状態で出土した。この土器の体部上面には、2箇所の穿孔が認められた。これら出土遺物の年代観から、弥生時代中期後葉の遺構と考えられる。

〔SK-15〕(第8図、図版5)

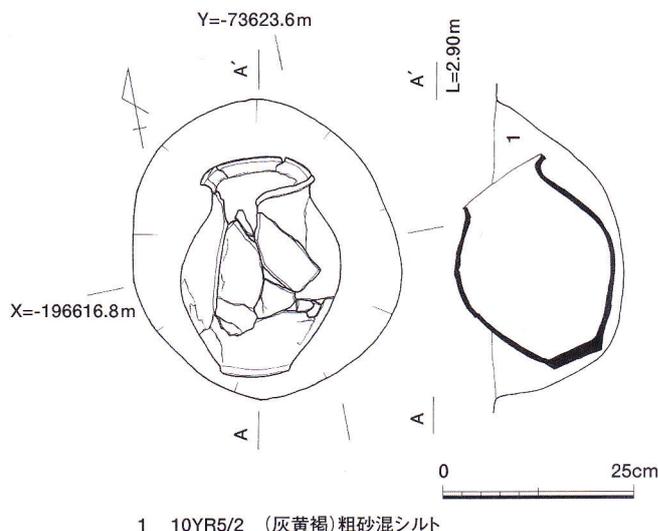
SK-15は、調査区の東部で検出した土器棺と考えられる遺構である。ホリカタは土器が据えられる程度の規模に掘削されており、東西35cm、南北39cm、検出面からの深さ20cmを測る。棺身の可能性がある弥生土器広口壺(第12図9)は口縁部を北に向けて、口縁部側を高く、やや斜位に据えられている。土器の底部はホリカタにほぼ接しており、口縁部側に若干の間隔が認められるが、閉塞の痕跡は確認できなかった。覆土は単層で灰黄色系の粗砂混シルト層である。土器棺内外において、出土遺物は確認できなかったが、広口壺の年代から弥生時代中期後葉の遺構と考えられる。

〔SK-13〕

SK-13は、調査区の中央部やや北西寄り検出した遺構である。遺構の東西を上面の遺構及び攪乱により削平されているが、遺構の規模は東西1.4m以上、南北1.3m、検出面からの深さは15cmを測る。覆土は単層で、褐灰色の粗砂混シルトである。出土遺物は土師器片が少量出土したが、覆土上層からほぼ完形の滑石製紡錘車(第18図55)が1点出土した。



第7図 SK-18・12遺構平面図及び土層断面図



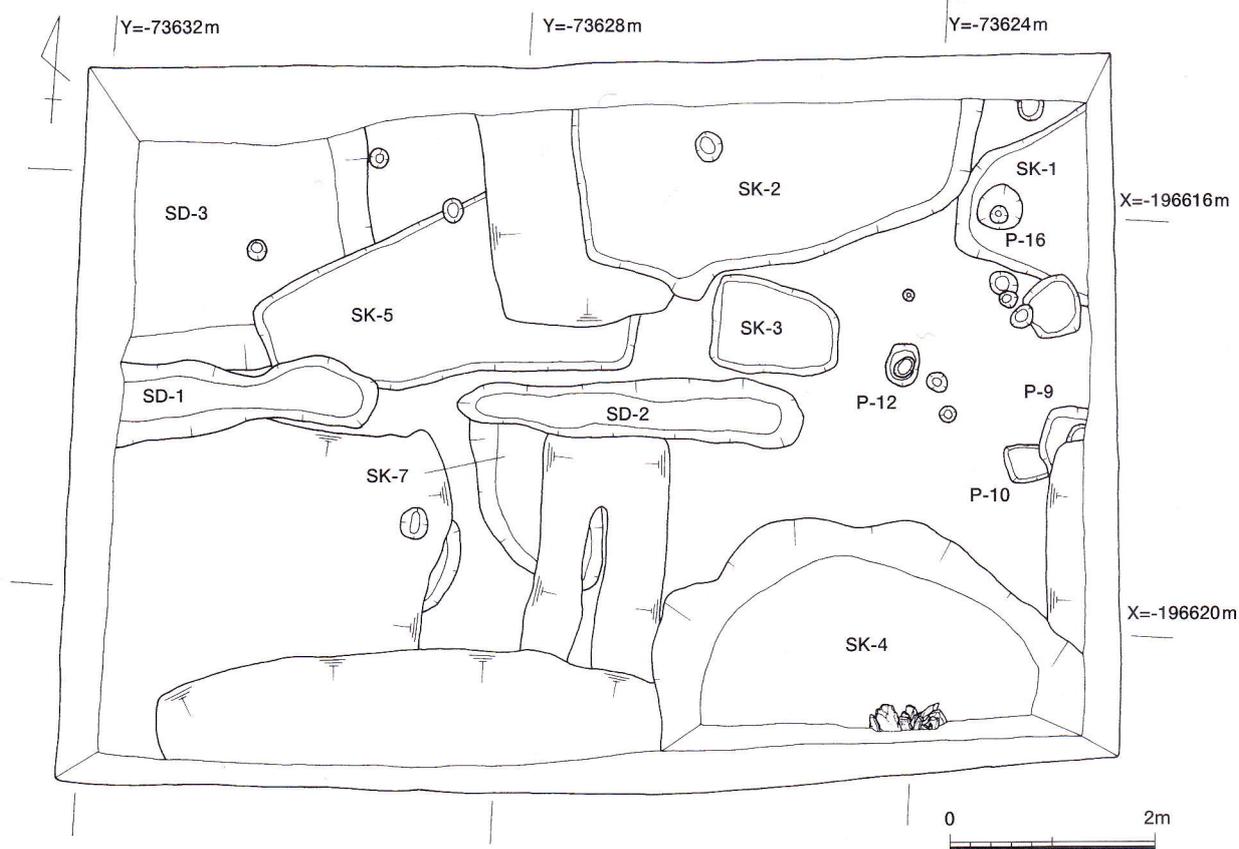
第8図 SK-15遺構平面図及び土層断面図

〔SK-12〕 (第7図、図版4)

SK-12は、調査区の中央部で検出した遺構である。遺構の規模は東西2.5m、南北1.7m、検出面からの深さは50～80cmを測り、南側ほど深く掘削されている。覆土は灰黄褐色・褐灰色の粗砂混シルト層(1・3・4・6・8・9)が堆積し、壁面際にはにぶい黄橙色の粗砂層(2・5・7)の堆積が確認できる。出土遺物は土師器の椀・皿、瓦器の椀・皿、東播系須恵器のこね鉢、中国製青磁、平瓦、砥石、櫛などが一定量出土した。これら出土遺物の年代観から、鎌倉時代の廃棄土坑と考えられ、土層断面の観察から、単一時期に属するものではなく、埋没と掘削を繰り返しながら機能したものと考えられる。

(2) 第2遺構面検出の遺構(第9図、図版6)

第2遺構面は、第3層上面において確認したものであり、遺構面の標高は約2.9mを測る。遺構は、攪乱が著しい調査区南西部を除いて確認でき、鎌倉時代の溝1条(SD-3)、土坑3基(SK-1・3・7)、井戸1基(SK-4)、室町時代の土坑2基(SK-2・5)の他、溝2条(SD-1・2)、ピット17基を検出した。SD-1・2は幅50～80cmを測り、SD-3と直交する方向性をもつ。遺構の方向性が同一であることから同時期の遺構と思われ、SK-5との切り合い関係から室町時代以降に属する時期が考えられる。ピットはその規模・形状から直径30cm未満を測る円形のもの、30cmを越える隅円方形のものがある。時期の明確なものは少ないが、出土遺物の年代から規模の大きな遺構は鎌倉時代の所産であると考えられる。



第9図 第2遺構面遺構全体平面図

[P-12]

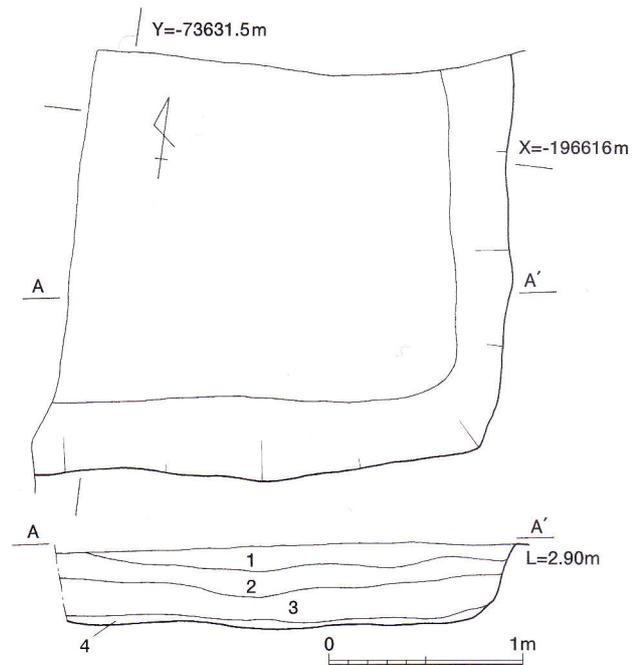
P-12は調査区東部で検出した柱穴である。遺構の規模は東西30cm、南北42cmを測り、遺構の形状は隅円方形を呈する。検出面からの深さは31cmを測り、柱径15~23cmを測る柱痕跡が検出できた。柱痕跡の底面には10cm大の結晶片岩割石を用いた礎盤が確認できた。P-12は掘立柱建物を構成する柱穴の一つであると考えられるが、対応する可能性がある柱穴としてP-9・16が考えられる。P-9・16は上部の遺構及び攪乱による削平のため遺存状態に問題があるが、同一の建物を構成する柱穴と仮定した場合、その柱間はともに1.8mである。

[SD-3] (第10図、図版7)

SD-3は、調査区の北西部で検出したもので、調査区北・西壁外へさらに延びる。遺構の規模は東西2.3m以上、南北2.5m以上、検出面からの深さは46cmを測る。検出範囲では土坑状の形状であるが、北隣の調査地で検出された堀状遺構の延長部と考えられることから、溝と判断した。遺構の東壁は垂直ぎみに掘削されているが、南側は緩やかに立ち上がる。覆土は4単位に分けられ、最上層が灰黄褐色の粗砂混シルト層(1)で、それより下層は褐灰色の粗砂混シルト層(2・3)が堆積しているが、最下層には青灰色粗砂層(4)の薄い堆積が認められた。上層の堆積が西側にむけて立ち上がっている状況から、遺構の西壁外への立ち上がりも近くに想定することができる。出土遺物は、覆土内から土師器の碗・皿・釜、瓦器碗が少量出土した。

[SK-4] (第11図、図版8)

SK-4は、調査区の南東部で検出したもので、検出面から80cm下面で結晶片岩の割石を小口積みした石組を検出したことから、石組井戸であることが明らかになったものである。遺構の平面形はやや不定な円形を呈し、調査区南・東壁外へ延びるため、全体の規模は不明であるが、東西4.1m以上、南北2.1m以上を測る。本来は、直径5m程度の円形のホリカタをもつ遺構と推定される。ホリカタは垂直ぎみに掘削され、褐灰色と明黄褐色のシルト層がブロック状に堆積する土層(5~8)が裏込め土として堆積する。石組の上面は、垂直の掘り込みによって石材の抜き取りが行われており(3・4)、最終的に裏込め土に類似した土層(1・2)により埋没している。また、この抜き取り穴には、抜き取られた結晶片岩の割石が一定量含まれていた。出土遺物は、石材の抜き取り穴及び裏込め土から弥生土器、土師器碗・



- 1 10YR4/2 (灰黄褐)粗砂混シルト(10YR5/4(にぶい黄褐)粗砂混シルトブロック)
- 2 10YR5/1 (褐灰)粗砂混シルト(10YR5/4(にぶい黄褐)粗砂混シルトブロック)
- 3 10YR4/1 (褐灰)粗砂混シルト(10YR4/3(にぶい黄褐)シルトブロック)
- 4 10YR5/1 (褐灰)粗砂混シルト(5B6/1(青灰)粗砂混じり)

第10図 SD-3遺構平面図及び土層断面図

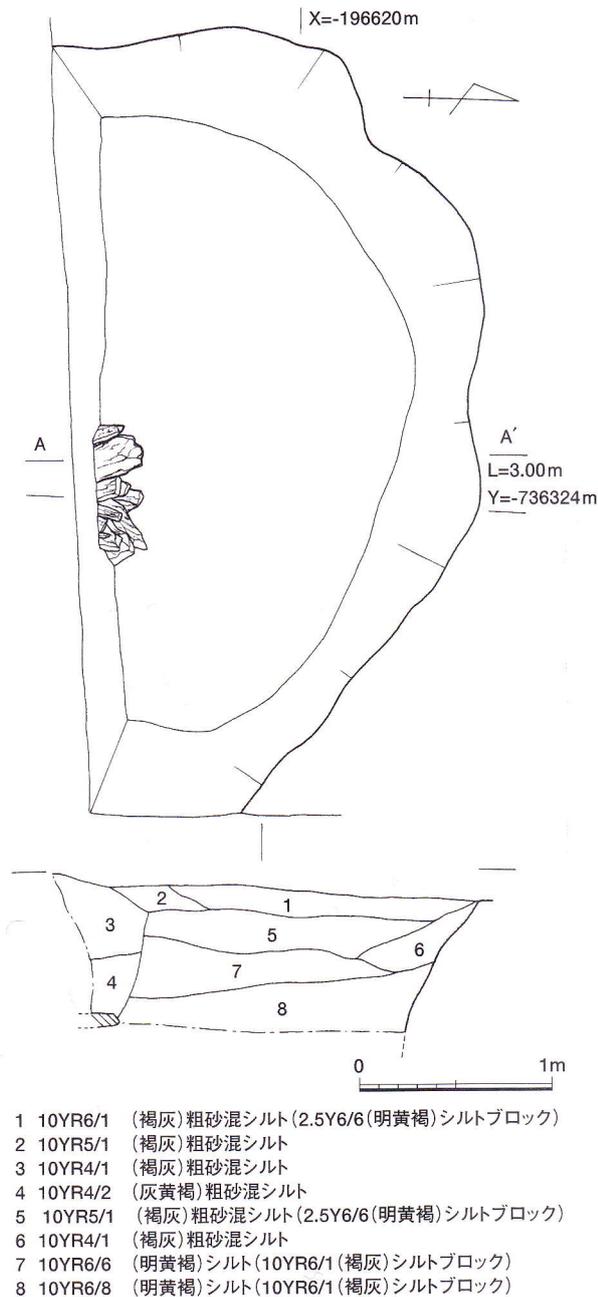
皿、東播系須恵器のこね鉢・甕、瓦器碗、備前焼甕、中国製青磁、平瓦などが一定量出土した。
〔SK-2〕

SK-2は、調査区の北東部で検出した遺構である。遺構は北壁外へ延びるため、全体の規模は不明であるが、東西4.0m以上、南北1.9m、検出面からの深さは12cmを測る。覆土は単層で、褐灰色の粗砂混シルトである。出土遺物は土師器の皿や須恵器、瓦質土器の播鉢などが少量出土しており、室町時代前期の遺構と考えられる。

その他、鎌倉時代の遺構として龍泉窯系青磁碗が出土した SK-3、室町時代の遺構として瀬戸・美濃系施釉陶器の平碗や常滑焼の甕が出土した SK-5などの遺構がある。

(3)第1遺構面検出の遺構

第1遺構面は、第2層上面から切り込む遺構であり、遺構面の標高は約3.1mを測る。第1遺構面については調査期間の都合上、面的な調査は行っておらず、壁面における土層の観察から部分的に近世以降と考えられる溝状遺構を確認したものである。溝状遺構は幅約40cm、深さ10cm未満を測る浅いものであり、覆土は単一で、灰黄褐色のシルト混粗砂層である。



- 1 10YR6/1 (褐灰)粗砂混シルト(2.5Y6/6(明黄褐)シルトブロック)
- 2 10YR5/1 (褐灰)粗砂混シルト
- 3 10YR4/1 (褐灰)粗砂混シルト
- 4 10YR4/2 (灰黄褐)粗砂混シルト
- 5 10YR5/1 (褐灰)粗砂混シルト(2.5Y6/6(明黄褐)シルトブロック)
- 6 10YR4/1 (褐灰)粗砂混シルト
- 7 10YR6/6 (明黄褐)シルト(10YR6/1(褐灰)シルトブロック)
- 8 10YR6/8 (明黄褐)シルト(10YR6/1(褐灰)シルトブロック)

第11図 SK-4遺構平面図及び土層断面図

6. 遺物

今回の調査で出土した遺物は、各時代の遺構の覆土や遺物包含層から遺物収納コンテナ数にして5箱分が出土した。

出土遺物は弥生時代から江戸時代にいたる各時期のものがあり、弥生土器、土師器、須恵器、黒色土器、中世土師器、中世須恵器、瓦器、瓦質土器、備前焼、常滑焼、瀬戸・美濃系陶器、輸入陶磁器、肥前系陶磁器、瓦、石器、石製品、金属製品、木製品、自然遺物などが出土した。出土遺物の大半は、鎌倉時代を中心とする中世の遺物によって占められるが、その中でも弥生時代の遺物ではSK-15から土器棺に使用された弥生土器や、SK-14・18からは体部に穿孔を施した完形の土器が出土し、またSK-13からは古墳時代のものと考えられる滑石製の紡錘車など、特筆される遺物の出土があった。

本報告ではこれら出土遺物の内、土器については各時代に分類して述べたが、弥生時代と鎌倉時代の土器については遺構出土のものを個別に、その他の時代の土器については一括して記載し、その後には瓦、石器・石製品、木製品の順で記述した。

(1) 弥生時代の土器

第12図に掲載した弥生土器は、第3遺構面検出の弥生時代の遺構から出土したものである。以下、遺構単位ごとに記述を行う。

〔SK-14出土土器〕(第12図1～3、図版10)

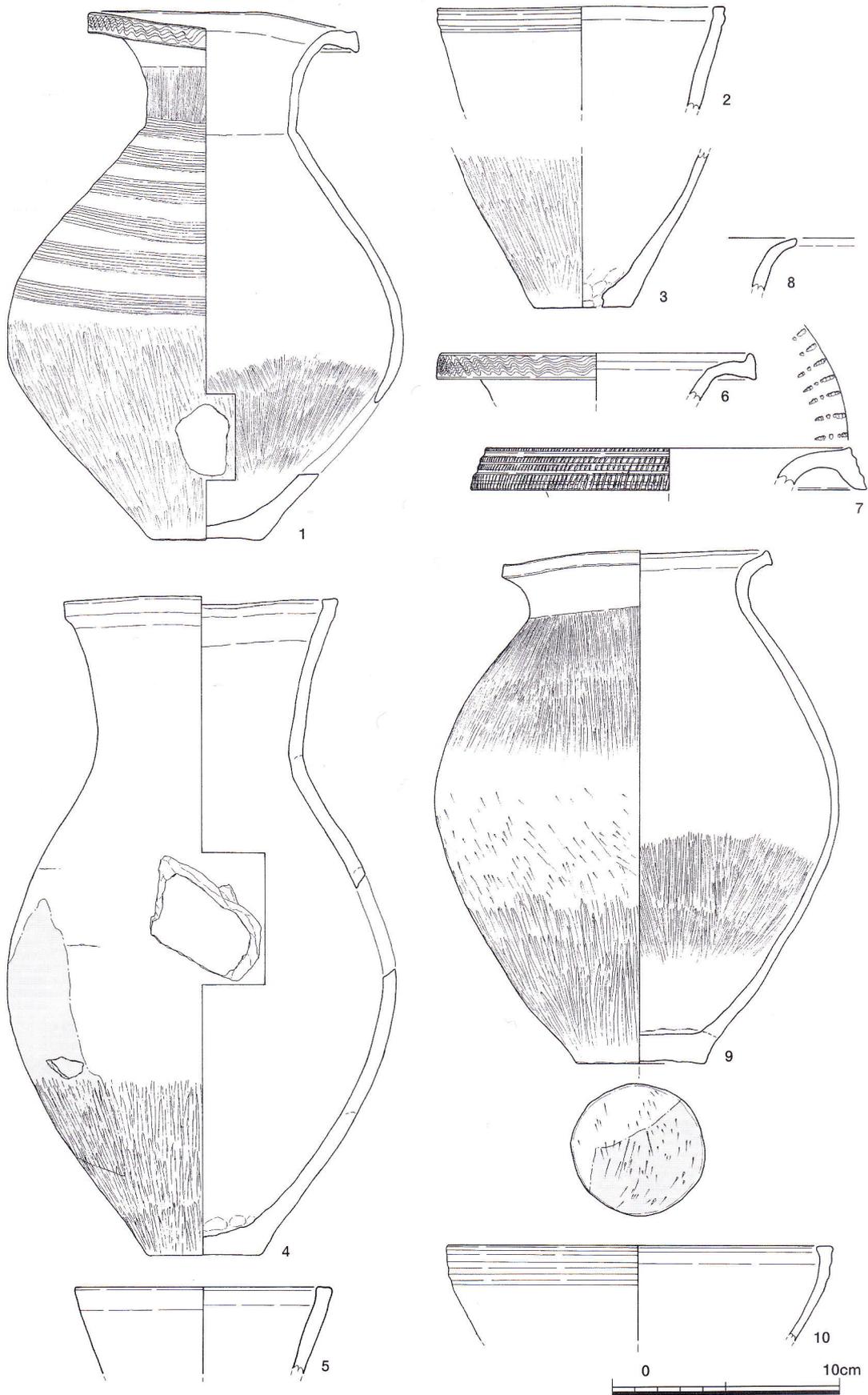
1はSK-14の底面から出土した完形の広口短頸壺であり、口径13.8cm、器高27.1cm、底径5.6cmを測る。形態的には体部中位の張り出しがやや強いものであり、口縁部は外反しながらひらき、端部はやや肥厚する。外面は頸部をタテハケの後、口縁部をナデ調整し、体部はナデ調整の後、下半部のみタテ方向のヘラミガキによって仕上げる。内面は下半部にタテハケを施し、上半部はナデ調整である。口縁部外端面はクシ描波状文によって加飾され、体部上半には6条のクシ描直線文が施される。また、体部には焼成後に外面側から1ヶ所の穿孔が施されており、穿孔の範囲は長辺3.7cm、短辺2.4cmを測る。2は直口壺であり、口径14.6cmを測る。内外面ともにナデ調整の後、口縁端部には2条の凹線文を施すものである。3は2と同一個体と考えられる壺の底部であり、底径5.6cmを測るもので、外面にはタテ方向のヘラミガキ調整が行われている。また、この土器には底部中央に焼成前の穿孔が行われている。穿孔は工具によるものではなく、指オサエによって行われており、その痕跡が底部内面に残っている。

〔SK-18出土土器〕(第12図4～8、図版10)

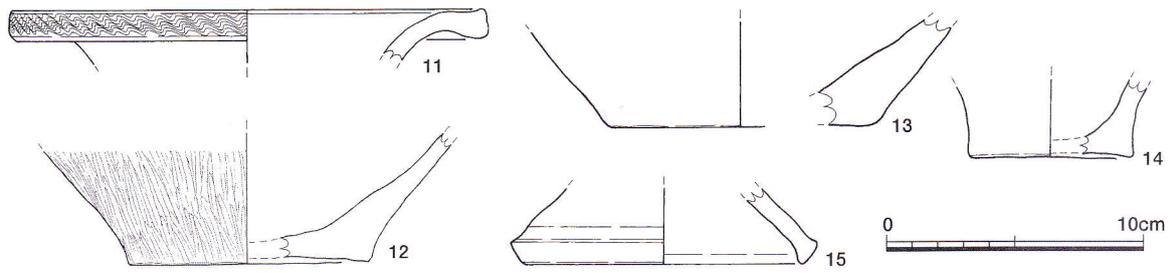
4・5は、直口壺である。4はSK-18の下層から出土した完形のものであり、口径13.6cm、器高34.1cm、底径5.8cmを測る。内外面ともにナデによる調整を基本としているが、外面体部下半のみタテ方向のヘラミガキで仕上げている。口縁部はやや外反しながら立ち上がり、端部に至って直立する形態のものであり、口縁部外端部はヨコナデ調整によって凹線状に窪んでいる。この土器には体部中位に1ヶ所、体部中位よりやや下方の位置に1ヶ所それぞれ穿孔がみられ、いずれも焼成後に施されている。上方の穿孔は長辺7.0cm、短辺4.0cm、下方の穿孔は長辺3.5cm、短辺1.3cmの範囲で行われている。5は口径12.8cmを測るものであり、口縁端部に強いヨコナデ調整の痕跡がみられる。6・7は、広口壺である。6は口径16.0cmを測り、口縁端部を上方に大きく拡張させる形態のものであり、外端面はクシ描波状文によって加飾されている。7は口径20.4cmを測り、口縁端部が垂下する形態のものである。外端面は4条の凹線文の後、タテ方向の刻み目を密に施すものであり、上端面は列点文によって加飾されている。8は紀伊型甕の口縁部片であり、口縁端部はやや丸みのある形態を呈する。

〔SK-15出土土器〕(第12図9、図版10)

9はSK-15から出土した土器棺墓の棺身に使用されていた無文の広口壺であり、口径13.4cm、器高26.5cm、底径6.6cmを測る。この土器は、体部中位を境として上下で調整技法が異なっている。まず底部は、やや厚みのあるものであり、外面はタテ方向のヘラケズリの後、ヘラミガキが施されており、内面はタテ方向のハケ調整を施している。また、ヘラケズリは底部外面にも及んでいる。口縁部側は短い頸部にやや外反する口縁部を有し、端部は僅かに肥厚する形態を呈する。外面はタテハケの後、ヨコナデによって調整し、内面はナデによる調整である。



第12図 遺物実測図 1



第13図 遺物実測図2

〔SK-10出土土器〕（第12図10、図版10）

10は口径19.8cmを測る鉢の口縁部で、端部は直立し、内外にやや拡張する。調整はナデによるものであり、端部には3条の凹線文が施される。

〔包含層他出土土器〕（第13図11～15、図版10）

第13図に掲載した弥生土器は、包含層及び他の時期の遺構から混入遺物として出土したものであり、以下一括して記述を行う。

11～13は、壺である。11は口径18.4cmを測る広口壺で、口縁端部はやや肥厚し、外端面はクシ描波状文によって加飾される。12・13は、底部である。12は底径9.4cmを測り、外面の調整としてタテ方向に緻密なヘラミガキを施したものである。13は底径10.0cmを測り、器壁が厚手な個体である。14は、底径6.2cmを測る紀伊型甕の底部である。残存部にはヘラケズリはみられず、ナデによって調整されている。15は高杯の脚部と考えられるもので、脚部径11.0cmを測り、端部は上下にやや拡張するものである。

これらの出土位置は、11・13～15がSK-4、12が第3層からそれぞれ出土した。

以上、本調査出土の弥生土器は、いずれも胎土中に石英・結晶片岩を含む在地系のものであり、年代的には畿内第Ⅲ様式新段階から第Ⅳ様式に併行するものと考えられる。

（2）奈良・平安時代の土器（第14図、図版11）

16は、土師器杯蓋のつまみ部である。つまみの直径は2.4cmを測り、中央はやや窪み、端部はナデ調整によってやや上方に引き上げられている。

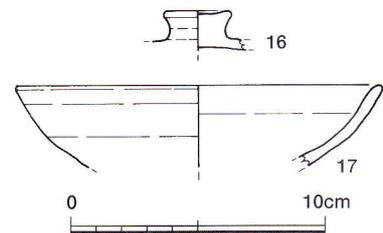
17は口径14.4cmを測る土師器の椀で、口縁端部はやや肥厚ぎみである。ロクロ成形であるが、ロクロ目は顕著ではない。

これらの出土位置は、16・17ともにSK-4である。

（3）鎌倉時代の土器

〔SK-12出土土器〕（第15図18～28、図版11）

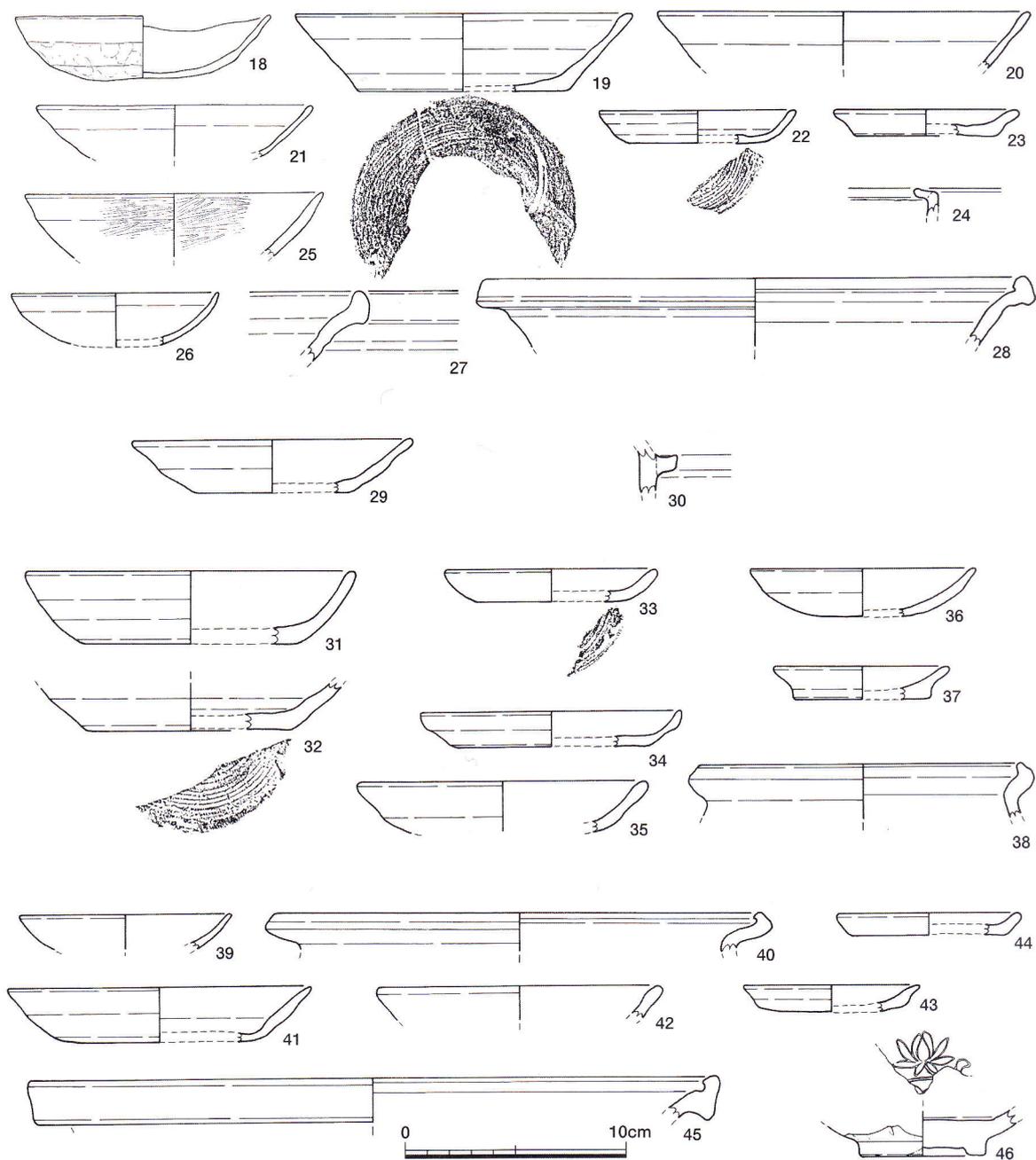
18～23は、土師器の皿である。18は手づくね成形のものであり、底部に指オサエの痕跡を顕著に残している。法量は口径11.5cm、器高3.0cmを測り、口縁部は歪みが著しい。19は底部が平底で、回転糸切りの痕跡を残す大皿である。口縁部は外上方に直線的にのび、端部はやや肥厚し、丸くおさめる。20は19と同形態の大皿と考えられ



第14図 遺物実測図3

るものであり、口径は16.8cmを測る。21は口径12.2cmを測り、器壁が薄手なつくりのものである。口縁端部は19・20と同じく、やや肥厚ぎみに丸くおさめる。22は底部に回転糸切り痕を残す小皿であり、口縁部は外上方に直線的にのびる。厚手なつくりのもので、口縁部は強いヨコナデ調整によって外反する。24は土師器の釜である。口縁部は内側に屈曲し、端部は上方につまみ上げられる。また、外面には煤の付着が認められる。

25・26は、瓦器である。25は口径13.6cmを測る椀であり、口縁部は強いヨコナデ調整によってやや外反する。内外面は磨滅のため不明瞭であるが、僅かにヘラミガキの痕跡が確認できる。26は口径7.4cmを測る皿であり、器壁は薄手なつくりのものである。



第15図 遺物実測図 4

27・28は、東播系須恵器のこね鉢である。27・28ともに口縁部は肥厚し、上方に大きく拡張させる形態のものである。28の口縁形態はやや異形なものであるが、肥厚させた口縁端部を内側に巻き込む形態を呈する。

〔SD－3 出土土器〕（第15図29・30、図版11）

29は口径16.6cm、器高2.5cmを測る土師器の大皿であり、ナデと指オサエによって成形した後、口縁部を強いヨコナデによって外反させるものである。30は土師器釜の鏝部であり、鏝以下には煤の付着が認められる。

〔SK－4 出土土器〕（第15図31～38、図版11）

31～37は土師器の皿で、31～33は底部に回転糸切り痕を残すものである。31・32は大皿で、器壁が厚手なつくりのものであり、31は口縁部が外上方にのび、端部をそのまま丸くおさめる。33は小皿であり、口径9.4cm、器高1.5cmを測る扁平な形態のものである。34は平底であることから、回転台成形の可能性があるものであり、底部際は強いヨコナデ調整によって大きく窪む。35～37は、口縁部をヨコナデ調整によって外反させる形態のものである。35は口径12.8cmを測り、器壁が厚く口縁端部は肥厚し、丸くおさめる。36の器形は丸みのある形態を呈し、ヨコナデ調整によって口縁部はやや外反する。37は平底の底部に口縁部を短く外反させるもので、底部は糸切り痕をナデ消したものと考えられる。38は、口径14.4cmを測る土師器の釜である。口縁部は外反し、端部は大きくつまみ上げられ、上方に拡張させるものである。

〔P－9 他出土土器〕（第15図39～46、図版11・12）

39・40は、P－9から出土した土器である。39は口径9.4cmを測り、器壁が薄いつくりの土師器の小皿である。40は口径21.8cmを測る土師器釜の口縁部であり、端部を内側に強く巻き込む形態のものである。41はP－10から出土した土師器の大皿であり、体部に比べ底部はやや薄くつくられている。42・43は、P－12から出土した土器である。42は口径12.8cmを測る土師器の皿であり、口縁端部は丸みのある形態を呈する。43は口径8.0cm、器高1.2cmを測る瓦器の皿で、口縁部を強いヨコナデによって外反させるものである。44はP－31から出土した土師器の皿であり、口径8.0cm、器高1.0cmを測る扁平な形態のものである。

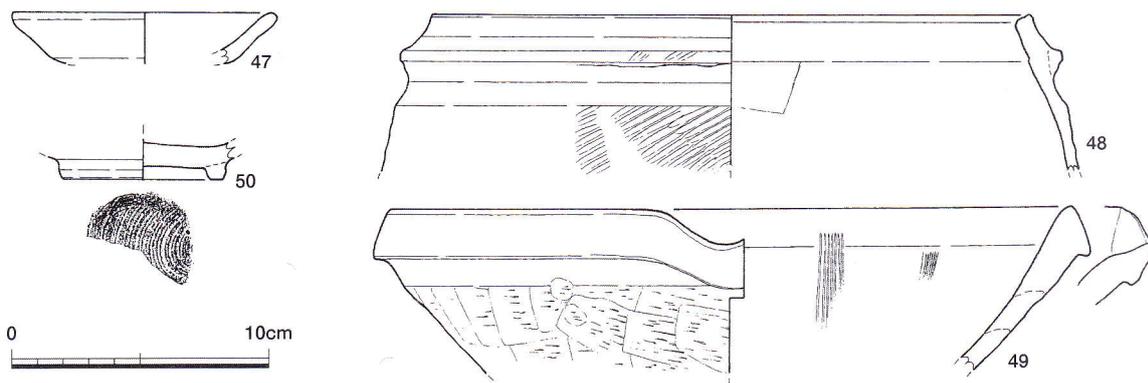
45は常滑焼の甕であり、口径は31.0cmを測る。口縁端部は2.0cmと狭いものであり、口縁端部は上方に拡張する。SK－5から出土した。

46は、底径5.4cmを測る龍泉窯系青磁の鎬蓮弁文碗である。底部は肉厚に削り出されており、蓮弁を片切りによって、鎬を面取りによって表現するものである。内底面には刻花文として、蓮華文が彫られている。施釉はかけ流しであり、部分的に高台畳付にも及ぶ。SK－3から出土した。

（4）室町時代の土器（第16図、図版12）

47は、口径10.2cmを測る土師器の皿である。器壁は厚手なつくりのものであり、口縁部はヨコナデ調整によってやや外反する。SK－2から出土した。

48は、口径23.2cmを測る土師器の鍋である。外面はタタキによる成形が行われているが、タタキは部分的に突帯にも及んでいる。内面はナデ調整であるが、一部に板状工具による調整の痕跡がみられる。また、突帯以下には煤の付着が認められる。SK－12から出土した。



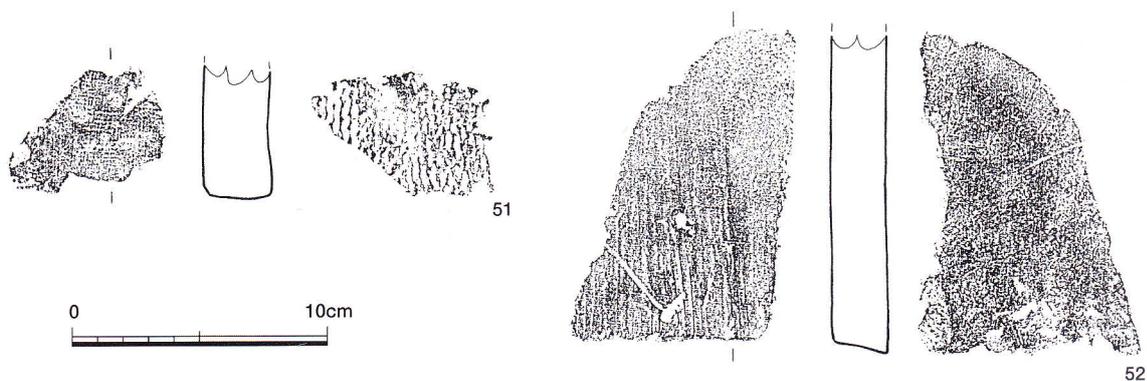
第16図 遺物実測図5

49は、口径26.8cmを測る瓦質土器の播鉢である。体部をヨコ方向のヘラケズリによって調整した後、口縁部をナデ調整によって仕上げている。内面には7条を1単位とする播目がみられるが、使用によって目は細くなっており、下部は磨耗して消えている。SK-2から出土した。

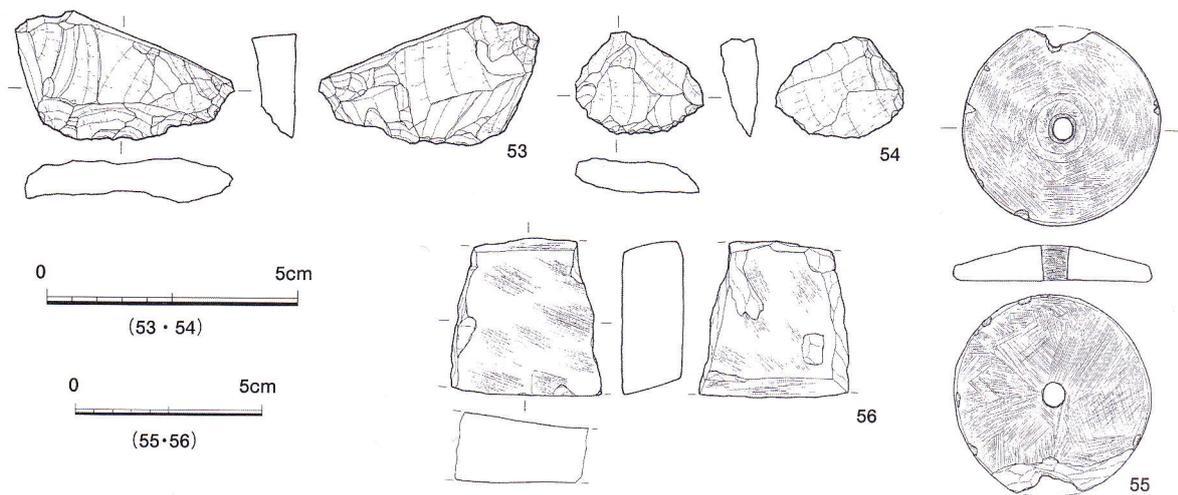
50は底径6.2cmを測る瀬戸・美濃系施釉陶器の平碗であり、釉は内面に厚く施されている。高台は貼り付けによるもので、内底面は未調整であり、糸切り痕をそのまま残している。外面及び高台畳付には、部分的に重ね焼きの痕跡が確認できる。SK-5から出土した。

(5)瓦 (第17図、図版12)

51・52は、平瓦である。51は、厚さ2.5cmを測る厚手なつくりのものである。凸面には粗い縄叩き痕がみられ、凹面は磨滅のためやや不明瞭であるが、布目の痕跡が認められる。胎土中には赤色軟質粒の他、片岩・石英を一定量含んでいる。52は凹凸両面ともに、板ナデによって調整するものであり、端面は糸切り痕をそのまま残しており、未調整である。また、凹面には離れ砂の付着が確認できる。52の胎土中には白色砂粒の他、砂岩の円礫が少量含まれている。これらの出土位置は、51・52ともに SK-4である。



第17図 遺物実測図6



第18図 遺物実測図 7

(6)石器・石製品 (第18図、図版12)

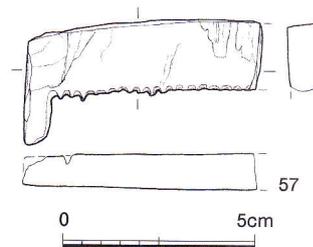
53・54は、サヌカイト製のスクレイパーである。53は長さ4.4cm、幅2.2cm、厚さ0.9cmを測り、重量は10.4gである。やや厚みのある板状素材に、右側縁及び下部を中心に細部調整を施し、刃部をつくり出している。調整は左から右に向けて施されており、上縁の稜角には刃潰しが行われている。54は長さ2.5cm、幅2.1cm、厚さ0.8cmを測り、重量は4.0gである。両面ともに大剥離面を多く残す板状素材の右側縁及び下部を中心に細部調整を施し、刃部をつくり出す。調整は53と同様に左から右に向けて施されており、大剥離面との境界の主要な上縁の稜角には、刃潰しが行われている。これらの出土位置は、53がSK-18、54がSK-1からそれぞれ出土した。

55はSK-13出土の載頭円錐形を呈する紡錘車で、一部を欠損するがほぼ完形である。直径5.3～5.4cm、高さ0.9cm、円孔径0.7～0.8cmを測り、重量は33.4gである。石材は滑石であり、一部には緑灰色の縞が認められる。

56は、SK-12出土の砥石である。石材はやや黄味のある白色を呈する石灰岩質のものであり、欠損部を除く全面にほぼ一定方向の擦痕が認められる。また、上縁部は使用により、やや弧状を呈している。

(7)木製品 (第19図、図版12)

57はSK-12から出土した横櫛であり、残存幅6.3cm、高さ3.3cm、厚さ1.0cmを測る。側縁は直線的であるが、背はやや曲線的な形態を呈する。歯は全て欠損しているが、背と歯の境には切り通し線は認められない。



第19図 遺物実測図 8

7. まとめ

今回の調査地点は既往の調査の中で最も西側の地点にあたり、(財)和歌山県文化財センターが実施した北側隣接地の調査成果と合わせ、遺跡西部の様相を明らかにする成果が得られた。北側隣接地の調査では、部分的に遺存しているものを含め、本来的には5面の遺構面が存在することが確認されている。本調査では3面の遺構面を検出したが、各遺構面に属する遺構の年代を検討し、弥生時代から中世までの遺構面について、北側隣接地と対応させたものが第20図である。北側隣接地第Ⅰ・Ⅱ遺構面が本調査第1遺構面に、北側隣接地第Ⅲ新遺構面が本調査第2遺構面に、北側隣接地第Ⅲ・Ⅳ遺構面遺構面が本調査地第3遺構面検出の中世の遺構に、北側隣接地第Ⅴ遺構面が本調査第3遺構面検出の奈良時代以前の遺構にそれぞれ対応するものと考えられる。以下、本調査地の成果について、北側隣接地の成果もあわせ、各時代ごとに記述を行う。

まず弥生時代の遺構では土坑3基(SK-10・14・18)、土器棺墓1基(SK-15)を検出した。これらの遺構は、出土した土器の特徴からいずれも中期中葉から後葉にかけての時期のものである。北側隣接地の調査地で検出された弥生時代の遺構は、溝135N・135S、溝146、土坑117があり、時期的には本調査のものと同時期の遺構群である。このことから、本調査地周辺における土地利用は弥生時代中期中葉以降に本格化するものと考えられる。秋月遺跡では近年の遺跡東端部における調査によって、前期の石器製作土坑や自然流路、壺棺の可能性のある土坑などが検出され、前期集落の存在が明らかになっている。しかし、この地点では遺構・遺物の出土は前期段階に限られ、中期以降には継続しない。また、秋月遺跡の他の地点においても弥生時代の遺構・遺物の出土はほとんどないことから、本調査地を含む遺跡西部は太田・黒田遺跡との関連で理解するのが妥当である。

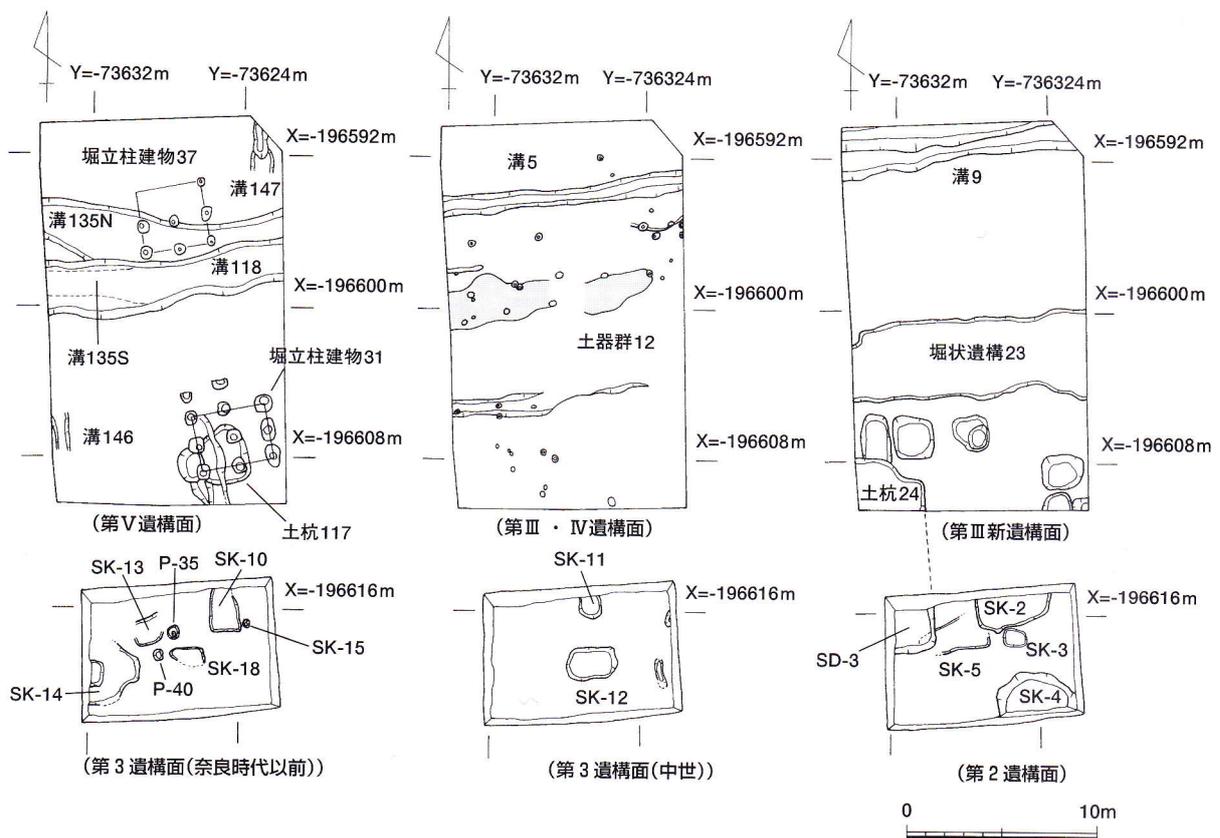
また本調査では、土器棺墓及び遺構廃絶期に意識的に埋納されたと考えられるSK-14・18出土の穿孔土器の存在や、北側隣接地溝146からも完形に近い状態の壺が直立した状態で出土しているなど、調査地周辺の性格は居住域とは異なる墓域的な性格をもつ地域ではないかと考えられる。太田・黒田遺跡で検出されている土器棺墓の検出地点は、近年遺跡北西部の第48次調査で土器棺墓7基が密集して検出されるなど、大半が遺跡の周縁部で検出されている。本調査地の北西300mの位置にあたる太田・黒田遺跡第28次調査では、土器棺墓とともに穿孔された完形の土器を伴う溝などが検出されており、墓域と判断されているが、本調査地の遺構の在り方と極めてよく似た様相を呈している。今回の調査は、太田・黒田遺跡の空間構造を考える上で新たな成果と言え、太田・黒田遺跡における中期集落の拡大に伴い、墓域が本調査地周辺を含む縁辺部にまで及んだことを示すとともに、中期段階の集落の拡大する範囲の南限が本調査地周辺まで及んでいることを示唆する成果であると言えよう。

次に古墳時代の遺構としては、北側隣接地において古墳時代前期の溝(溝118)が確認されている。本調査における当該期の遺構としては、滑石製紡錘車出土した土坑SK-13のみを確認したが、他の遺構の覆土に混入した遺物として土師器甕や須恵器の杯蓋・壺・甕などが出土していることから周囲に削平された遺構の存在が考えられる。SK-13出土の滑石製紡錘車については、線刻による装飾がなく、和歌山県内の出土事例の中でも大型であるという特徴が指摘できる。時期を特定する伴出遺物はないが、紡錘車を含む滑石製模造品の出土は県内では5世紀中葉から6世紀前半に盛行時期が

指摘されていることは時期決定の参考になる。また、秋月遺跡における滑石製模造品の出土は、白玉や子持勾玉の出土はあるが、紡錘車の出土は初例である。滑石製模造品は、紀氏の祭祀場であったとされる日前・国懸神宮周辺に分布圏の中心があり、本事例もその関連遺物の一つとして評価することができる。

古代では、北側隣接地において奈良時代の総柱建物が2棟(掘立柱建物31・37)検出されており、両建物の構造が同一であることから計画的につくられた倉庫状建物と考えられている。本調査ではこれに対応する明確な遺構は確認できていないが、可能性のある遺構として、方形のホリカタをもつP-35・40を検出した。この遺構は削平が著しいことから、明確な時期を決定する遺物の出土はなかったが、中世のピットとは異なる覆土をもつものであり、同様な掘立柱建物を構成するピットの蓋然性は高いと考えられる。また、その他に土師器の杯蓋や須恵器の杯、黒色土器、瓦などの遺物が出土しており、古墳時代と同様に周囲に削平された遺構の存在が想定できる。

中世では比較的多くの遺構・遺物を検出し、ピット群の大半はこの時期の遺構であると考えられる。中世の遺構の内、まず第3遺構面検出の遺構(SK-12)が時期的に12世紀後半から13世紀代にかけての遺構と判断でき、北側隣接地第Ⅲ遺構面検出の溝5及び土器群12と同時期に位置づけられるものと考えられる。溝5及び土器群12からは完形の土師器皿を主体とする土器類が多量に出土しており、その出土状況から間断なく投棄され、土器投棄を必要とする儀式の遺構であると判断されている。また、同様な事例は本調査地の東150mの地点にあたる向陽高校校地内の調査においても確認されており、平安時代後期の屋敷地を区画する「コ」の字形の配置をとる溝からは、多量の土器類が出土



第20図 遺構面对应図

している。これらの事例から、秋月遺跡西部においては12世紀から13世紀にかけて、膨大な量の食器類を消費した特異な性格をもつ集落の存在が想定される。

中世の遺構の内、第2遺構面検出のものは13世紀後半から14世紀代にかけての遺構と考えられるSD-3、SK-3・4と、その埋没後に掘削され、15世紀前半代の遺構と考えられるSK-2・5の2時期に大別することができる。北側の隣接地との対応関係ではSD-3、SK-3・4が堀状遺構23・土坑24に、SK-2・5が溝9にそれぞれ対応する時期の遺構と判断できる。

この中で特に注目できる成果は、調査区北西部で検出したSD-3である。SD-3は、北側隣接地調査土坑24との関連が考えられる。両遺構を比較すると、遺構底面の比高差が約1mあり、SD-3が土坑24に比べ出土遺物が極めて少ないなどの相違点があるが、ほぼ垂直に掘削されているという遺構の形状や14世紀前後に機能し始め、15世紀前半には埋没しているという年代観が一致すること、その位置関係から同一遺構の可能性も考えられる。仮に同一遺構と仮定した場合、SD-3は南北方向に9.6m、東西2.3m以上の規模をもち、土坑24が堀状遺構23と相互に関連した遺構であるとされていることから、SD-3と北側隣接地土坑24も堀状の性格を有する可能性が考えられる。本調査地周辺には、堀状遺構とそれに関連した溝状遺構に囲まれた居住空間の存在を想定することができ、本調査地で検出した井戸や礎盤を有するピット(P-12)などはそれに関わる遺構と考えられる。

近世以降は、第1遺構面において耕作に関連するとみられる溝状遺構を確認した点や、北側隣接地第I遺構面においても鋤溝や畦畔などの水田関連遺構が検出されており、本調査地周辺は近世以降に耕地化していくものと考えられる。

以上のように、今回の調査では弥生時代から近世にかけての遺構・遺物を検出し、各時代の様相を把握することができた。特に弥生時代と中世において良好な資料が得られ、秋月遺跡西部の様相を検討する上で貴重な成果になると言えよう。

【参考文献】

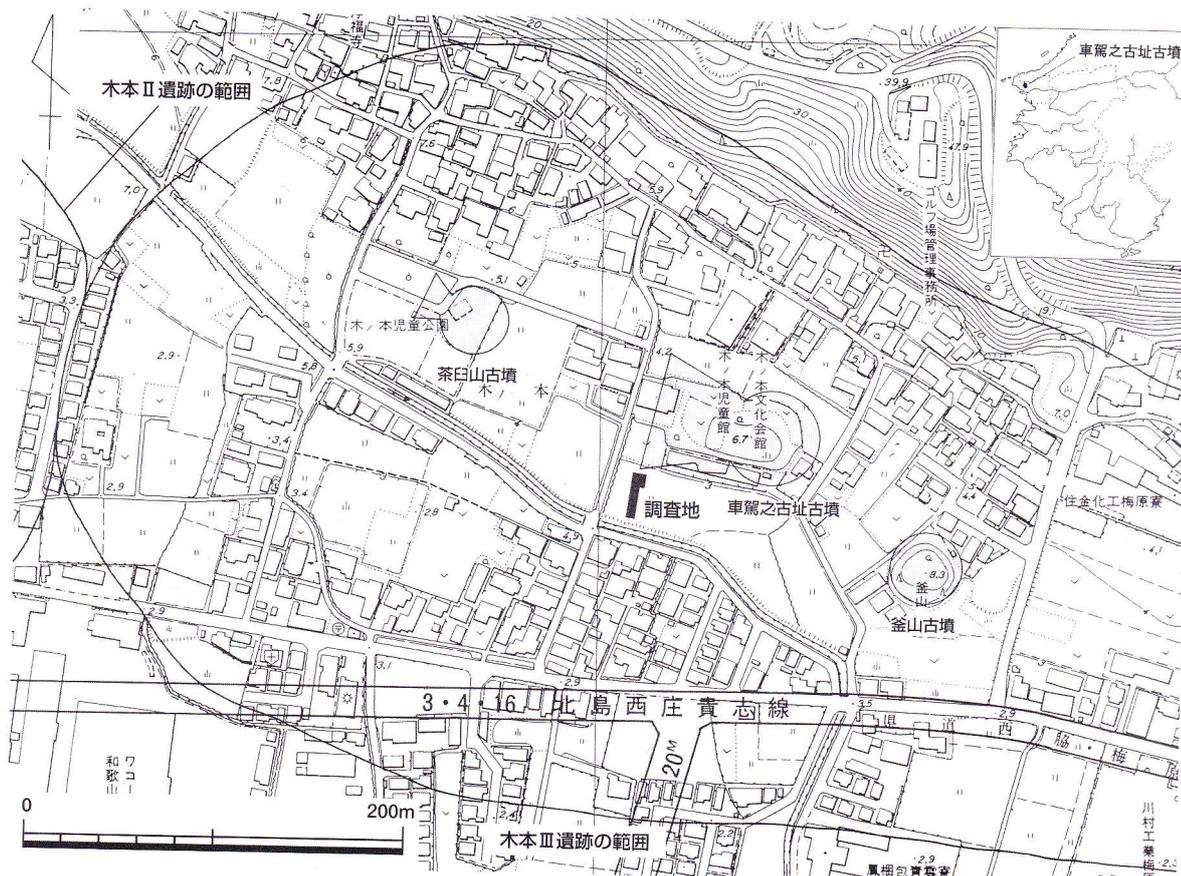
- 『秋月遺跡一向陽高校危険校舎改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一』（財）和歌山県文化財センター 1994年
『秋月遺跡発掘調査概報』（財）和歌山県文化財センター 1997年
前田敬彦 「太田・黒田遺跡第28次調査」『和歌山市埋蔵文化財発掘調査年報』5（財）和歌山市文化体育振興事業団 1998年
前田敬彦 「紀伊における古墳時代の滑石製模造品」『和歌山県立博物館紀要』第3号 和歌山県立博物館 1998年
『秋月遺跡第8次発掘調査概報』（財）和歌山市文化体育振興事業団 2000年
『太田・黒田遺跡第48次発掘調査概報』（財）和歌山市文化体育振興事業団

車駕之古址古墳 第6次調査

1. 調査の契機と経過

車駕之古址古墳は和泉山脈山麓の沖積段丘上に立地し、外堤を含めた全長が約120mを測る県内最大規模の前方後円墳として知られている。本古墳は国内唯一の金製勾玉が出土したことで注目され、既往の調査成果から段築、盾形周濠、造り出しを備えた整備な中期古墳であることが明らかになっている。本古墳の西方150mには茶臼山古墳(後円部径36mの前方後円墳か)、南東100mには釜山古墳(直径40mの円墳)が位置し、車駕之古址古墳を中心として3基の古墳が東西にほぼ等間隔に並び、釜山古墳群(木ノ本古墳群)を形成している(第1図)。また釜山古墳群は木ノ本Ⅲ遺跡の範囲内に含まれ、遺跡の範囲内では西側に位置する。

今回の調査は従来未調査であった車駕之古址古墳南西部の水田を調査対象地とし、前方部の南西端部の検出を主目的として、和歌山市教育委員会が国庫補助金を得て実施したものである。調査は同教育委員会の指導のもと、財団法人和歌山市文化体育振興事業団が委託を受けて行った。現地における調査の期間は、平成14年12月16日から平成15年2月19日までの期間を要した。現地調査はまず平成14年12月16日に地区設定、翌日に機械掘削を行い、人力掘削は12月20日から開始し、平成15年2月5日までの期間を要した。写真撮影は平成14年12月25日に第1遺構面、平成15年1月10日に第2遺構面、1月16日に第3遺構面、1月22日に第4遺構面、2月6日に第5遺構面についてそれぞれ行った。埋戻しは前方部及び外堤を土嚢袋によって保護し、調査区全体を人力によって土入れを行った後、2月17・18日に機械によって埋戻し、翌日に全ての作業を終了した。



第1図 調査地位置図

2. 位置と環境

車駕之古址古墳(1)は、紀ノ川北岸の沖積段丘上、標高3～4 mに立地する遺跡である(第2図)。古代において紀ノ川は現在のように直線的に西流してはならず、本遺跡の南東約2 kmの地点で屈曲して南流し、現和歌川の付近を流れ、紀三井寺付近で海に注いでいたとされる。よって車駕之古址古墳が築造された当時、本古墳が位置する和泉山脈の南麓は陸地化しておらず、ラグーンと呼ばれる潟湖が形成されていたと考えられており、微地形の観察から本古墳は沿岸州をなしていた砂層を基盤に立地していることが指摘されている。

次に車駕之古址古墳周辺の遺跡について概観すると、旧石器時代の遺跡として西庄Ⅱ遺跡(9)や園部遺跡、鳴滝遺跡があげられ、これらの遺跡からナイフ形石器が採集されている。

縄文時代以降は、平野部に位置する木ノ本Ⅱ遺跡(11)の他、海浜部においても加太遺跡や大谷川遺跡などの集落が営まれ始める。木ノ本Ⅱ遺跡では縄文時代晩期の土器が、大谷川遺跡では中期の土器がそれぞれ採集されているが、詳細については明らかではない。

弥生時代以降も縄文時代に引き続き、本遺跡周辺及び海浜部に集落が営まれており、大谷川遺跡や平ノ下遺跡(8)、木ノ本Ⅰ遺跡(10)、楠見遺跡(22)があげられる。平ノ下遺跡は近年の調査によって遺跡の初源が弥生時代前期に遡ることが明らかになっており、楠見遺跡でも前期の土器が出土している。木ノ本Ⅰ遺跡においては、弥生時代後期末から古墳時代前期の竪穴住居が数棟検出されている。弥生時代後期には土器製塩が開始され、古墳時代に盛期を迎えるが、本遺跡の西から加太周辺にかけては、県下でも製塩遺跡が密集する地域である。

古墳時代では、西庄遺跡(7)が古墳時代から奈良時代にかけての大規模な製塩遺跡であり、多数の製塩炉や製塩土器が出土している。また本古墳の東4 kmには特異な陶質土器が多量に出土した楠見遺跡や整然と並ぶ大型倉庫群が検出された鳴滝遺跡などが位置する。

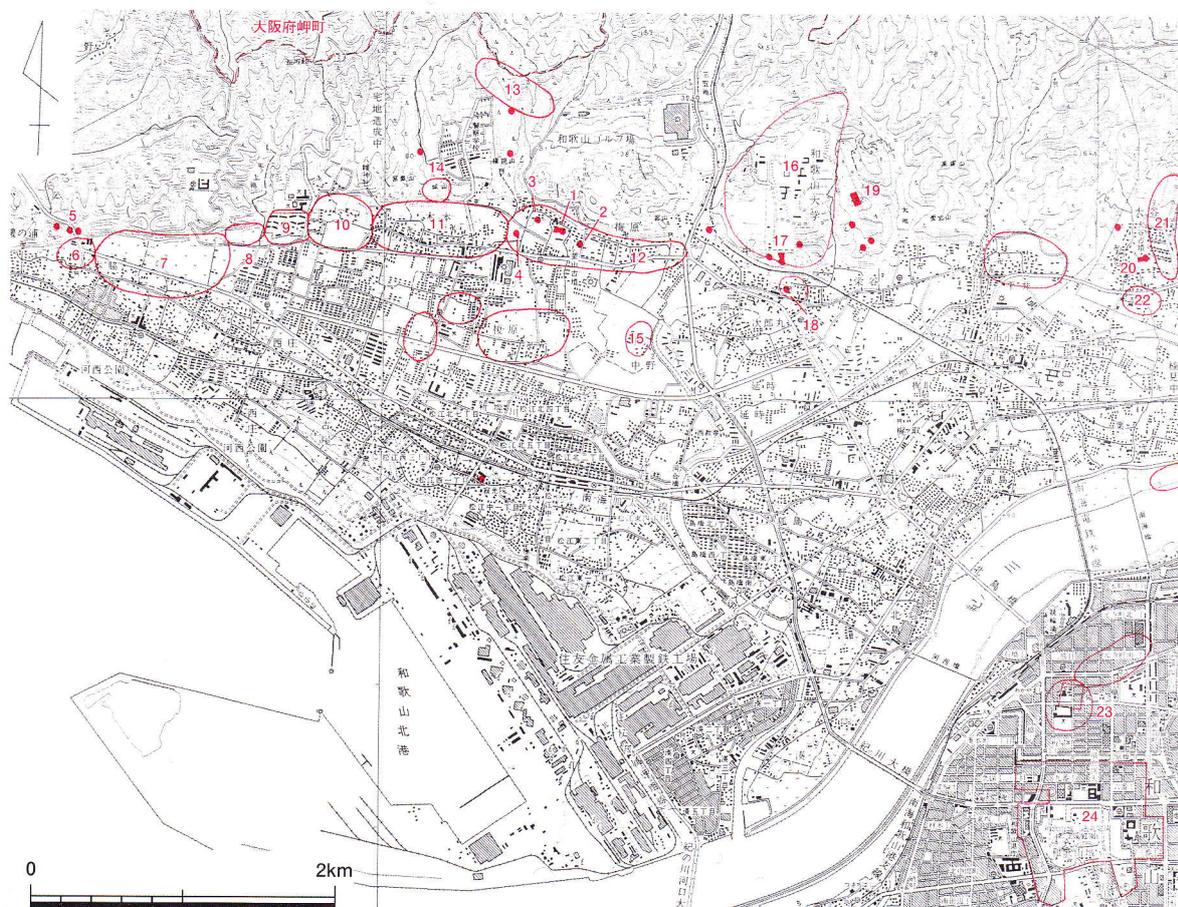
古墳は和泉山脈からのびた丘陵上に位置するものが多く、磯ノ浦古墳群(5)、西庄遺跡、高芝古墳群(17)、貴志古墳(18)、大谷古墳(20)を含む晒山古墳群(21)などが知られている。この中で初期に築造されたのが晒山古墳群であり、5世紀前半の晒山1号墳は粘土槨を主体部にもつ円墳で、直刀や槍、玉類が出土した。5世紀中葉の古墳としては、本古墳を含む釜山古墳群があげられ、茶臼山古墳(3)→車駕之古址古墳→釜山古墳(2)の順に築造されたと考えられる。本古墳群は平野部に立地するという点で他の古墳の在り方とは異なっているが、車駕之古址古墳は畿内中枢地域の前方後円墳の特徴を備えており、当該期の首長墓と考えられる。車駕之古址古墳に続く首長墓としては大谷古墳があげられ、5世紀中頃から後半にかけて紀ノ川北岸地域に首長墓が展開する。大谷古墳は、馬冑・馬甲をはじめとする大陸文化の要素が強い副葬品が知られており、紀ノ川下流域が大陸との密接な対外交渉をもっていたことが知られる。後期前半の古墳としては晒山4・10号墳があり、ともに埋葬施設として横穴式石室をもつ。晒山10号墳(背見山古墳)は全長35 m、くびれ部に造り出しを有する前方後円墳で、大谷古墳に続く首長墓と考えられる。後期後半には巨石を用いた大規模な横穴式石室をもつ園部丸山古墳があり、金銅装の刀や馬具が出土している。終末期の古墳としては、7世紀中葉から8世紀の築造の高芝1号墳が知られている。

奈良時代では、平城宮から出土する木簡に海部郡可太郷から塩を納めていたことを示す調の荷札

が出土しており、引き続き海浜部において土器製塩が行われていたと考えられる。その他、川原崎遺跡(19)において、奈良時代の火葬遺構とみられる被熱を受けた土坑が検出されている。

中世において本遺跡周辺は東大寺を本家とする荘園として成立しており、木ノ本Ⅱ遺跡、木ノ本Ⅲ遺跡(12)、西庄Ⅱ遺跡など荘園村落に関連した遺跡が展開する。木ノ本Ⅲ遺跡では梵字文軒丸瓦をはじめとする瓦類の出土から寺院の存在が想定でき、遺跡の範囲には須恵器系陶器壺を外容器とし、和鏡が伴出した木ノ本経塚(4)が存在している。西庄Ⅱ遺跡においては掘立柱建物・井戸・柵列などが検出され、屋敷跡の大要が明らかになっている。また、西庄遺跡では屋敷墓の形態をとる鎌倉時代の土坑墓群が検出されており、輸入陶磁器や和鏡など比較的豊富な遺物が出土している。室町時代後期には雑賀衆の拠点とされる中野城の推定地がある中野遺跡(15)において、輸入陶磁器、国産陶磁器が多量に出土した大溝が検出されており、城山遺跡(14)では方形に巡らした土塁や門柱の礎石が検出され、紀州攻めの際に織田軍が築造した陣城と推定されている。

江戸時代では、史跡和歌山城を中心に三の丸に相当する和歌山城跡(24)や鷺ノ森遺跡(23)がある。鷺ノ森遺跡は三の丸北側の町屋の一部に相当し、江戸時代の遺構面が3面以上検出され、道路、排水施設、鍛冶炉、礎石建物、井戸、便所、蔵、水琴窟等多くの遺構・遺物が出土している。



番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
1	車駕之古址古墳	古墳	7	西庄遺跡	古墳～鎌倉	13	木ノ本Ⅳ遺跡	縄文～鎌倉	19	川原崎遺跡	奈良
2	釜山古墳	古墳	8	平ノ下遺跡	弥生～鎌倉	14	城山遺跡	安土・桃山	20	大谷古墳	古墳
3	茶白山古墳	古墳	9	西庄Ⅱ遺跡	旧石器～鎌倉～江戸	15	中野遺跡	古墳～室町	21	晒山古墳群	古墳
4	木ノ本経塚	鎌倉	10	木ノ本Ⅰ遺跡	弥生～江戸	16	高芝遺跡	弥生～江戸	22	楠見遺跡	弥生～室町
5	磯ノ浦古墳群	古墳	11	木ノ本Ⅱ遺跡	縄文～室町	17	高芝古墳群	古墳	23	鷺ノ森遺跡	弥生～江戸
6	磯脇遺跡	鎌倉	12	木ノ本Ⅲ遺跡	古墳～江戸	18	貴志古墳	古墳	24	和歌山城跡	江戸

第2図 車駕之古址古墳周辺の遺跡分布図

3. 既往の調査

車駕之古址古墳における既往の調査としては、1985年度から1993年度にかけて6次にわたる調査が実施されている(第1表、第3図)。以下、その概要について略述する。

1986年調査 木ノ本児童会館建設に伴う木ノ本Ⅲ遺跡の調査時に、後円部北西の水田において2ヶ所のトレンチ調査(1986年調査1・2トレンチ)が同志社大学考古学研究室により行われた。1・2トレンチともに後円部東側の葺石が検出され、同時に行われた墳丘測量により、古墳の全長が75~80m、後円部直径50m、前方部長30m、前方部幅50m、高さ3.5m以上の規模を有することが確認された。

1989年度第1次調査 宅地造成計画に対処するために、古墳の実態を把握することを目的として墳丘測量図の作成及び、墳丘や埋葬施設の確認を目的として墳丘各所に12ヶ所のトレンチ調査を実施した。調査の結果、主体部は検出されなかったが、前方部南斜面において葺石が長さ12mにわたって遺存していることが確認され、本来は二段以上の段築により構築されていることが判明した。また後円部堆積土内から、ガラス製小玉と碧玉製管玉が出土し、副葬品が散布している状況が明らかとなった。

1990年度第2次調査 造成計画区域のほぼ全面を面的に発掘調査した。埋葬施設は完全に削平されていたが、墳丘南側斜面において一・二段目の葺石及び造り出しが検出され、墳丘裾部基底石の設置レベルや周囲の水田区画から盾形周濠が伴っていたことが事実となった。この段階で周濠・段築・葺石・造り出し等を備えた本格的な中期古墳であることが明らかとなり、概ねその実態が判明した。葺石についても遺存状態が良好なくびれ部周辺から、基底石と区画列石に大振りな石を用いて区画をつくり、その区画内に小礫を充填するという構築方法が確認された他、くびれ部周濠内から樹立埴輪が1基検出され、くびれ部の位置決定に関連する遺構の可能性が考えられるなど、墳丘の構造面を検討する資料が得られた。また、後円部南斜面の堆積土内から二次的移動を受けた金製勾玉1点及びガラス製小玉が出土し、ガラス製小玉は水洗作業によって総数1000点以上が確認された。その他、形象埴輪の中に類例が稀少な囲み形埴輪が存在することが明らかとなった。

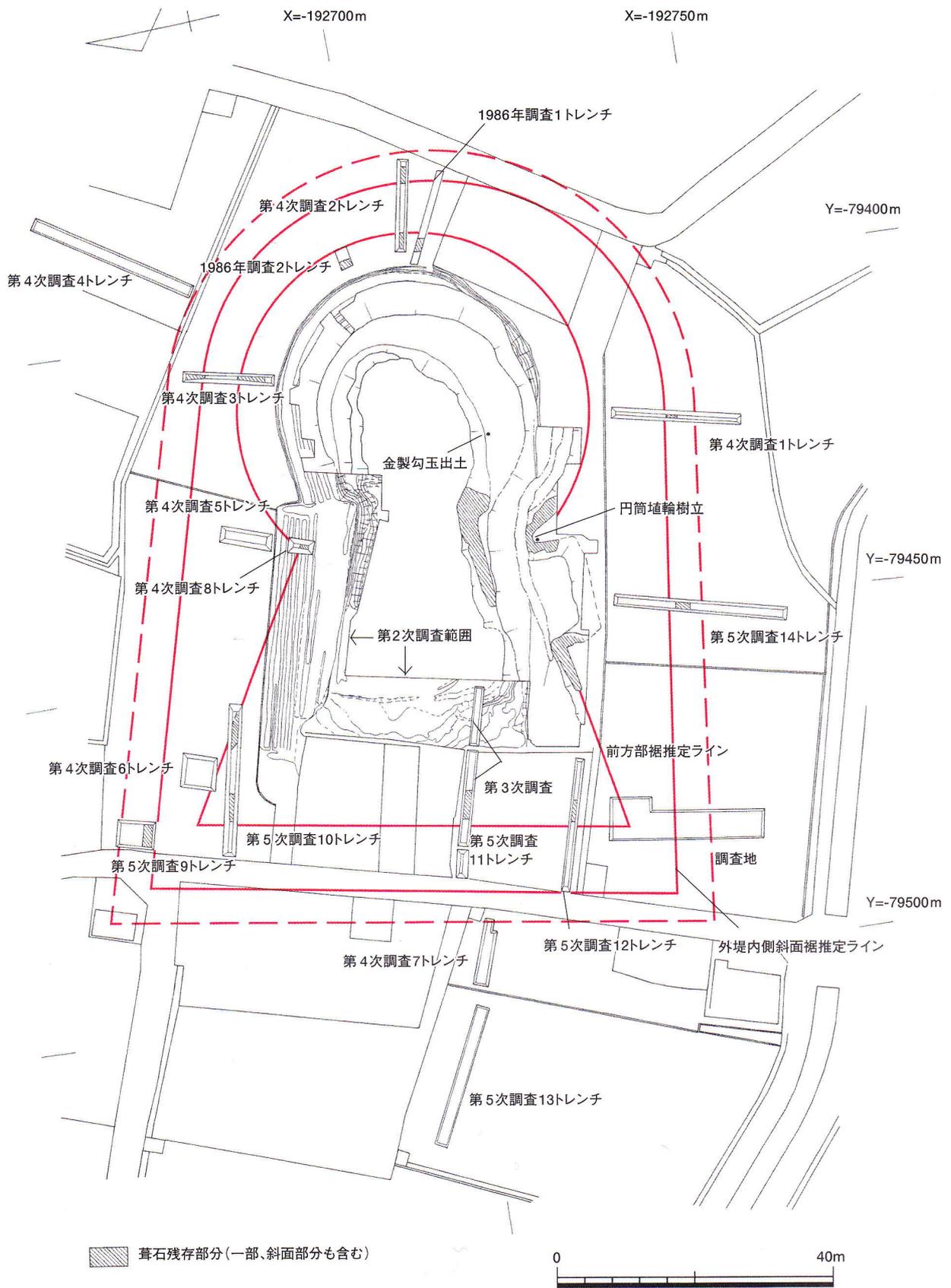
1990年度第3次調査 第2次調査と同年度に、前方部端部を確認することを目的として前方部墳丘上と西隣の畑地に2ヶ所のトレンチを設定した。調査の結果、西側のトレンチにおいて葺石の一部と斜面が検出され、従来の調査成果と合わせ墳形の南半分のプランが確定し、古墳の全長も83~84m、後円部直径48~50m、前方部幅60m前後になることが確認された。

1992年度第4次調査 古墳の規模と外堤等の構造を確認するために、周辺の水田・畑地に8ヶ所のトレンチ(第4次調査1~8トレンチ)を設定して調査が行われた。1トレンチで外堤葺石、2・3トレンチで後円部・外堤葺石及び周濠幅を、8トレンチでくびれ部の葺石がそれぞれ確認された。外堤は中世に大規模な

第1表 既往の調査一覧表

次数	調査年度	調査内容	面積	調査主体	主な調査成果	主な出土遺物	文献
1986年	1985	墳丘測量、後円部東側に2ヶ所のトレンチ調査	約20㎡	同志社	後円部東側葺石を検出	埴輪(円筒、朝顔)	1
1	1989	墳丘測量、墳丘各所に12ヶ所のトレンチ調査	約290㎡	和文体	前方部南側の葺石を検出、段築の確認	ガラス製小玉11、碧玉製管玉1	2
2	1990	墳丘上(開発対象地)を面的に調査	約3000㎡	〃	主体部の消滅を確認、前方部南側一・二段目の葺石・造り出しを検出、くびれ部周濠内に樹立埴輪を確認	金製勾玉1、ガラス製小玉1000以上、碧玉製管玉2、ガラス製管玉1、囲み形埴輪	
3	1990	前方部墳丘及び西隣に2ヶ所のトレンチ調査	約23㎡	〃	前方部西側葺石を検出		
4	1992	古墳周辺部に8ヶ所のトレンチ調査	約249㎡	〃	北側に造り出しはないことを確認、外堤葺石・周濠底面幅を確認、外堤に平行する中世大溝を検出	埴輪(円筒、朝顔、蓋)、黒色土器、瓦器、輸入陶磁器、土錘	3
5	1993	古墳周辺部に6ヶ所のトレンチ調査	約200㎡	〃	前方部北側一段目の葺石・外堤葺石・周濠底面幅を確認、平安時代のピット、中世の井戸を検出		
6	2002	前方部推定南西隅角を中心にトレンチ調査	約100㎡	〃	本報告書にて記載	本報告書にて記載	

同志社一同志社大学考古学研究室、和文体(財)和歌山市文化体育振興事業団



第3図 既往の調査位置図

削平を受けており、調査の範囲では外側の斜面は検出されなかった。また、北側造り出しの確認を目的とした5トレンチの調査成果から、造り出しは北側には存在しないことが確認された。古墳のひろがりを確認するために北側に設定した4トレンチでは、古墳に関連する遺構は確認されなかったが、1986年に行われた木ノ本Ⅲ遺跡の調査で検出された外堤と平行する中世の大溝が検出され、70m以上続いていることが明らかとなった。同じく古墳の西側のひろがりを確認することを目的とした7トレンチでは、中世の遺構面が確認されたが、その下層は無遺物層で、調査地は周濠の外側にあたることが判明した。

1993年度第5次調査 第5次調査では、第4次調査で明らかにできなかった前方部端部と周濠の範囲確認を目的として、6ヶ所のトレンチ(第5次調査9～14トレンチ)を設定した。9・14トレンチでは外堤葺石、10トレンチで前方部端部の葺石、12トレンチで前方部端部、外堤の葺石及び周濠幅がそれぞれ確認された。9トレンチで確認された外堤の葺石は遺存状態が良く、区画列石を築き、内部に小礫を充填するという墳丘の葺石と共通した構築方法が明らかとなった。外堤は第4次調査と同じく中世に大規模な削平を受けており、調査の範囲では外側の斜面は検出されなかった。また、外堤外部の状況を確認するために設定した13トレンチでは、中世のピット・溝状遺構の他、平安時代の包含層とピット、溝が検出された。この他、前方部端部が検出された12トレンチにおいても、古墳の葺石を用いた中世の石積遺構や井戸が検出されている。

以上、5次にわたる既往の調査成果を略述したが、その成果によって車駕之古址古墳は国内唯一の金製勾玉を出土し、二段築成、盾形周濠、造り出しを備えた県下でも傑出した内容を有する古墳であることが判明した。その規模は全長86m、後円部直径51m、くびれ部幅31m、前方部長41m、前方部幅62m、後円部の高さ4.0m以上、外堤を含めた規模は112mを測り、上部の削平を勘案し本来は120m以上の規模をもつものと推測される。また、後円部周囲の周濠幅は第4次調査3トレンチで5m、同2トレンチで7m、同1トレンチで12mを測り、南側ほど広いことが明らかとなり、この点は造り出しが南側にしか存在しないことと合わせ、南側を意識した古墳設計に基づいて築造されたことが指摘されている。築造年代は、古墳の平面プランが大阪府岬町西陵古墳や同藤井寺市市野山古墳に類似し、出土埴輪は西陵古墳より後出する様相をもつことから、5世紀第3四半期頃と考えられている。

今回の調査は既往の調査成果から、前方部については第5次調査12トレンチにおいて標高2.90mで墳丘斜面が検出されていることから、比較的良好に遺存しているものと予想された。外堤については第4次調査1トレンチ及び第5次調査14トレンチで中世の削平により遺存状態が不良であることが予想されたが、既往の調査で明らかにできていない外堤の規模や上部構造の確認が課題としてあげられた。また、既往の調査においても中世を主体とした遺構が確認されており、近隣の木ノ本Ⅲ遺跡の調査で検出されている遺構面との対応関係の把握が課題として考えられた。

【参考文献】

1. 同志社大学考古学研究室編『木ノ本釜山(木ノ本Ⅲ遺跡)発掘調査報告書』和歌山市教育委員会 1989年
2. 『車駕之古址古墳発掘調査概報』和歌山市教育委員会 1993年
3. 『車駕之古址古墳範囲確認調査概報』(財)和歌山市文化体育振興事業団 1994年

4. 調査の概要

(1) 調査の方法

調査は従来古墳復元図をもとに前方部南西端部推定地を中心に、南北6m、東西6mの調査区を設け、周濠・外堤の状況を確認することを目的としてその南側に南北16m、東西4mの調査区を設定した。

調査の方法について、重機による掘削は現代の耕作土(第1層)までとし、第2層以下の遺物包含層と遺構の掘削については、人力掘削によって行った。また遺物包含層に含まれる遺物の取り上げに際しては、調査区を国土座標軸(日本測地系)の整数値にあった4mメッシュで割り付け、各単位ごとに取り上げを行った(第4図)。

また、調査終了後の埋め戻しにあたっては、前方部・外堤及びその周辺を土嚢袋で保護し、調査区全体を人力によって土入れした後、重機によって埋め戻し及び整地を行った。

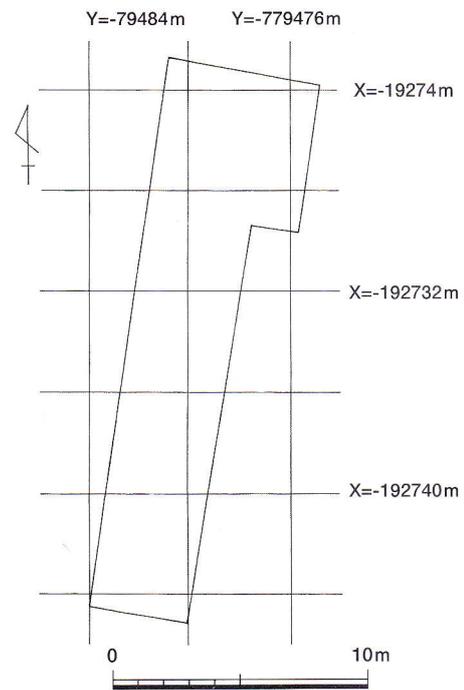
図面による記録は、平面図に関しては国土座標軸を基準とした値を使用し、このラインを基準として実測を行った。また、壁面土層断面図や遺構平面図及び土層断面図については1/20の縮尺を用いた実測を行い、前方部・外堤の平面図及び立面図は1/10の縮尺を用いた。土層の色調及び土質の観察については、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』を用い、遺跡の水準は国家水準点(T.P.値)を基準とした。

(2) 基本層序

当調査地の基本層序は、第5図に示した通りである。層序は表土から車駕之古址古墳の墳丘及び周濠堆積層に至るまでの各層は全て水平堆積であり、水田耕作土と床土が互層に堆積していることから、調査地周辺は古墳埋没後から現在に至るまで一貫して水田耕作地として利用された状況が考えられる。

表土は現代の水田耕作土(第1層)が約20cmの厚さをもって堆積しており、その下層は床土(第2層)が4~10cmの厚さで堆積する。調査区南端においては、第2層下面に第1遺構面検出の水田区画(SX-1)に伴う畦畔及び砂利層が堆積し、砂利層は約70cmの厚さをもつ。この砂利層には埴輪・瓦・近世陶磁器などが一定量含まれており、遺物の年代から近世末期以降の堆積と考えられる。

第3層は肥前系磁器などを含む近世後期の水田耕作土とみられ、約20cmの厚さをもって堆積する層で、上下2単位に分けられる。3a・3b層ともに黄灰色の粗砂であるが、3b層は3a層に比べ灰色の濃い土層である。



第4図 調査地区割図

第4層は約10cmの厚さで堆積する褐色の粗砂で、鉄分の沈着が著しく、第3層に対応する床土と考えられる。第4層には、肥前系陶器など近世前期の遺物が含まれている。

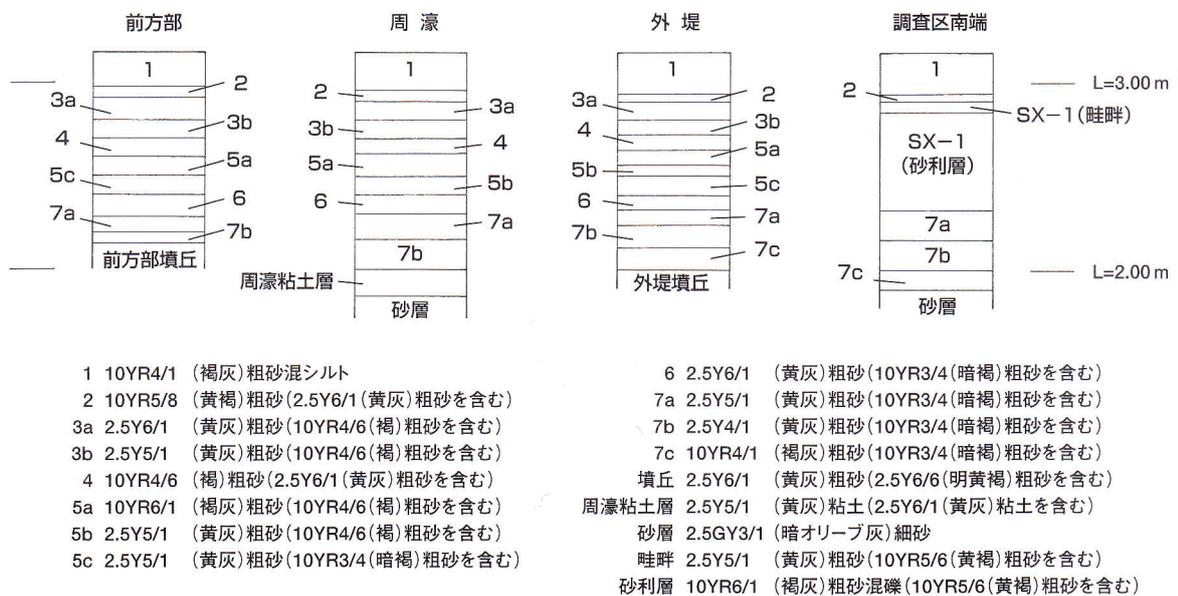
第5層は中世後期後半の水田耕作土と考えられるもので、約20cmの厚さで堆積し、大きくは5a層と5b・5c層の上下2単位に分層できる。5a層は褐灰色の粗砂、5b・5c層は黄灰色の粗砂であるが、5c層は5b層に比べやや褐色粒の混入が少ない土層である。第5層は瓦質土器、常滑焼・備前焼などの国産陶器、中国製の青磁・白磁や染付などの輸入陶磁器を包含する。

第6層は約10cmの厚さで堆積する黄灰色の粗砂で、上面に鉄分の沈着が認められることから、第5層に対応する床土と考えられる。常滑焼、中国製の青磁・白磁などを包含し、その年代から中世後期前半の遺物包含層であると考えられる。

第7層は、大きくは7a・7b層と7c層の上下2単位に分層できる。7a・7b層は黄灰色の粗砂であるが、7b層は7a層に比してやや灰色の濃い土層である。7c層は褐灰色の粗砂で上面には鉄分の沈着がみられ、7a・7b層に対応する床土の可能性もある。第7層には中世土師器や瓦器を中心とする多くの遺物が包含されており、特に7c層は一定量の埴輪・葺石が含まれ、古墳を削平し周濠を埋めた整地土の性格が考えられる。第7層は、土層内に含まれる遺物の年代から中世前期の遺物包含層と判断できるが、その中でも7c層は土師器や黒色土器、灰釉陶器など平安時代に遡る時期の遺物が一定量含まれており、中世前期でも古い時期の堆積層と考えられる。

第7層の下面には車駕之古址古墳の墳丘及び周濠の堆積土が確認でき、その下面は標高1.90mで湧水層である細砂層となるが、外堤以南にあたる調査区南端部では古墳に関する土層の堆積が確認できず、第7層下面は湧水層である。

遺構については、第3a・4・5a・7a層上面及び第7層下面において5面の遺構面を確認した(第1～5遺構面)。なお、第1遺構面検出の遺構は、畦畔状の遺構を検出した調査区南端部のみで確認したものであり、調査区全体で確認したものではない。



第5図 調査区土層柱状模式図

5. 遺構

本調査では、古墳時代中期から近世にわたる遺構面を5面確認した。以下、遺構検出面ごとに主要な遺構について説明する。

(1) 第5遺構面検出の遺構

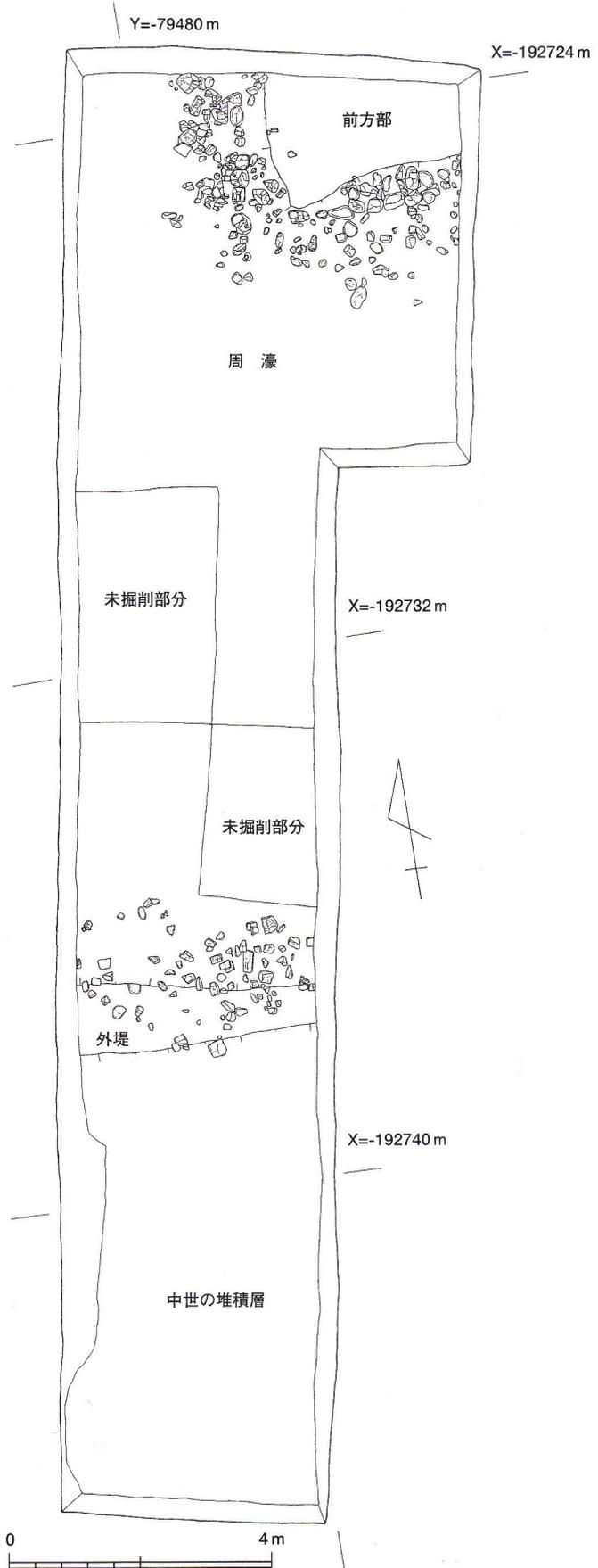
(第6～8図、図版14～17)

第5遺構面では前方部南西端部・外堤及び周濠を確認したが、湧水による足場不良な箇所については未掘削とした(第6図)。

まず前方部は中世の削平によって葺石は乱された状況であったが、東西3.4m、南北2.4m分を検出し、従来の古墳復原案とほぼ一致した位置から前方部南西端部を検出した。転石の範囲は南・西側に及び、墳丘を北側から削平し、周濠を埋め立て整地した状況が考えられる。

葺石は基底石のみが原位置を保って検出されたが、基底石の一部も部分的に欠落しており、遺存状態は悪い。区画列石についても明確なものは遺存していないが、南側斜面の一ヶ所において長さ35cm、幅20cmを測るやや大振りな石が基底石の北側に遺存しており、この部分が区画列石と想定できる(第7図)。また隅角部も区画列石状に大振りな石が並び、隅角部と区画列石の間隔は2.6mを測る。既往の調査で確認されている葺石構築法では、基底石と1.2～1.4m間隔に区画列石を設けて方形の区画をつくる状況が指摘されており、遺存する列石は隅角から2列目の区画列石と想定される。

葺石基底石は長さ20～40cm、幅15～25cmの砂岩河原石及び割石を用いており、基底石設置レベルは1.9mで、基底石上面のレベルは2.1mを測る。また、隅角及び区画列石から想定できる葺石の積み上げ角度は約20°である。



第6図 第5遺構面遺構全体平面図



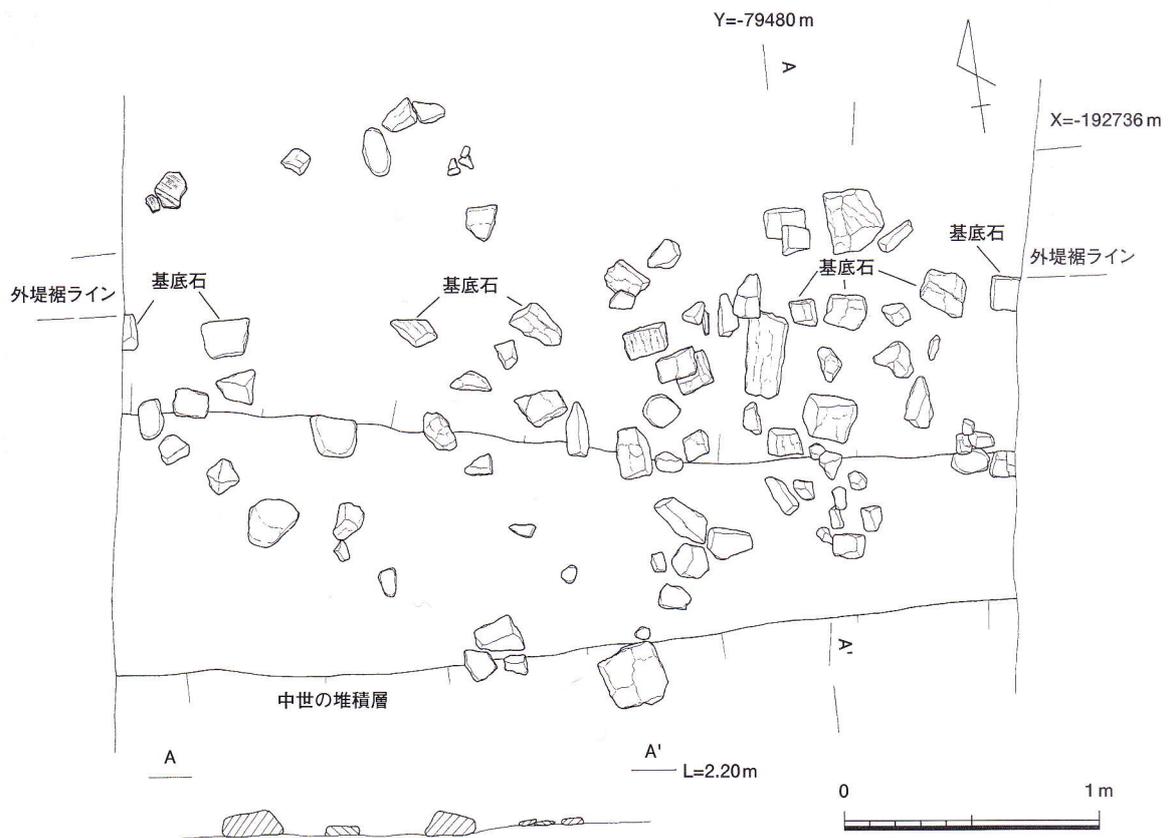
第7図 前方部遺構平面図及び立面・断面図

次に外堤については、前方部同様に中世に大規模な削平を受けており遺存状態は悪いが、葺石を3.6 m分検出した(第8図)。外堤の検出位置は従来の古墳復元案とは異なり、約4.6 m南の位置から検出した。

外堤は葺石基底石の直上まで削平されており、封土の検出範囲は約1.5 mである。その南側は平坦面が続き、湧水層である細砂層の直上まで中世の整地層が堆積している状況である。また転石の範囲は周濠側においては顕著ではなく、基底石から南側に散乱している状況が確認できた。これは前方部同様に北側から外堤を削平し、整地した状況を示している。

葺石は基底石のみが原位置を保って検出されたが、全ては遺存しておらず、特に西側では多くが欠落している。葺石基底石は長さ20 cm、幅15 cmと前方部に比べやや小振りな砂岩河原石及び割石を用いているが、転石の中には本来基底石に使用されていたと考えられる30 cm大の石材や結晶片岩の割石が少量確認できた。

周濠内は調査区全域における底面までの掘削は行っていないが、部分的な掘削状況から、粘土層は約10 cmの厚さで堆積しており、標高1.9 mで湧水層に達する状況を確認した。また、従来の古墳復元原案では前方部隅角部の周濠底面幅は約6.4 mであったが、前方部隅角の基底石と外堤基底石を検出した今回の調査成果から約11 mを測ることが明らかとなった。既往の調査成果においても古墳の南側ほど周濠幅が広がる傾向が指摘されていたが、前方部隅角においても同様に北側隅角の周濠幅と対称にはならず、広がる構造であることを確認した。



第8図 外堤遺構平面図及び断面図

(2)第4遺構面検出の遺構 (第9図、図版18・19)

第4遺構面は第7a層上面で検出したものであり、東西方向の溝を38条検出した。遺構面の標高は約2.3mを測る。

溝は調査区中央部を除くほぼ全域において検出した。溝心々間の間隔は一定ではなく、30～50cm間隔のものが多いが、調査区南側では密集して確認できた。遺構の規模は幅が15～20cmを測るものと30cmを越えるものがあるが、同一遺構でも場所によって幅が異なるものがあり、遺構の形状は一様ではない。検出面からの深さはいずれも10cm未満の浅いものであり、覆土は単一である。遺構の方向性も一定ではないが、概ねN-70°-Eの方向性をもつ。覆土内からは埴輪、土師器、東播系須恵器、瓦器、瓦質土器、常滑焼、中国製白磁、瓦などが少量出土した。

(3)第3遺構面検出の遺構 (第9図、図版20・21)

第3遺構面は第5a層上面で検出したものであり、東西方向の溝を27条、ピット11基を検出した。遺構面の標高は約2.6mを測る。

溝は調査区全域において検出した。溝心々間の間隔は一定ではなく、30cm～1m間隔である。遺構の規模は第4遺構面検出の溝と比較して幅が広いものも多く、20～30cmを測るものと60cmを越えるものがあり、深さは10cm未満の浅いものが多い。この中でSD-32・38は規模の大きなもので、SD-32が幅1.1m、深さ20cm、SD-38が幅1.8m、深さ15cmを測る。その規模から耕作溝と考えられる他の遺構とは区別され、灌漑用水路のような性格が想定できる。覆土はいずれも単一である。遺構の方向性は一定ではないが、第4遺構面とほぼ等しく概ねN-70°-Eの方向性をもつ。

ピットは調査区中央部やや南寄りで集中して検出された。遺構の規模は直径10cm前後、検出面からの深さ10cm未満を測る規模の小さなものである。

第3遺構面検出の遺構覆土内からは埴輪、土師器、東播系須恵器、瓦器、瓦質土器、中国製白磁・青磁、瓦などが少量出土した。

(4)第2遺構面検出の遺構 (第9図、図版22・23)

第2遺構面は第4層上面で検出したものであり、東西方向の溝を24条、土坑1基(SK-1)を検出した。遺構面の標高は約2.7mを測る。

溝は調査区中央部を除くほぼ全域において検出した。溝心々間の間隔は一定ではなく、40cm～1m間隔のものが多い。遺構の規模は幅が20～40cm測り、検出面からの深さはいずれも10cm未満の浅いもので、覆土は単一である。遺構の方向性はほぼ一定であり、N-80°-Eの方向性をもつ。

SK-1は調査区南方で検出したもので、南北3.3m、東西3.6m以上を測る不整な形状を呈するものである。検出面からの深さは10cmと浅いもので、覆土は単一であるが、水分を非常に多く含んでいる。遺構の性格は明らかではないが、覆土が水分を多く含み、第2遺構面の基盤層である第4層に類似することから、第1遺構面検出の畦畔下面で検出した砂利層に伴って形成された窪地状の遺構である可能性が考えられる。

第2遺構面検出の遺構覆土内からは埴輪、土師器、東播系須恵器、瓦器、瀬戸・美濃系陶器、肥前系陶器などが少量出土した。

東西方向の溝を38条検出した。遺構面の標高は...。溝心々間の間隔は一定ではなく、30~50cm...きた。遺構の規模は幅が15~20cmを測るもの...て幅が異なるものがあり、遺構の形状は一樣...ものであり、覆土は単一である。遺構の方向...。覆土内からは埴輪、土師器、東播系須恵器、...出土した。

東西方向の溝を27条、ピット11基を検出した。

一定ではなく、30cm~1m間隔である。遺構の...く、20~30cmを測るものと60cmを越えるものが...D-32・38は規模の大きなもので、SD-32が...る。その規模から耕作溝と考えられる他の遺構と...覆土はいずれも単一である。遺構の方向性は...°-Eの方向性をもつ。

れた。遺構の規模は直径10cm前後、検出面か

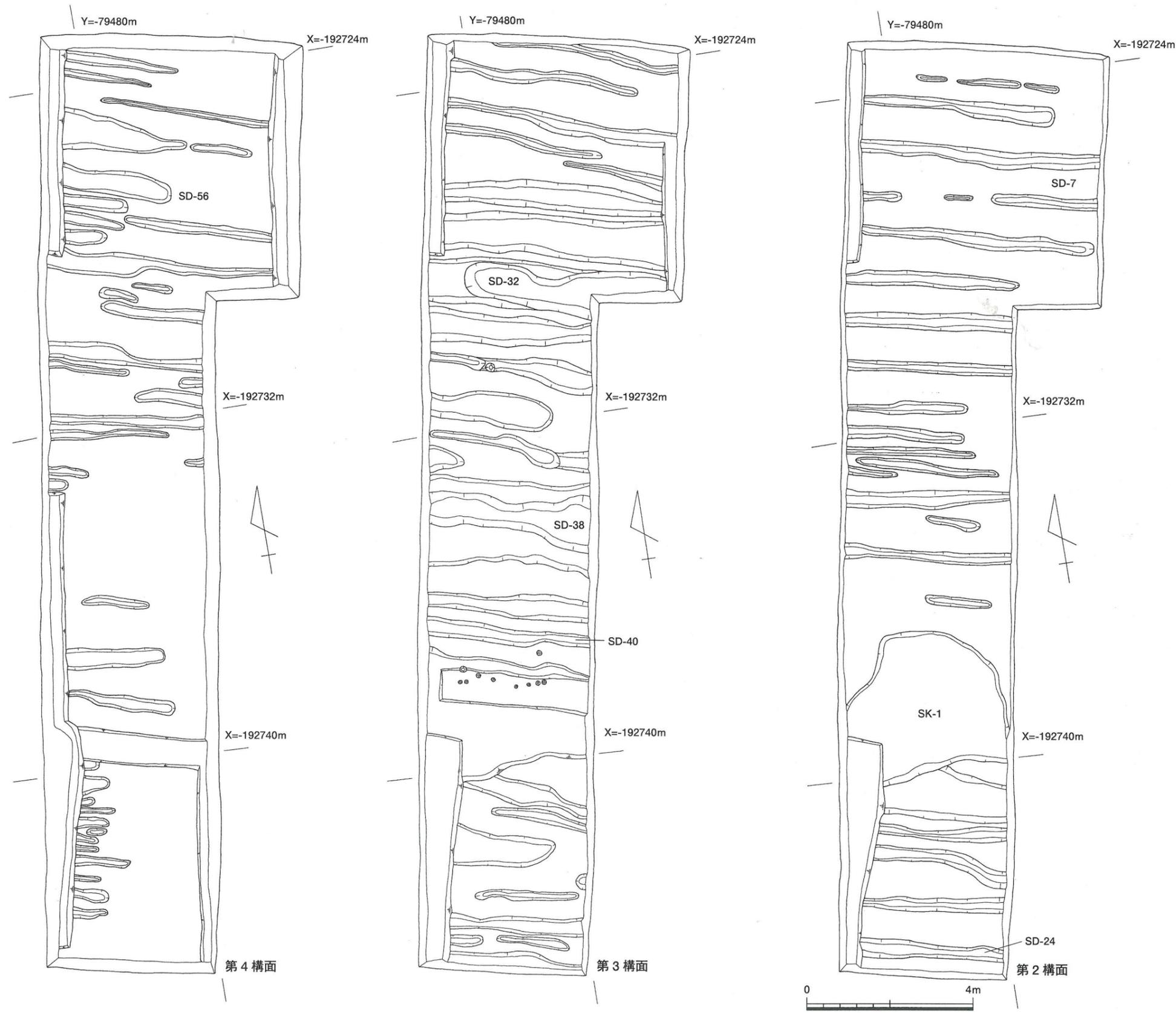
東播系須恵器、瓦器、瓦質土器、中国製白

東西方向の溝を24条、土坑1基(SK-1)を検出

。溝心々間の間隔は一定ではなく、40cm~...り、検出面からの深さはいずれも10cm未満の...一定であり、N-80°-Eの方向性をもつ。

東西3.6m以上を測る不整な形状を呈するも...土は単一であるが、水分を非常に多く含んで...多く含み、第2遺構面の基盤層である第4層...出した砂利層に伴って形成された窪地状の遺

東播系須恵器、瓦器、瀬戸・美濃系陶器、肥



第9図 第4~2遺構面遺構全体平面図

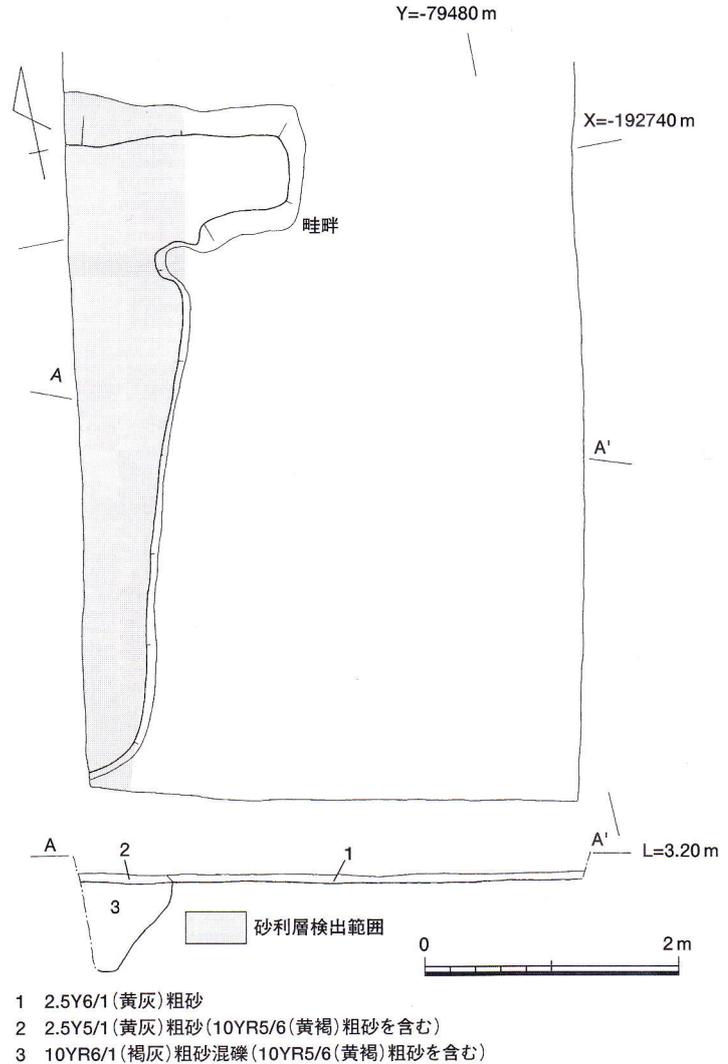
(5) 第1遺構面検出の遺構

(第10図、図版24)

第1遺構面は第3a層上面で検出したもので、調査区南端において水田区画(SX-1)を1ヶ所検出した。遺構面の標高は約2.9mを測る。

水田区画の内、畦畔は厚さ12cmを測る盛土畦畔であり、南北5.2mを検出し、北端部で東に折れそこから約1m延びる。畦畔南端部は水口とみられ、西側に屈曲する部分が確認できる。幅は80cm以上、北端で1.7m以上を測る。この畦畔に対応する水田耕作土は第2層下位が対応するものと考えられる。

また、畦畔を掘削した段階で畦畔の下面から畦畔の位置と重複するように砂利層を検出した(第10図スクリーン部)。砂利層は幅70cm以上、深さ70cmを測る掘り込みに充填されている。砂利層内からは、埴輪、土師器、瓦器、東播系須恵器、肥前系陶磁器、瀬戸・美濃系磁器、瓦、火打石・砥石などの石製品、馬歯などが一定量含まれている。



第10図 SX-1遺構平面図及び土層断面図

遺構の性格としては、砂利層の範囲が畦畔と重複することから、暗渠状の遺構である可能性が考えられる。

6. 遺物

本調査で出土した遺物は、主に各時代の遺物包含層を中心として、遺物収納コンテナ約12箱分が出土した。出土遺物には、埴輪、土師器、須恵器、黒色土器、灰釉陶器、中世土師器、中世須恵器、瓦器、瓦質土器、焼締陶器、輸入陶磁器、国産陶磁器、瓦、石器・石製品の他、第二次世界大戦時の空襲に使用された焼夷弾などの遺物が出土した。これら出土遺物の内、車駕之古址古墳に關係する遺物は埴輪のみであり、特に周濠堆積土の直上に堆積する第7層からは多量の埴輪類が出土した。埴輪を除けば大半が中世の遺物によって占められるが、7c層からは平安時代中期から後期に遡る遺物が一定量出土した。

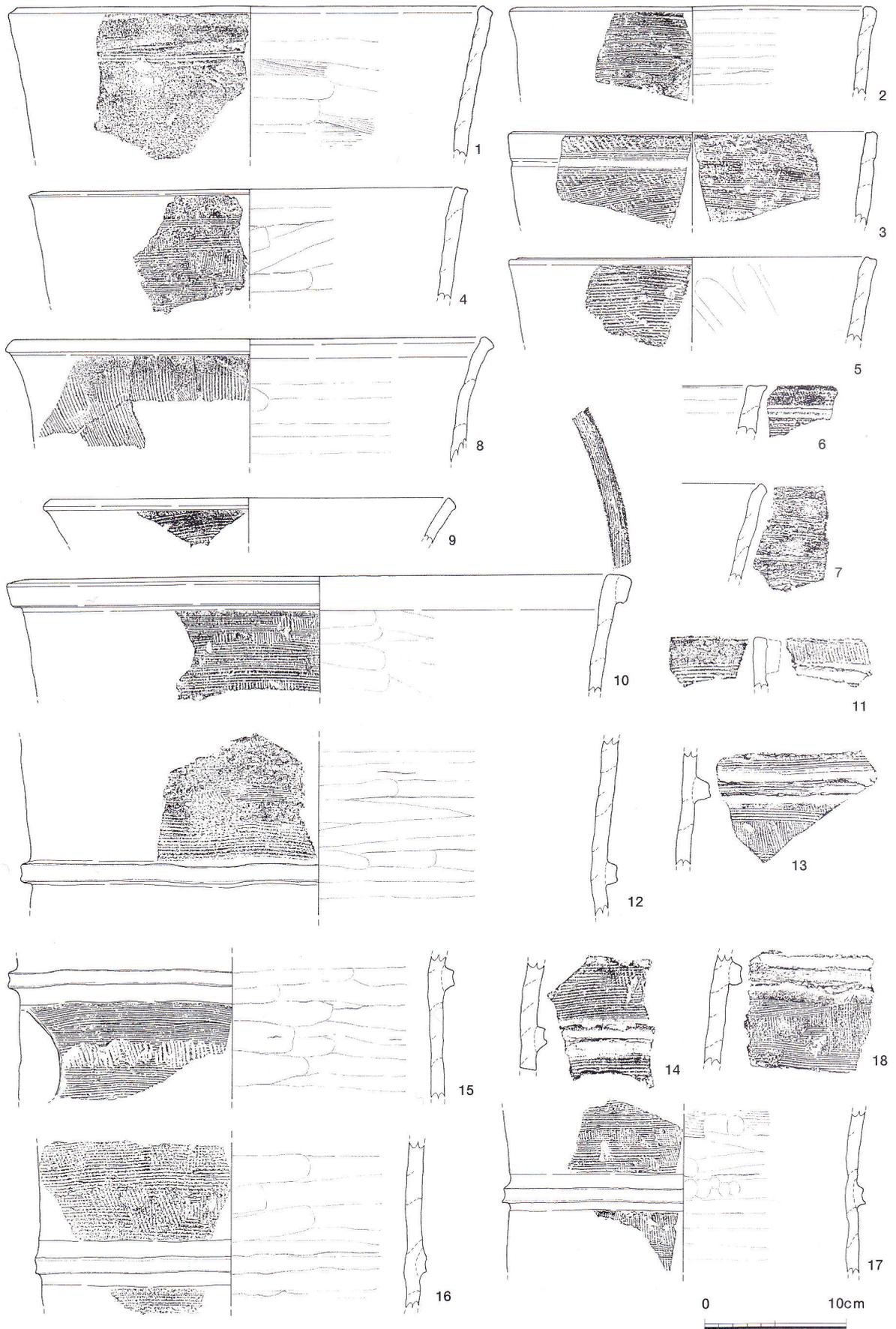
本報告ではこれらの出土遺物について、まず車駕之古址古墳に關係する遺物として埴輪の記述を行い、その後に土器は大きく各時代に分類して述べ、最後に土製品、石器・石製品の記述を行う。

(1) 埴輪 (第11~13図、図版26~28)

今回の調査で出土した埴輪の種類としては円筒形、朝顔形、形象埴輪が出土している。埴輪は全体を復元することができるものではなく、全て破片である。円筒埴輪には、いわゆる「淡輪技法」と呼ばれる製作痕跡を留めている。形象埴輪には蓋形埴輪や基部とみられるものの他、不明部材が出土している。また焼成については土師質、須恵質、半須恵質焼成のものがあるが、黒斑を伴う個体が存在しないことから、全て窖窯焼成と判断でき、焼成の質の相違は焼成温度の高低差によるものと考えられる。ただ形象埴輪には土師質焼成のものが多い傾向があり、埴輪に対する当時の色彩観念が反映されている可能性がある。外面調整は、タテハケやタタキの後ヨコハケやナデ調整で仕上げるが、ヨコハケやナデを省略するものも一定量存在する。ヨコハケはいわゆるC種ヨコハケであり、今回の調査では明確なB種ヨコハケを施したものは確認できない。内面はハケによる調整も認められるが、大半はヨコ方向のナデによって仕上げられる。胎土については石英・長石の他、赤色軟質粒を含み、須恵質焼成のものは赤色軟質粒が還元され黒色粒に変化している。焼成の違いによる形態や胎土・調整技法などの差異は認められず、ほぼ一様であることから、埴輪は同一の生産体制により製作されたものと考えられる。以下、掲載した個体について、記述を行う。

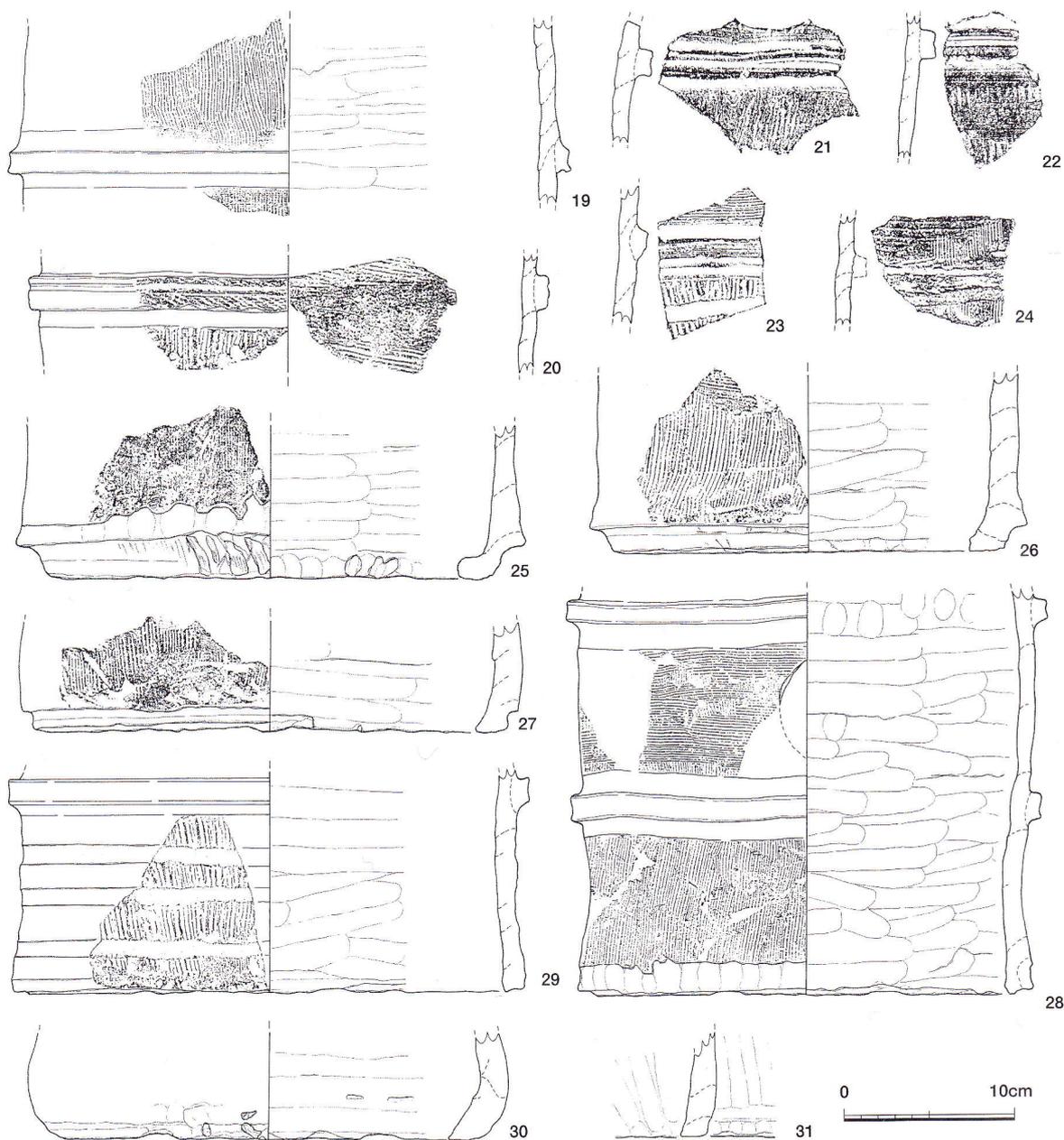
1~11は、円筒埴輪の口縁部である。1~7は直立ぎみに立ち上がる口縁形態を呈し、端面がほぼ水平か外傾するものであり、最も出土量の多い形態である。端部はヨコナデ調整によって上方か内側に尖りぎみに仕上げられており、端部の形態によりやや内側に肥厚するもの(1~3)、外側に尖りぎみに引き出されるもの(4~6)、端部に至って強く屈曲するもの(7)に細分できる。外面の調整はタテハケの後ヨコハケ調整で仕上げたものが多いが、1は最終調整としてハケメをナデ消すものであり、3はヨコハケに先行するタタキが認められ、最終調整の後1条の凹線が施される。内面はヨコナデによる調整が大半であるが、1はナデに先行するヨコハケが認められ、3はヨコハケによって調整する。1~5の焼成及び口径は1が土師質で口径33.2cm、2が半須恵質で口径25.2cm、3が須恵質で口径25.4cm、4が須恵質で口径29.6cm、5が土師質で口径24.6cmを測る。8・9は大きく外反する口縁形態を呈するものであり、8が土師質焼成、9が須恵質焼成の個体である。8は口径33.2cmを測り、端部は内外にやや拡張する形態を呈し、外面にはタテハケの痕跡が強く残る。9は口径27.8cmを測り、外反が強い個体である。10・11は外縁部に粘土帯を貼付けた突帯口縁の形態を呈するものであり、蓋形埴輪のをせる台部の可能性が考えられる。10は須恵質焼成の口径41.2cmを測る大型の埴輪である。外面はタテハケの後、突帯を貼付け、その後ヨコハケ調整で仕上げるものであり、口縁端面にもハケの痕跡を残している。11は突帯が剥離した半須恵質焼成の個体であり、剥離面にタテハケの痕跡が観察できる。1~11の出土位置は、1・3・5・6・10・11が7c層、2・4・7・8が7a層、9が第6層である。

12~24は、胴部である。タガの形態については上面が僅かに窪む台形のものが多く、やや扁平な形状を呈するものはタガ上面に凹線を付したものが多くことが特徴である。タガは幅が1.6~2.0cm、高さは0.6~1.0cm程度のものであるが、16・17のように高さが0.4~0.5cmと低いものもある。これら胴部については、外面調整から分類を行うことができる。まず、12~14はタテハケの後にタガが貼付けられ、最終調整としてヨコハケを施すものである。12は土師質、13・14は須恵質焼成の個体であり、12は胴部径40.0cmを越える大型品である。これに対して15~18は須恵質焼成の埴輪で、タテハケの後、ヨコハケを施し、その後にタガが貼付けられるもので、タガ貼付け時のヨコナデがヨコハケを切っている状況が観



第11图 遺物実測図1

察できる。15はタテハケの工具に原体の粗いものを、ヨコハケには細かい工具を用い、使い分けをしている。17は他の個体に比べ器壁が0.6~0.9cmと薄く成形された個体である。19は半須恵質焼成で、タガ下端部が垂下することが特徴的な個体であり、タテハケが部分的にタガにも及んでいるが、これはタガ上面を境としてこの部位が乾燥単位にあたることを示している。20~22は方形のタガ上面に凹線を付す個体である。20はタガ上面にタタキの痕跡を留める半須恵質焼成のものであり、これはタガ上面を押圧した際の痕跡とみられる。21・22は須恵質焼成で、ナデ調整によって仕上げる個体である。21はタテハケを、22はタタキをそれぞれヨコナデによってナデ消している。また21のタガ上面には、ヨコハケ状の工具痕がみられる。23は粗いタテハケの後、胴部に意図的な凹線を施す須恵質焼成の個体であり、後述する29と同じ特徴をもつ。24はタガが剥離している須恵質焼成の個体であり、タガ設定にあたって凹線を施した状況が観察できる。12~24の出土位置は、12・15・16・18・19が7c層、13・14・17・20~24が7a層である。



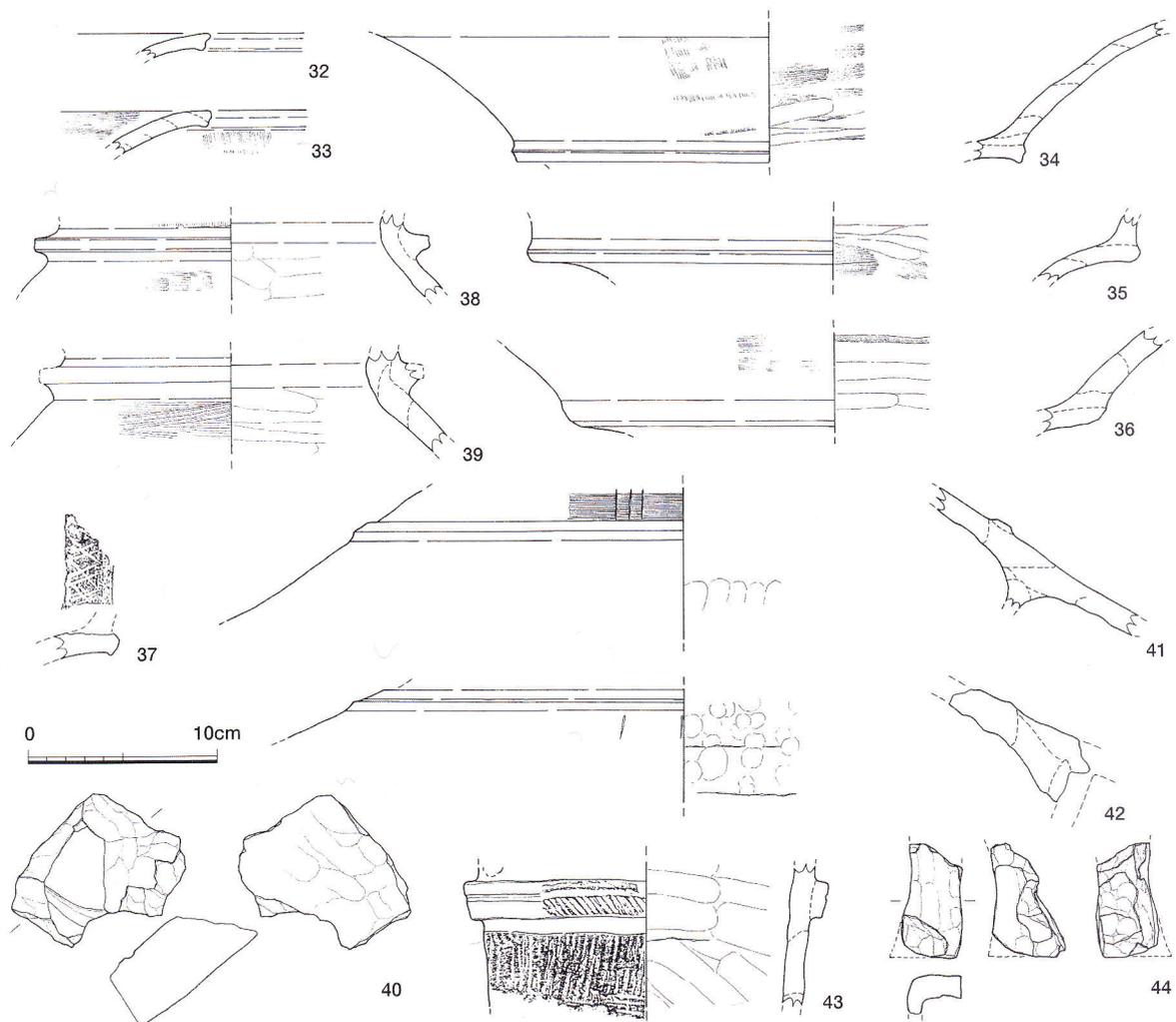
第12図 遺物実測図2

25～31は底部である。25～27は、いわゆる「淡輪技法」と呼ばれる製作痕跡を留めるもので、25・27が土師質、26が須恵質の個体である。段は明瞭であるが、段の高さにはばらつきがあり、段内や底面には植物の繊維質の圧痕が認められる。25の段内には縦方向の明瞭な圧痕がみられ、これはリングの結合箇所
の痕跡と考えられる。25のように底部端は内側に大きく屈曲し、突出しているが、26のようにこの突出部
端が剥離している個体が多くみられる。外面の調整はいずれもタテハケのみであり、段内は25・26がリン
グ除去後未調整、27はヨコナデによって調整され、内面はヨコ方向のナデによる調整である。これらの法
量は25が底径24.6cm、26が22.0cm、27が26.0cmを測る。28は底部から2段目まで遺存している半須恵質
焼成の個体であり、底径は24.6cmを測る。底部は「淡輪技法」により製作されたと考えられるが、明瞭な
段は残存していない。これはリングの上に粘土紐を積み上げる段階で上部との接着が充分に行われてい
なかったため、この部位で剥離したものと考えられる。タガは上面がやや窪んだ台形をなし、間隔は基
底部から第1段目が11.0cm、第2段目が11.6cmを測る。外面の調整は基底部がタテハケのみ、2段目
はタテハケの後ヨコハケ調整を施すものであり、タガはヨコハケによる調整の後貼付けが行われている。内
面はヨコ方向のナデとタガ貼付け時のオサエの痕跡が残る。29も28同様に底部の段が剥離したとみられる
須恵質焼成の個体であり、底径は28.2cm、基底部からのタガ間隔は11.6cmを測る。また外面は粗いタテ
ハケの後、装飾を意図した凹線を3条施している。30は底部の段が明瞭ではない土師質焼成の個体で
あり、底径は23.4cmを測る。断面からの観察では明瞭ではないが、底部にオサエの痕跡を残すことから、
「淡輪技法」によって製作した後、段部に粘土を補充した可能性が考えられる。外面の調整はナデによるも
のである。31は底部が段を有さず、直線的な面をもつ須恵質焼成の個体である。段部をヘラ切りした後、
調整が行われた可能性も考えられるが、内外面の調整としてナデを多様している点では他の個体と様相
が異なり、当初から「淡輪技法」によらない製作の可能性もある。25～31の出土位置は、25～27・30・31
が7a層、28・29が7c層である。

32～39は、朝顔形埴輪である。32・33は口縁端部の破片で、焼成は32が土師質、33が須恵質である。
いずれも単純に外反した口縁形態を呈するが、端面はやや内傾きみであり、32は強いナデ調整により窪
んでいる。33の調整は外面がタテハケ、内面がヨコハケであるが、32は磨滅のため不明である。また、
33の内面はハケによる窪みが赤色を呈していることから、赤色顔料が塗布されていた可能性がある。
34～37は口縁部中位の段状部であり、焼成は34・37が須恵質、35が土師質、36が半須恵質である。
これらはいずれも中位に段状部を形成するものである。接合部の断面観察から擬口縁は単純に外反したも
のであり、口縁部の形状と一致した形態を呈していると考えられる。外面はタテハケを基本に一部ヨコハケ
を施した後、ハケ目をナデ消しており、内面の調整もヨコ及びナメ方向のハケ調整をナデ消している。
また35は口縁部中位の段状部を境として、意図的に粘土を使い分けている可能性がある個体であり、
口縁部上半は白色、下半は赤褐色の粘土を使用している。37は口縁上半部の接合面で剥離している個
体であり、擬口縁の上面には「×」字状の刻み目を入れ、接合強化を図っている。38・39は頸部から肩部
にかけての破片で、焼成はともに半須恵質である。外面の調整は頸部をタテハケ、肩部はヨコハケ
によって調整し、内面はヨコ方向のナデによってハケ目をナデ消している。32～39の出土位置は、
32・38が7c層、33～37・39が7a層である。

40～44は形象埴輪で、40～42は蓋形埴輪である。40は立飾り部の飾り板と考えられるもので、焼成
は土師質である。文様は外形に沿った縁取り線の一部とみられ、線刻は太いが彫りは浅いものである。

41・42は笠部で、ともに焼成は土師質である。41は中位に低平な突帯が貼付けられるが、42の笠部中央突帯はあいまいで、ヨコナデによって表現しているのみである。笠下半部の放射状沈線は互い違いに施されていたとみられ、41は3条一対の沈線が密に、42は残存部で2条認められる。また台部から笠部上半については、42の断面観察より連続して成形されたと考えられ、その後数単位の粘土紐をつぎ足しながら、斜め下方に垂下する笠縁を成形したものと考えられる。笠部内面は、製作時には直接見えない部分であるため、粘土接合痕や指オサエによる凹凸が著しい。43は復元径が17.6cmと小さいことから、形象埴輪の基部と考えられるもので、焼成は須恵質である。製作技法は20と類似しており、タガ上面にタタキの痕跡を留め、凹線を施している。また胴部には、円形のスカシ孔の一部がみられる。44は不明部材であり、焼成は土師質である。上部は欠損するが、底部・側面は一部を欠損するのみで残存部が多く認められる。残存部から推測すると、それ程大きな部材とは考えられない。外面の一面は弧状を呈し、内面の一面は面取りによって直線的な面を形成している。成形はナデと指オサエによって行われており、特に内面には強い指オサエの痕跡が明瞭に残る。これらの出土位置は、40・42が7c層、41がSX-1、43・44が7a層である。



第13図 遺物実測図3

(2) 平安時代の土器 (第14図、図版28・29)

45～53は土師器で、45～48は椀である。45は口径15.0cmを測り、回転台によって成形するもので、口縁端部にはその痕跡を強く残している。46は口径14.0cmを測り、口縁端部を強いヨコナデ調整するため、段をなしている。47は口径13.0cmを測り、口縁部と体部の境が屈曲する形態を呈する。その形態から、陶磁器の稜椀を模倣した土器であると考えられる。48は底径8.8cmを測る底部であり、やや丸みのある逆三角形の高台が貼付けられる。49～52はいわゆる「て」の字状の口縁形態を呈する皿である。器高は49が1.2cm、50～52が0.9～1.0cmと低いものであり、口径は49が8.0cm、50が7.4cm、51が8.0cmである。51は口縁部端面が直線的であり、52は他の個体に比べ器壁が薄くつくられている。53は口径18.8cmを測る甕であり、「く」の字状に外反する口縁形態を呈し、端部は上方に大きく拡張している。

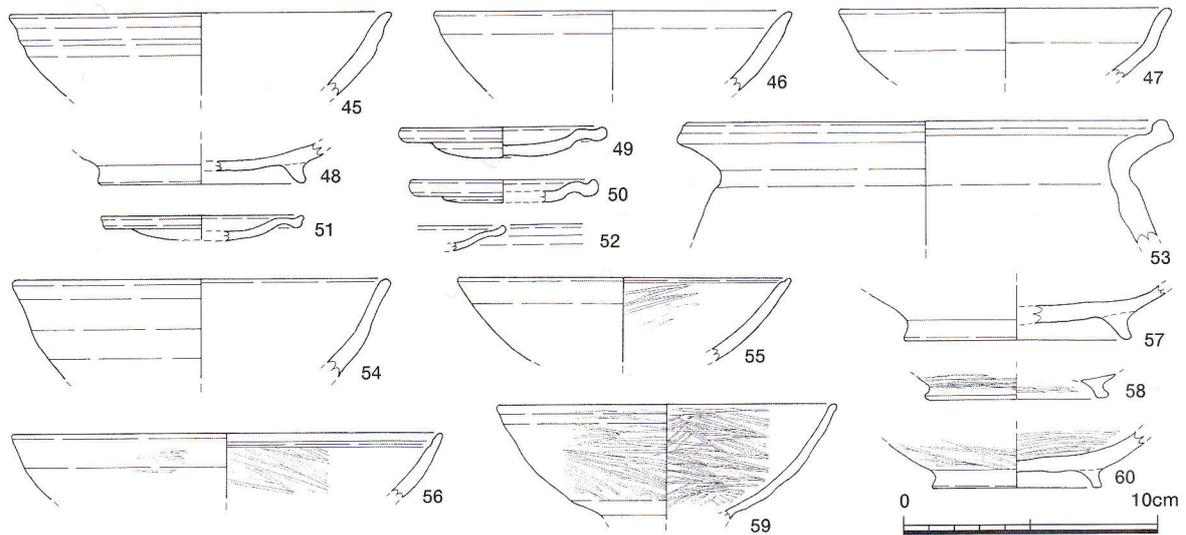
54は口径14.6cmを測る須恵器の椀であり、胎土の特徴から東播系の製品と考えられる。

55～58は黒色土器で、55～57はA類椀である。55・56は口縁内端部に1条の沈線を有するもので、口径は55が13.2cm、56が16.8cmを測り、ミガキは磨滅のためやや不明瞭である。57は底径8.8cmを測る底部であり、外側に踏ん張る形態の高台が貼付けられる。58は、底径6.8cmを測るB類椀の底部である。高台の接合面で剥離しており、ほぼ全面にミガキが認められる。

59・60は瓦器の椀である。59は口径13.2cmを測り、器壁が薄く成形された個体であり、外面口縁部には強いヨコナデによる凹線状の窪みが残る。内外面に細かなミガキが施されており、外面を中心に銀化している。60は底径6.6cmを測る底部であり、内外面にミガキが施されるが、外底面にはミガキは及んでいない。45～60の出土位置は、全て7c層である。胎土は54・58を除き、赤色軟質粒や石英を一定量含み、在地で生産されたものと考えられる。

(3) 鎌倉・室町時代の土器 (第15図、図版29)

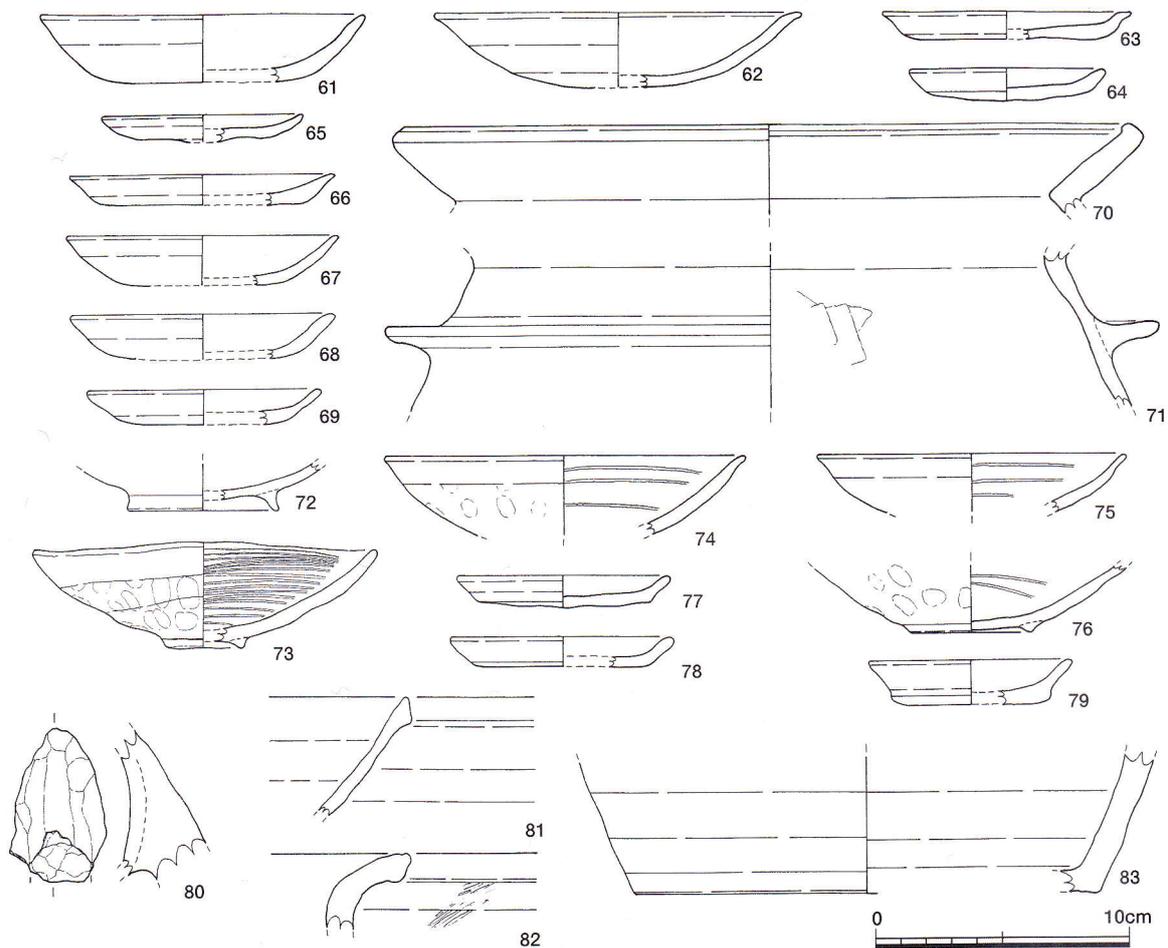
61～71は土師器である。61～69は皿で、いずれもナデと指オサエによって成形した後、口縁部をヨコナデ調整によって外反させるものである。61・62は大皿であり、61は口縁端部を強く外反させるもので、口径14.4cm、器高3.0cmを測る。62は器壁がやや厚みのある形態を呈し、口径12.6cm、器高2.7cmを測る。



第14図 遺物実測図 4

63～69は小皿である。63は口縁部が外側に強く屈曲し、端面がほぼ水平な形態のものであり、口径9.8cm、器高1.1cmを測る。64・65は底部に指オサエの痕跡を明瞭に留める個体であり、法量は64が口径7.4cm、器高1.4cm、65が口径8.0cm、器高1.1cmを測る。66は口縁部が外上方に直線的にのびる形態のものであり、口径10.4cm、器高1.2cmを測る。67は口径10.6cm、器高2.0cmを測る深みのある形態を呈する。68は底部がやや薄く、体部から口縁部にかけてやや厚手に成形された個体であり、口径10.2cm、器高1.8cmを測る。69は口縁部を強いヨコナデによって成形し、端部をまるくおさめるものであり、口径9.0cm、器高1.4cmを測る。70は口径28.6cmを測る釜の口縁部であり、端部を内側につまみ上げるものである。71は体部上位に大きな鏝を有する釜であり、内面は板状工具によるナデ調整が施される。61～71の出土位置は、61～64・70・71が7a層、65が7b層、66が第5層、67・68がSD-56、69が第4層である。

72～79は瓦器で、72～76は椀である。72は底径5.8cmを測る底部であり、高台はしっかりしたものであることから、73～76より古相を呈する。73～75はいずれもナデと指オサエによって成形し、口縁部を強いヨコナデによって外反させるものである。73は口径13.4cm、器高4.2cm、底径3.0cmを測り、内面には14回転の螺旋状暗文が施される。高台はいびつな形状を呈することから、底径は図示したものより若干大きい可能性がある。74・75の暗文は3回転以上の退化したものであり、口径は74が14.2cm、75が12.2cmである。76は底径4.6cmを測り、高台は小さな退化した形態のものである。77～79は皿であり、いずれも口縁部



第15図 遺物実測図5

周辺を強いヨコナデによって外反させる。77は口径8.2cm、器高1.2cm、78は口径8.6cm、器高1.2cmと扁平な形態を呈し、79は口径8.0cm、器高1.8cmとやや深みのある形態を呈する。72～79の出土位置は72・73・76・77が7a層、74・78が第6層、75が第5層、79が7b層である。

80は7a層から出土した瓦質土器の足釜であり、ナデとオサエによって成形される。胎土中には、片岩・石英を多量に含んでおり、在地で製作されたものと考えられる。

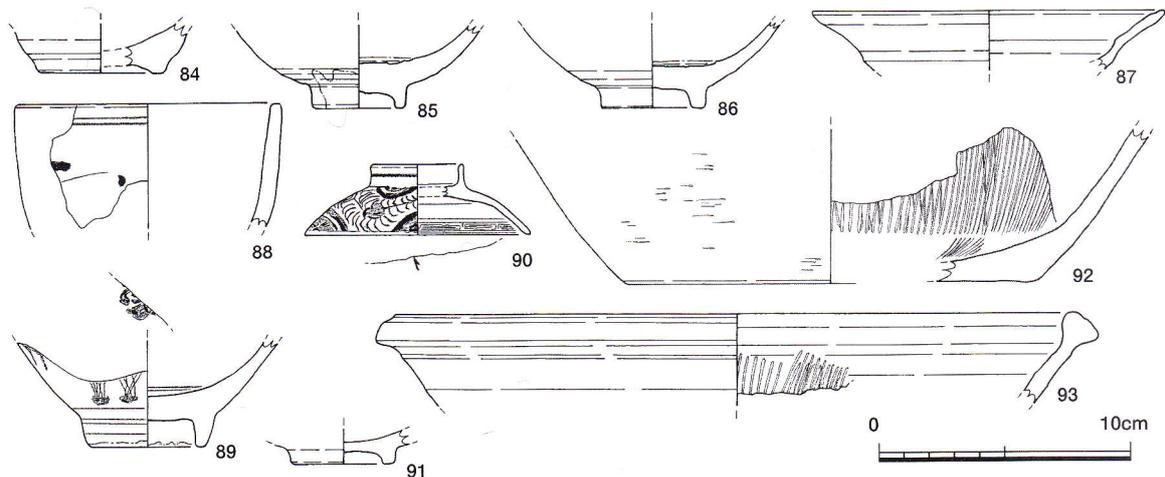
81・82は東播系須恵器である。81はこね鉢で、口縁部に至って上方に拡張し、口縁帯を形成する。内面は磨耗しておらず、調整も明瞭であることから、未使用の可能性が考えられる。82は甕である。外反する口縁部は、端部をやや上方に肥厚させる。タタキによる成形の後、ナデ調整が施される。これらの出土位置は81が第6層、82が第5層である。

83は備前焼の壺とみられるものであり、外面底部際はヘラ削りによって調整され、底部には砂の付着が認められる。第5層から出土した。

(4)江戸時代の土器 (第16図、図版30)

84～87は肥前系陶器である。84～86は碗で、84は高台部をヘラ削りによって低く削り出している。内面には灰釉が施され、胎土目の痕跡を一箇所残している。85・86の高台部はやや高く削り出され、外面体部下半にはヘラ削りの痕跡を強く残している。ともに浸けがけによって灰釉を施すが、内面見込み部の釉は重ね焼きのため輪状に釉剥ぎが行われている。また、86の内面には細かな貫入が認められる。高台径は85が3.5cm、86が4.0cmを測る。87は口径13.8cmを測る端反皿である。体部下半はヘラ削りによって調整されており、全面に薄く灰釉が施され、釉は白濁した色調を呈する。これらの出土位置は84がSD-24、85・86がSX-1、87がSD-7である。

88～90は肥前系磁器である。88は陶胎染付の筒形碗であり、胎土は磁器化していない。外面には草花文が描かれ、細かな貫入が多く認められる。89は高台径4.4cmを測る肉厚の染付碗であり、外面には竹と圏線が描かれ、内面見込み部には二重の圏線内に花文をスタンプする。90は口径9.0cm、器高2.8cm、つまみ径3.6cmを測る染付蓋であり、器壁は薄手である。外面には草花文と圏線を、内面には圏線内に雷文がそれぞれ描かれている。88～90の出土位置は、全てSX-1である。



第16図 遺物実測図6

91は高台径4.0cmを測る第3層出土の瀬戸・美濃系陶器の腰錆釉碗である。全面に施釉が施されるが、外面の鉄釉は高台畳付部をかき取っている。内面の灰釉は厚く、細かな貫入が認められる。

92は底径16.2cmを測る堺焼播鉢の底部であり、外面はヨコ方向のヘラ削りの後ナデによって調整される。内面には、7条1単位の播目が認められ、重ね焼きの痕跡が残る。SX-1から出土した。

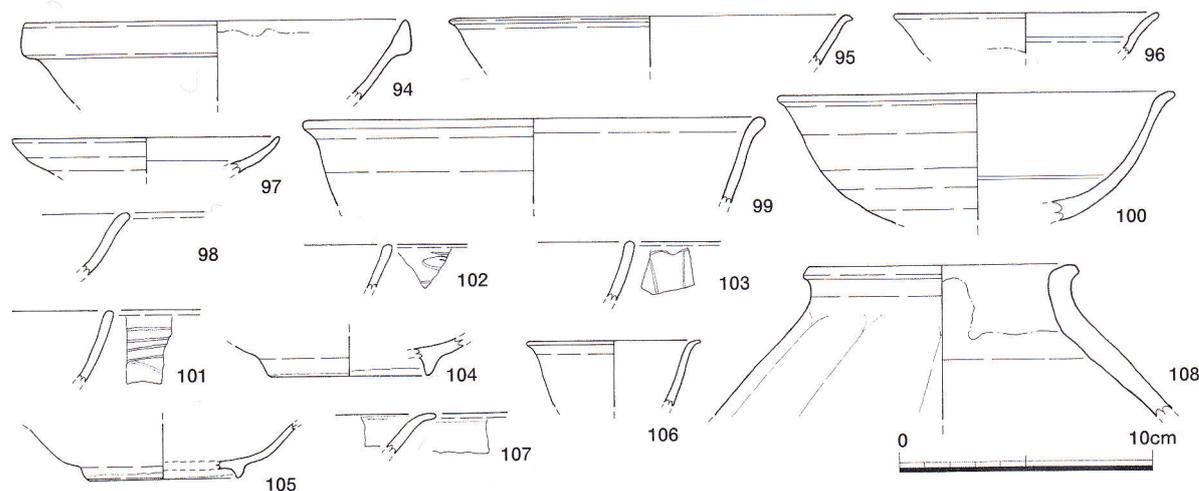
93は口径26.2cmを測る丹波焼の播鉢であり、口縁部は肥厚し、内外に拡張する。重ね焼きのため、口縁部外面のみ明褐色を呈し、内面には7条1単位の播目が認められる。第2層から出土した。

(5) 輸入陶磁器 (第17図、図版30)

94~97は中国製の白磁で、94・95は碗である。94は口径14.8cmを測り、玉縁状の口縁形態を呈するもので、灰色味のある釉がやや厚く施釉されている。95は口径15.6cmを測り、器壁が薄く、口縁端部を強く外反させ、端面を水平にするものである。外面は口縁部付近にもヘラ削りが及んでおり、釉は灰色味の強いものである。96は口径10.4cmを測る皿で、体部中位に段をもつ形態である。釉は青味のある灰色に発色しており、外面中位以下には施されていない。97も皿で、口縁部が内彎ぎみに立ち上がる形態のものであり、外面はヘラ削りによって調整される。94~97の出土位置は、94・97が7a層、95が第6層、96が7c層である。

98~103は、中国製青磁の碗である。98~100は口縁部が外反し、端部を丸くおさめる形態を呈するものであり、口径は99が18.2cm、100が15.6cmである。98は胎土に砂粒を多量に含み、やや粗いものである。釉は濃緑色に発色しており、内外面に大きな貫入が認められる。99は口縁端部が肥厚する形態をなし、釉は明緑色を呈するものであり、内外面に大きな貫入が認められる。100は外面のヘラ削りが明瞭な個体であり、釉は光沢をもち、貫入が多く、内面には一条の圈線がみられる。101・102は口縁部外面に雷文帯を施文するものであり、102は101より退化した形態のものである。101には、大きな貫入が認められる。103は口縁部外面に線描蓮弁文を施文するものであり、口縁端部は磨耗しており、細かな貫入が認められる。98~103の出土位置は、98が7c層、99・102が第6層、100・101が第5層、103が第4層である。

104~106は中国製の白磁であり、94~97より後出する時期の遺物である。104・105は皿であり、



第17図 遺物実測図 7

105は端反の形態を呈するものと考えられる。高台は逆三角形状を呈するもので、高台径は104が6.2cm、105が5.8cmである。また104・105ともに高台畳付付近は釉剥ぎが行われているが、104は105に比べきれいな仕上がりである。106は口径6.8cmを測る小杯であり、口縁部は非常に薄手で、強く外反する形態のものである。104～106の出土位置は、104・106が第4層、105がSD-40である。

107は、第5層から出土した中国製の染付磁器碗である。内外面ともに細かな貫入が多く認められ、呉須によって圏線が描かれている。

108は、第5層から出土した中国製とみられる褐釉陶器の壺である。口径10.4cmを測り、口縁部と頸部の境が不明瞭な形態のものであり、口縁端部は強く外反する。体部外面は、面取り調整が行われており、体部径から推測して10面の面取りが復元できる。釉は厚く施されており、外面は暗緑灰色、内面は緑黄色を呈する。また口縁部内面は釉が拭き取られており、露胎である。

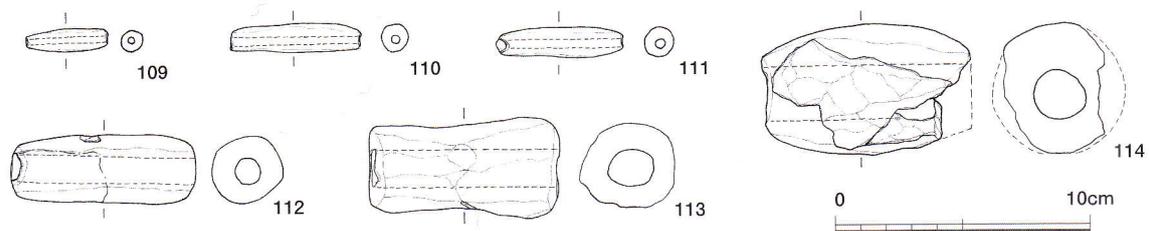
(6) 土製品 (第18図、図版30)

109～114は、管状土錘である。棒に粘土を巻き付けて手づくねで成形するものであり、小型のものは丁寧に仕上げられるが、大型のものはやや粗雑で、オサエやナデの痕跡を留めている。これらの胎土中には、赤色軟質粒の他石英を少量含む。

109は全長3.1cm、直径0.9cm、孔径0.3cmを測り、重量は2.7gで、今回の調査では最も小さいものである。110・111はほぼ同大の土錘であり、110は全長5.1cm、直径1.1cm、孔径0.4cmを測り、重量6.1g、111は全長5.0cm、直径1.2cm、孔径0.4cmを測り、重量は7.6gである。111には、全体に黒斑状の痕跡が認められる。112～114は、大型の土錘である。112は全長7.2cm、直径2.7cm、孔径1.1cmを測り、重量は51.1gで、形態的には110・111を大型化したものである。部分的に黒斑とみられる部分があるが、磨滅のため不明瞭である。113は全長7.4cm、直径3.4～4.0cm、孔径1.5cmを測り、重量は94.6gで、土錘の一端が拡がる形態を呈し、ややいびつに成形されている。112と同様に黒斑状の痕跡が、部分的にみられる。114は中央部が膨らむ卵形の形態を呈するものであり、全長8.2cm、復元される直径5.2cm、孔径2.1cmを測り、残存する重量は116.8gと最も大型のものである。これらの出土位置は109・112・114が7a層、110・111・113が7c層であり、出土した遺物包含層の年代から中世の所産であると考えられる。

(7) 石器・石製品 (第19図、図版30)

115は7c層から出土したサヌカイ製の打製石器で、有茎式石鏃である。残存長5.1cm、最大幅2.2cm、厚さ0.5cmを測り、重量は5.0gである。板状の素材剥片に左面は先端から基部に向かって、右面は時計

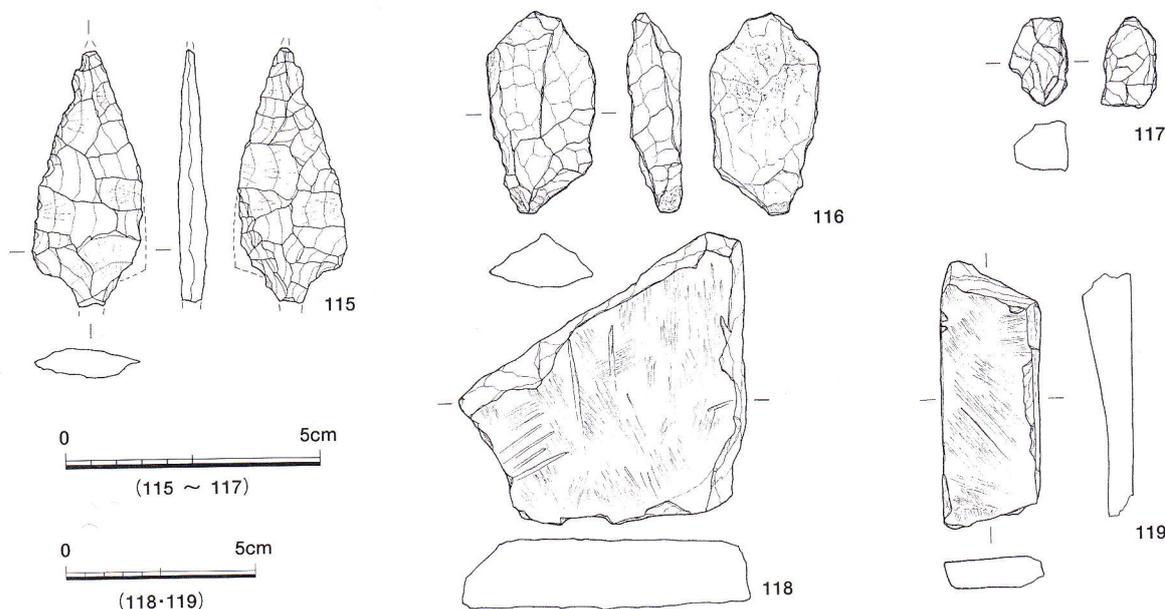


第18図 遺物実測図 8

回りに細部調整が施されている。調整順序は左面右側縁→右面左側縁→右面右側縁→左面左側縁である。また、左右両面ともに側縁の一部を二次的に欠損している。

116・117は、火打石である。116は石英製であり、長さ4.0cm、幅2.1cm、厚さ1.1cmを測り、重量は9.3gである。打割面の稜線、側縁部は火打金の打撃により細かく潰れているが、それ以外にも面的に打痕が及んでいる。117は淡緑色を呈するチャート製のものであり、長さ1.8cm、幅1.2cm、厚さ1.1cmを測り、重量は2.5gである。稜線を中心に打痕が認められるが、顕著ではない。116・117の出土位置は、ともに第3層である。

118・119は砥石であり、石材は118が砂岩、119が堆積岩の一種を用いたものである。118は上面のみが明らかな使用面であり、不定方向の擦痕が認められる。擦痕には太い筋状のものがあり、破損後の稜線にも擦痕が及ぶことから、この状態で使用されたと考えられる。119も明らかな使用面は上面のみであり、使用により弧状を呈しており、不定方向の擦痕が認められる。下面はやや平滑で凹凸が残っており、これは製品としての粗加工の痕跡とみられる。左右両面は節理に直交する痕跡が認められ、鋸を用いた切断痕の可能性が考えられる。118・119の出土位置は、118が7a層、119が第6層である。



第19図 遺物実測図9

7. まとめ

(1) 車駕之古址古墳の復元と遺構面の変遷について

本調査では車駕之古址古墳の築造面を含め、5面の遺構面を確認した。

まず、第5遺構面では車駕之古址古墳の前方部・外堤及び周濠を検出したが、前方部・外堤については葺石基底石の一部のみが原位置を保っており、中世に大規模な削平を受けている状況が明らかとなった。前方部については従来の復原案に示された位置において南西端部を検出したが、外堤については従来の想定位置より約4.6m南の位置から基底部を検出した。従来の古墳復原案では前方部隅角部

の周濠幅は北側とほぼ等しく約6.4mであったが、今回の調査成果から約11mを測ることが明らかとなった(第20図)。さらに前方部基底石の検出地点が第2次調査と合わせ2地点となったことから、前方部のひろがる角度は70°であることが確認でき、前方部幅についても64mを測ることが明らかとなった。今回の検出位置から古墳の復元を試みると、前方部と外堤の南西隅角がほぼ一直線に並び、当古墳が厳密な企画・設計に基づいて築造されている蓋然性が高くなった。当古墳は古墳の主軸を境として前方部の左右幅が異なり、周濠幅も一定ではないなど左右対称には築造されていないが、中期古墳においては地形的に左右対称に地割りできる条件があっても非対称に築造されるものが多いとされることから、当古墳についても北側は地形的な制約と考えるよりは、当初から意図的に非対称に築造されたと考えるのが妥当である。当古墳は古墳南側ほど周濠幅が広がる傾向があり、造り出しが南側にのみ存在することからも、南側からの側面観を強く意識したことが明らかであり、この点が左右非対称に築造された大きな要因であると考えられる。

第4遺構面から第1遺構面の各遺構面では、水田耕作に伴う溝群及び畦畔を検出した。遺構内からの遺物量は少ないが、層位に含まれる遺物の検討から、各遺構面の時期は第4遺構面が中世前期、第3遺構面が中世後期、第2遺構面が近世後期、第1遺構面が近世末期以降と考えられる。

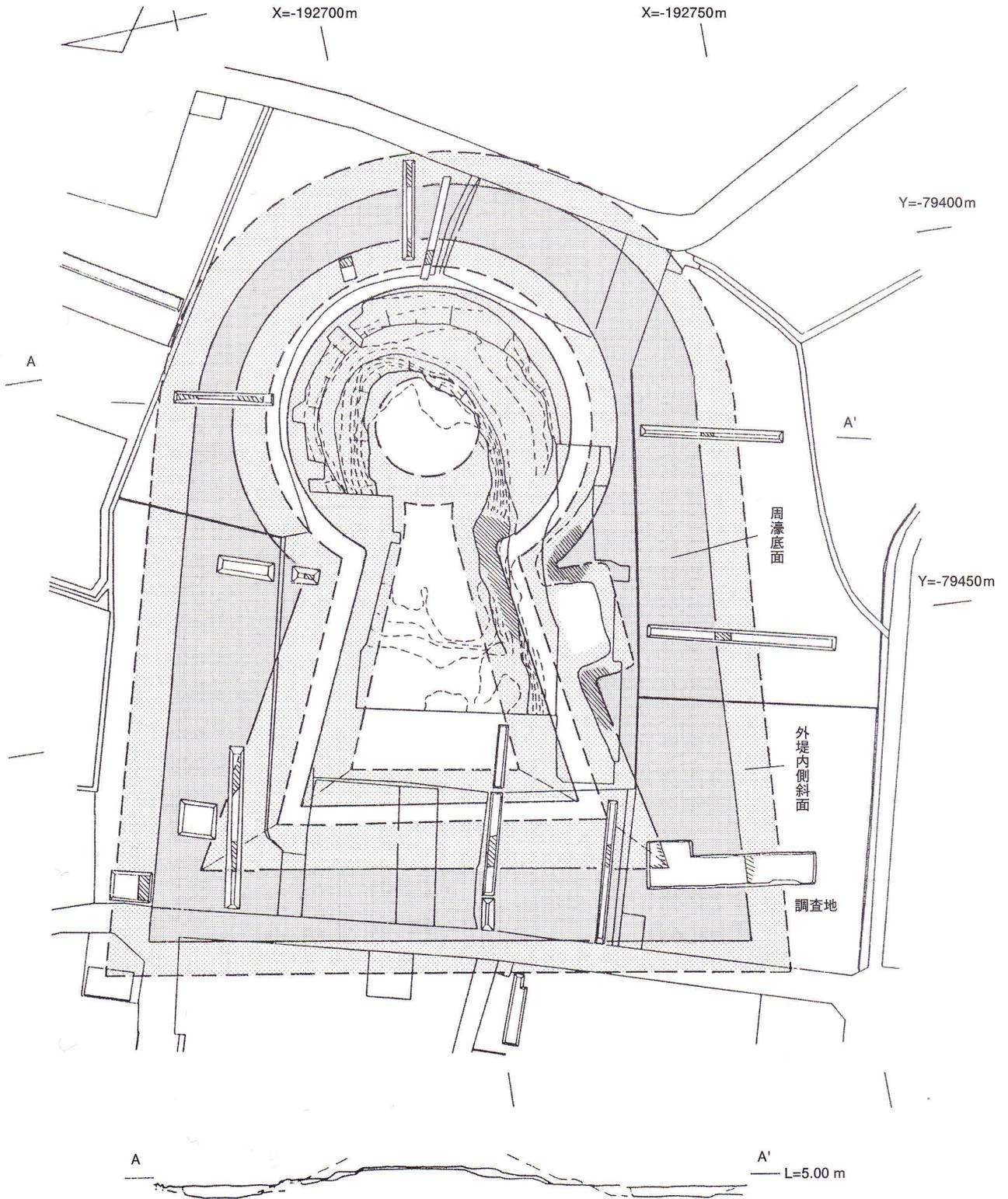
古代において本調査地の位置する木本郷は、大安寺の初期荘園として領有されていたことが明らかであるが、荘園経営や開田行為の具体像は不明である。その後、木本荘は東大寺末寺崇敬寺を領家に、東大寺を本家とする荘園として成立し、11世紀中頃から12世紀初頭に開発行為が行われたと考えられている。今回の調査成果では、第7c層に包含されている遺物に「て」の字状の口縁形態を呈する土師器皿や黒色土器、古相の瓦器椀などの遺物が一定量含まれており、古墳を削平・整地し、当調査地周辺に水田開発が及んだのは12世紀を前後する時期であると考えられる。この年代は、文献史料から窺われる水田開発の年代とほぼ符合するものであり、注目できる成果であると言える。中世の木ノ本Ⅲ遺跡では経塚・墓などの遺構や梵字文軒丸瓦など寺院関連遺物が出土しており、これら諸遺構と水田遺構との関連は今後検討していく必要がある。

以上のように、今回の調査成果からは車駕之古址古墳南西部の構造と水田開発の過程を含め、その後の土地利用の在り方を示す具体的な資料を得ることができた。

(2) 出土した埴輪について

車駕之古址古墳出土の埴輪は、いわゆる「淡輪技法」と呼ばれるリング状の輪をはめた痕跡や、タタキ、カキメ状のC種ヨコハケ、硬質焼成など須恵器技法を多用した点が特徴である。以下では、今回の調査で出土した埴輪のうち、円筒埴輪の観察から明らかになった点について記述を行う。

まず外面調整について、従来の報告ではヨコハケ調整のある個体については、タガ貼付け後の調整(二次調整)として施され、例外としてタガを貼付ける以前にヨコハケ調整がみられるものや、ヨコハケ調整の後にタタキを施す個体が存在することが指摘されていた。本調査出土のヨコハケ調整を施す円筒埴輪を検討した結果、特にタガ貼付け時のヨコナデがヨコハケを切っている個体かなりの割合で存在することが明らかとなった。また既往の調査で出土した埴輪を観察した結果、第21図に掲載したようにタガ剥離面においてC種ヨコハケが残存し、それをタガ設定の凹線やタガ貼付け時のヨコナデが切っている個体が存在することが判明し、明らかにタガ貼付け以前のヨコハケを施す個体が存在することが裏付けられた。



-  葺石部分 (一部、斜面部分も含む)
-  葺石推定
-  周濠底面
-  推定プラン



第20図 車駕之古址古墳復元想定図

さらに残存状態の良好な個体の観察から、通例のようにタガ貼付け後にヨコハケを施すか、タガ貼付け以前にヨコハケを施すかは同一個体において混在することはないことが確認できた。同様な事例は大阪府はざみ山古墳にみられるとされるが、「淡輪技法」をもつ淡輪地域の西陵古墳、宇度墓古墳、西小山古墳の3古墳では、ヨコハケはいずれもタガ貼付け後の二次調整であるとされており、これが車駕之古址古墳特有の現象であるのか、単に工人差によるものと理解するべきか今後の検討課題である。



第21図 タガ剥離面に残るヨコハケ(第5次調査出土事例)

次に底部について、「淡輪技法」を特徴づけるリングは、底径の規格化と自重による歪みの防止を行う目的で行われたとみられる。まず底径の規格化という点については、既報告資料と本調査資料を検討する限り、リングの内径が28cm 弱のものと24~24.5cm 前後のものが多く、ある一定の規格の存在を窺わせるが、資料数が不十分なため統計上の問題が残る。また伊勢・遠江の「淡輪技法」を有する初期の埴輪には、底部の段を切るものや、段内に粘土を補充するなど底部の処理を行う個体が確認されている。車駕之古址古墳では、段内に粘土を補充する個体は少数ながら確認できるが、段を切るものについては明らかではない。しかし、リング除去後、段内に粘土を補充するものや、段内にヨコナデ調整を加える個体もあることから、段部の切り離しを行っていることも予想される。しかし、多くの個体には底部端が内側へ大きく突出したり、段部が剥離したのものや、段部を境として上下の接合が部分的に接着していないものもみられ、底部処理が恒常的に行われたとは考えられない。少数ながら存在する段のない個体については、段を切り放したのか、「淡輪技法」以外による製作であるのかが問題となるが、円筒埴輪は全て「淡輪技法」によって製作されたと考えられ、異なる生産体制を求めるのは妥当ではない。仮に後者の可能性を考えるならば形象埴輪の基部のような円筒埴輪以外の個体に限って行われたと考えるべきであると思われる。このように車駕之古址古墳に樹立された埴輪は、依然多くの問題点をはらんでおり、埴輪生産の実態を検討する上において、究明していく課題が多く残されている。

【参考文献】

- 同志社大学考古学研究室編『木ノ本釜山(木ノ本Ⅲ遺跡) 発掘調査報告書』和歌山市教育委員会 1989年
『車駕之古址古墳発掘調査概報』和歌山市教育委員会 1993年
『車駕之古址古墳範囲確認調査概報』(財)和歌山市文化体育振興事業団 1994年
川西宏幸『古墳時代政治史序説』塙書房 1988年
鈴木敏則『伊勢の淡輪系円筒埴輪』『Mie history』vol.3 三重歴史文化研究会 1991年
藤井幸司『円筒埴輪製作技術の復元的研究—竈窯焼成導入以降を中心に—』
『第52回埋蔵文化財研究集会発表要旨集』第52回埋蔵文化財研究集会実行委員会 2003年

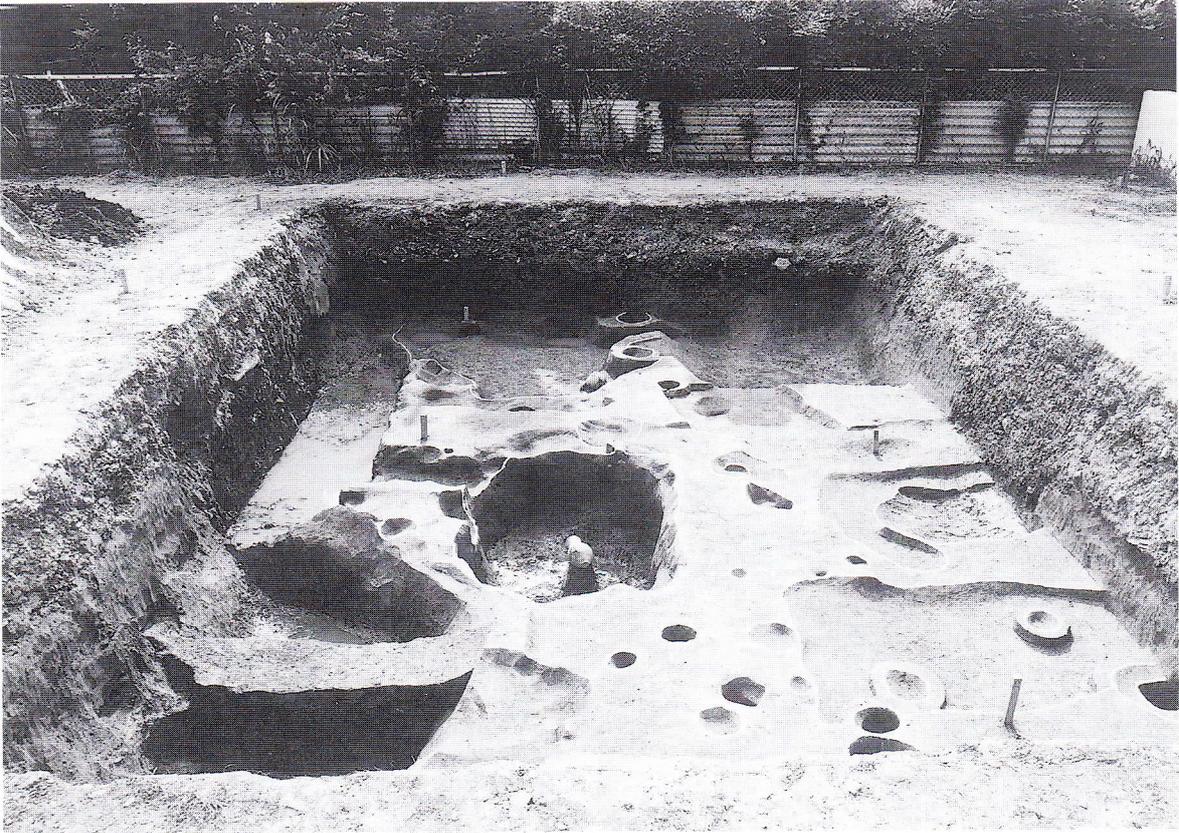
版 図



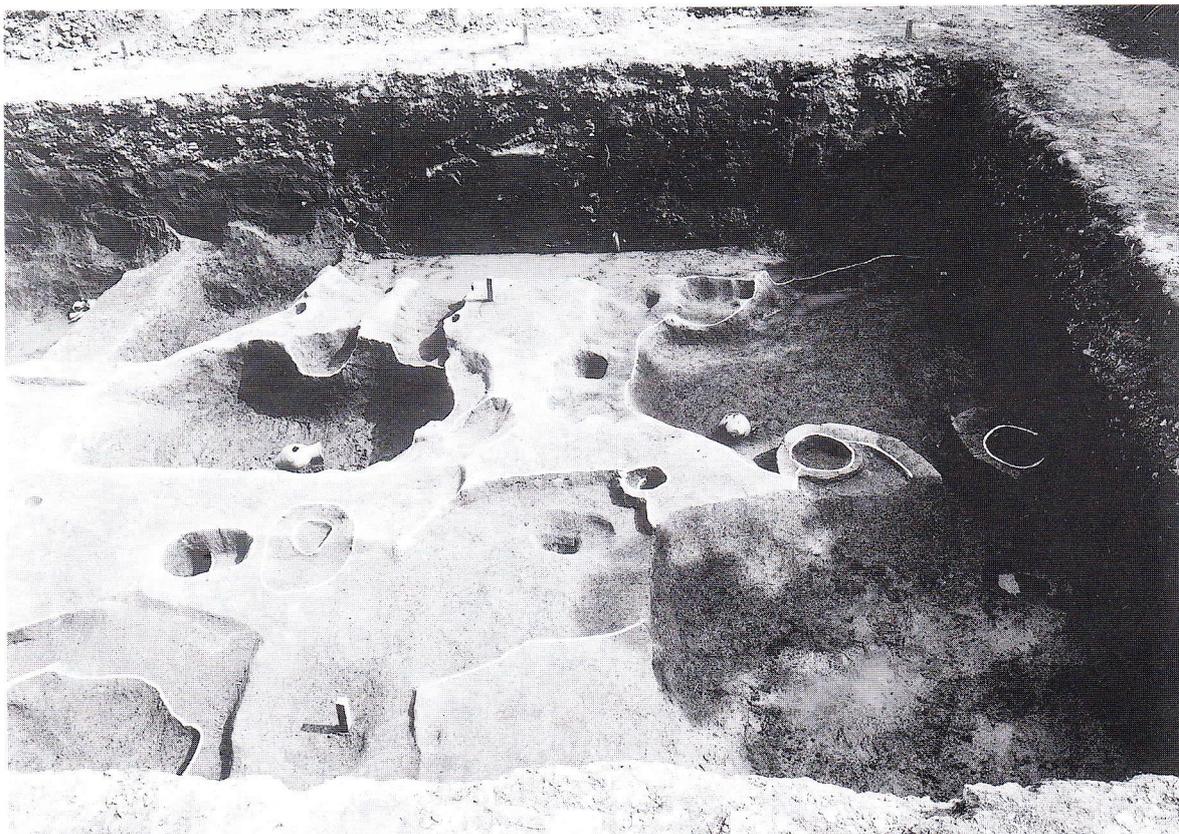
調査前の状況(南から)



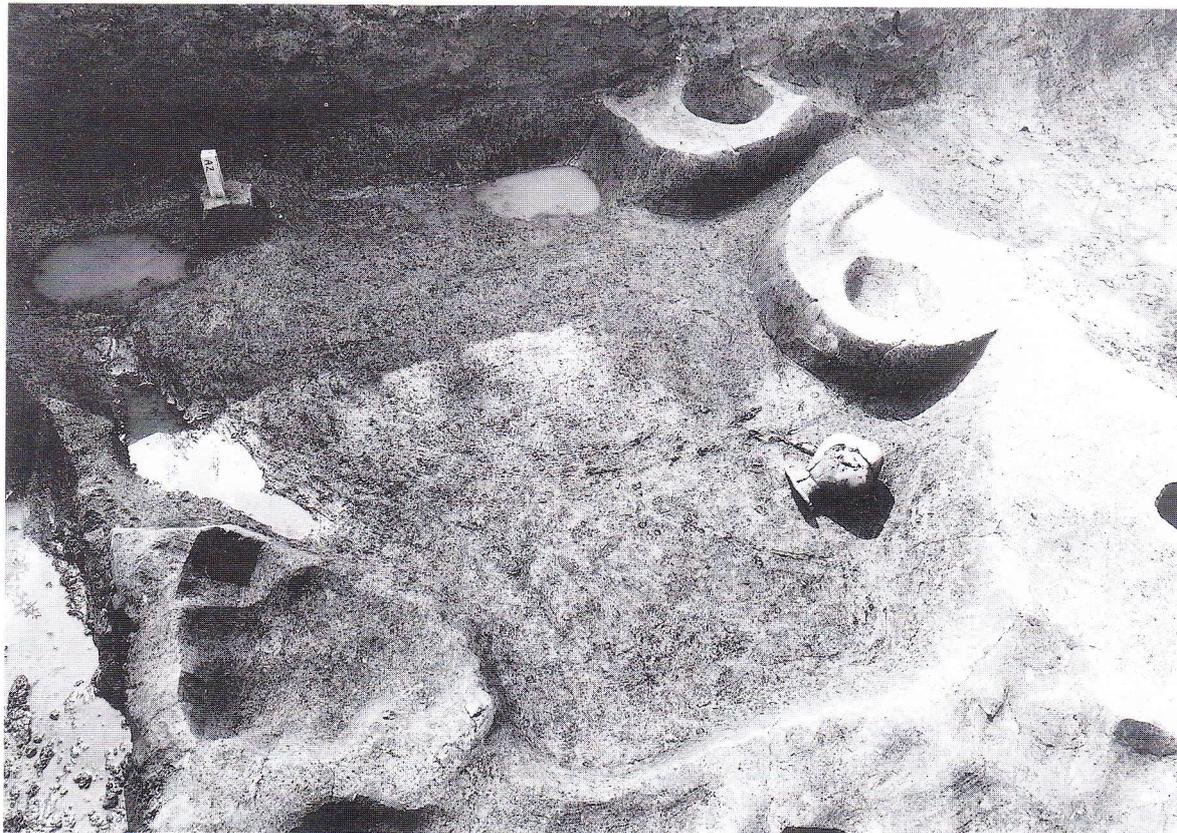
第3遺構面全面(南から)



第3遺構面全景(東から)



第3遺構面調査区西半部全景(北から)



SK-14(南東から)



SK-14土層堆積状況(南から)

図版4
秋月遺跡
遺構



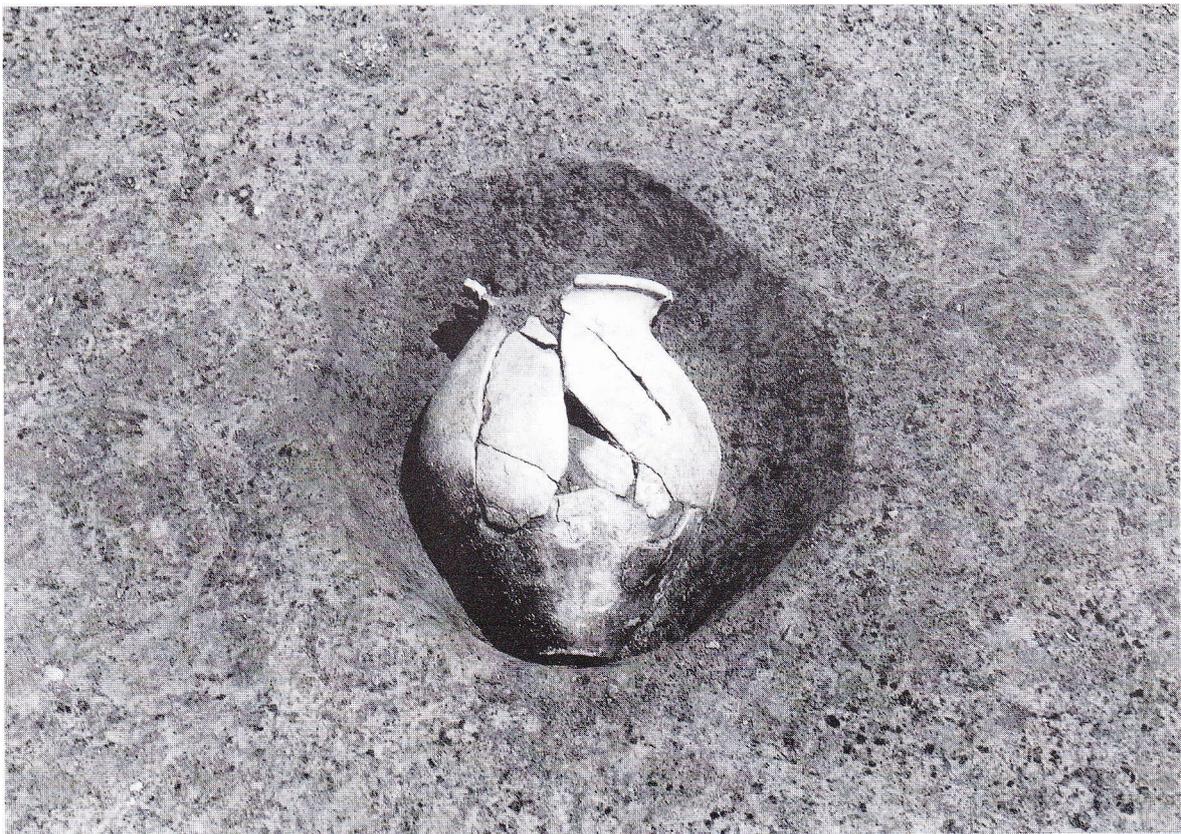
SK-18・12(南から)



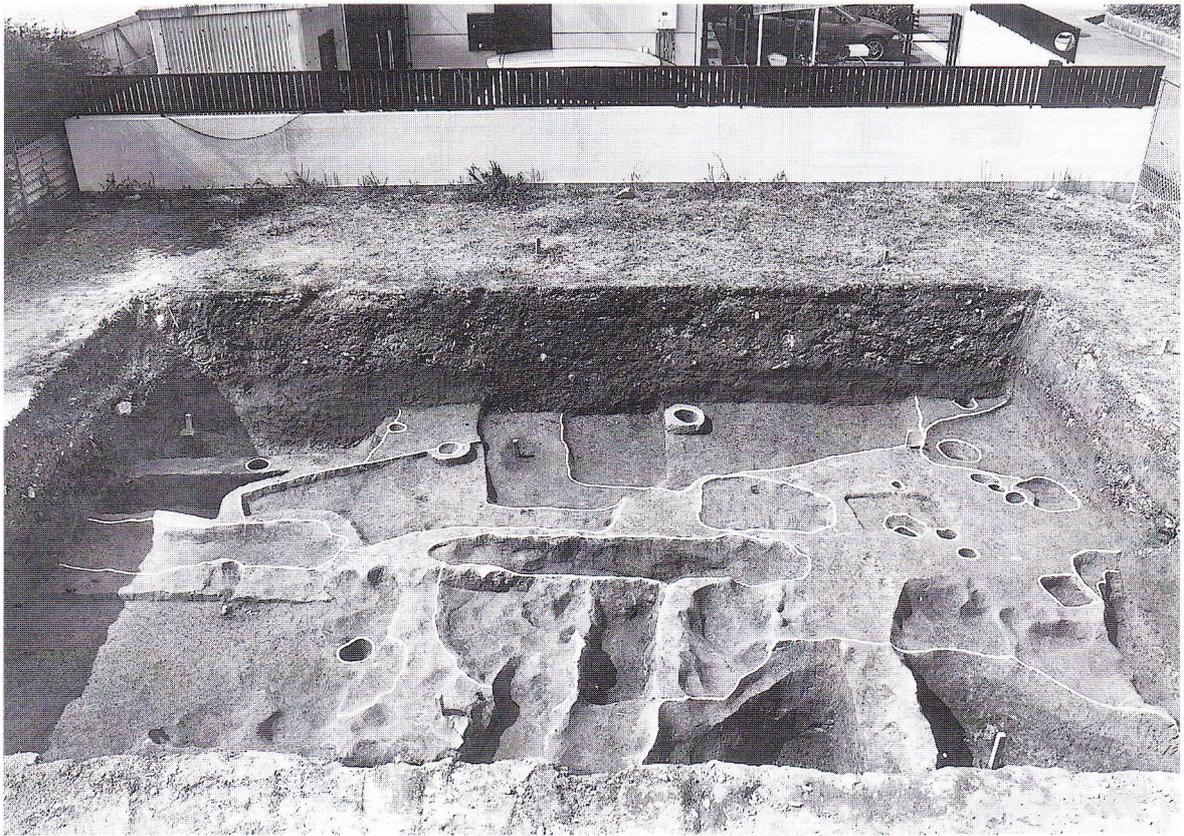
SK-18・12土層堆積状況(南から)



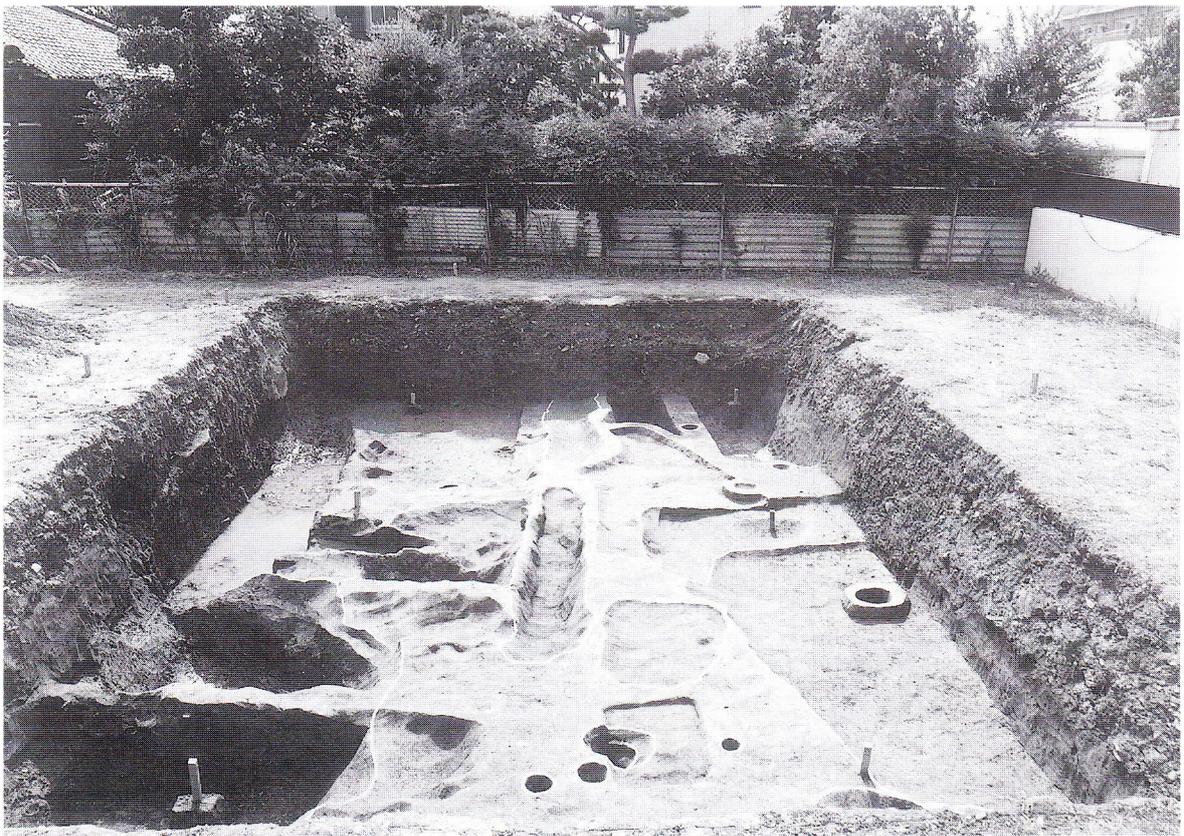
SK-15(東から)



SK-15(南から)



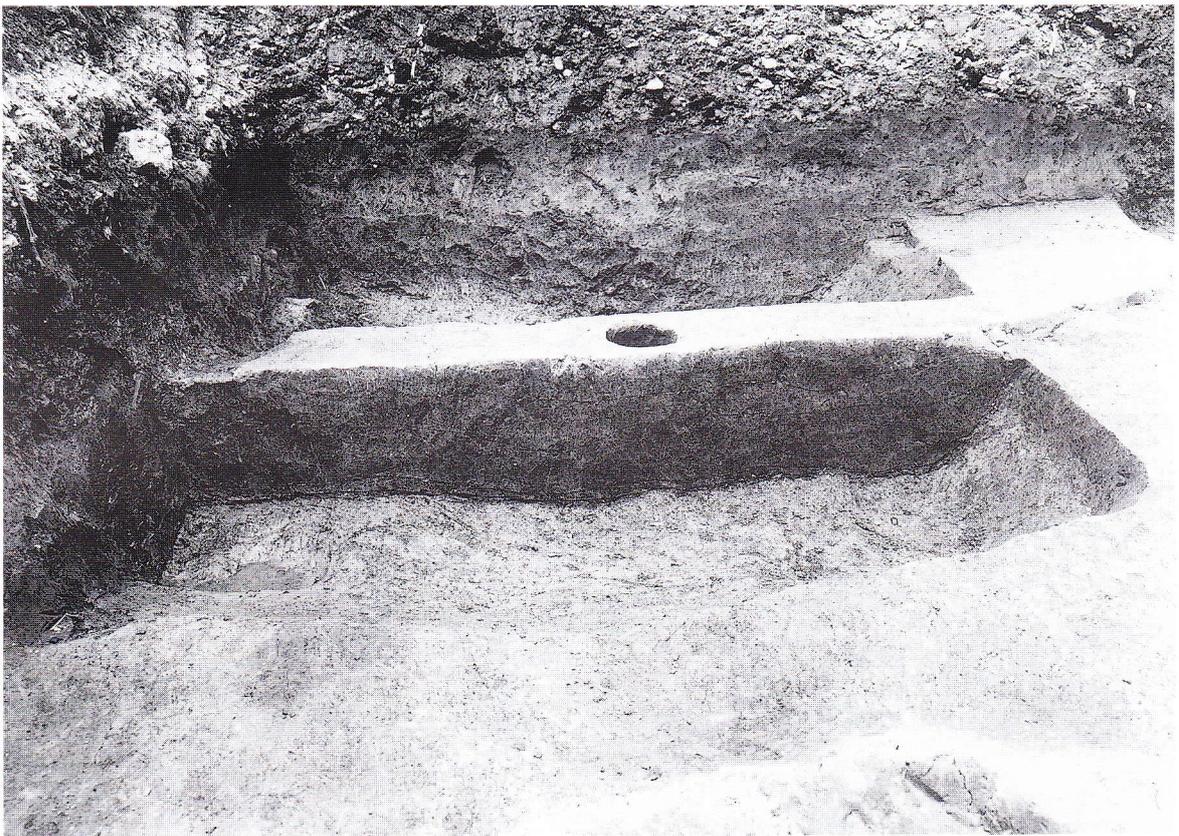
第2遺構面全景(南から)



第2遺構面全景(東から)



SD-3 (南から)



SD-3 土層堆積状況(南から)

図版 8
秋月遺跡
遺構



SK-4 (北から)

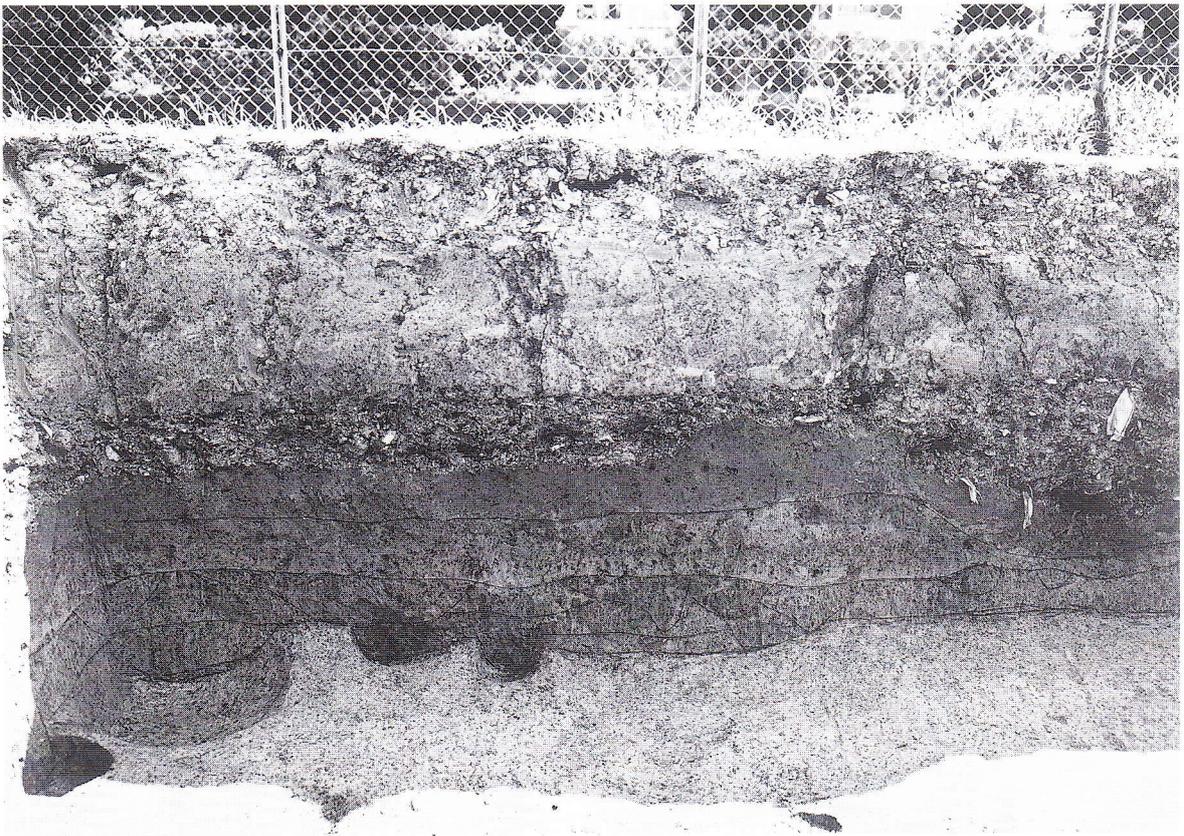


SK-4 土層堆積状況(東から)

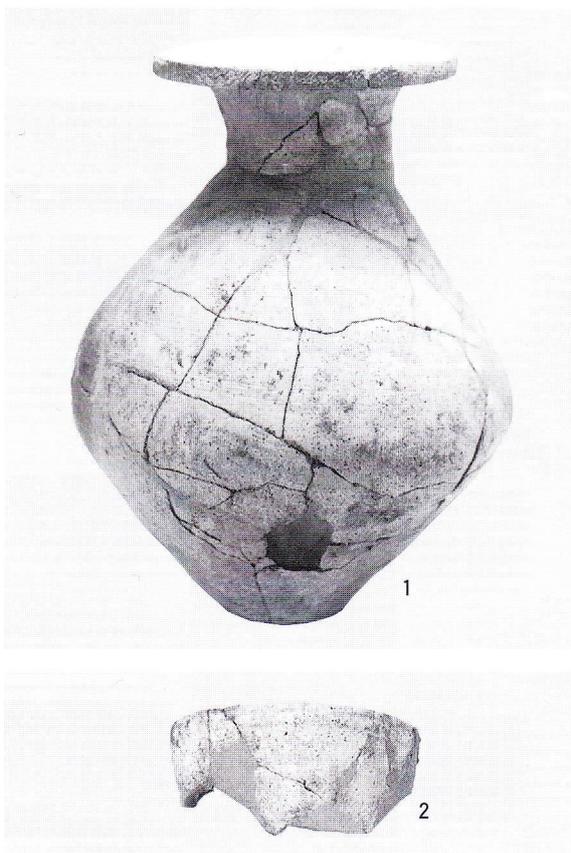
図版9
秋月遺跡
遺構



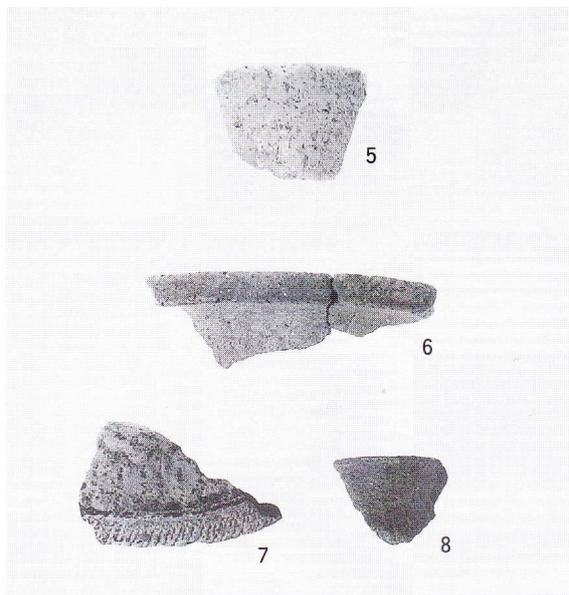
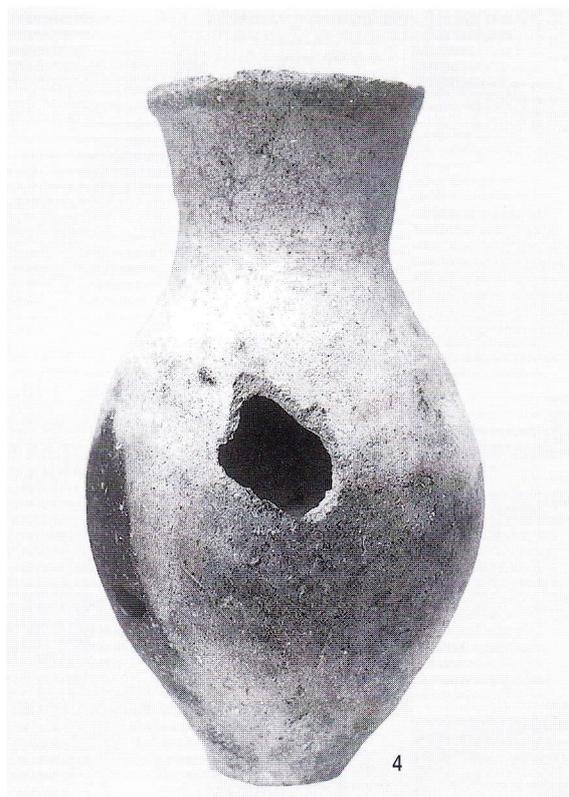
北壁土層堆積状況(南から)



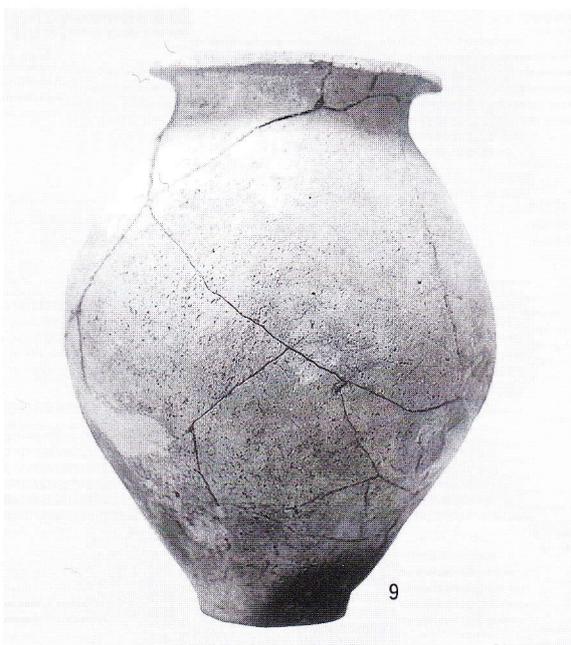
東壁土層堆積状況(西から)



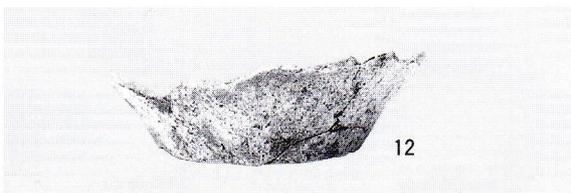
SK-14出土遺物 弥生土器 1 広口壺、2 直口壺



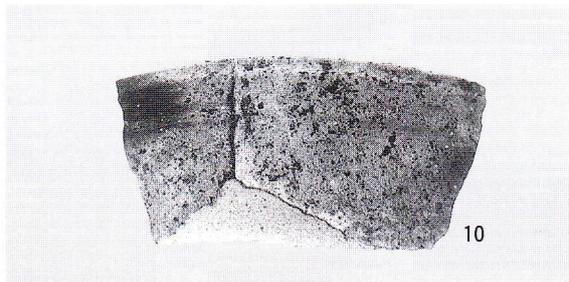
SK-18出土遺物 弥生土器 4・5 直口壺、6・7 広口壺、8 甕



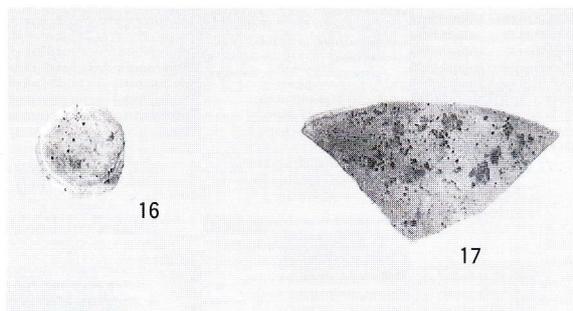
SK-15出土遺物 弥生土器 9 広口壺



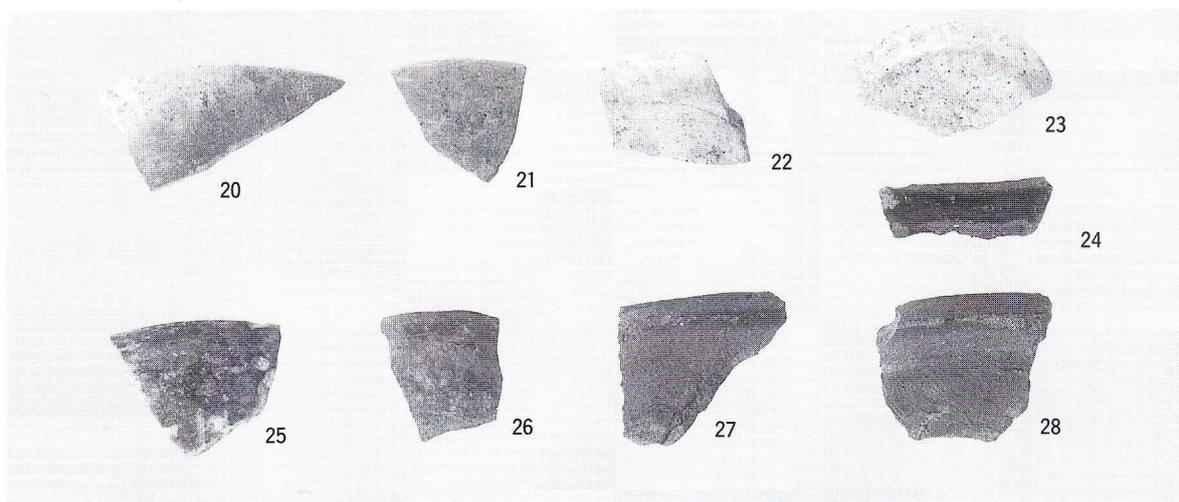
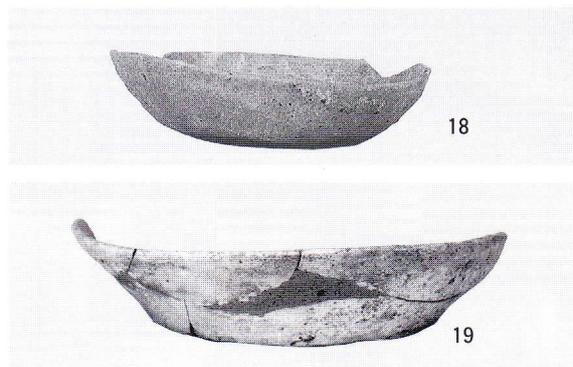
第3層出土遺物 弥生土器12壺底部



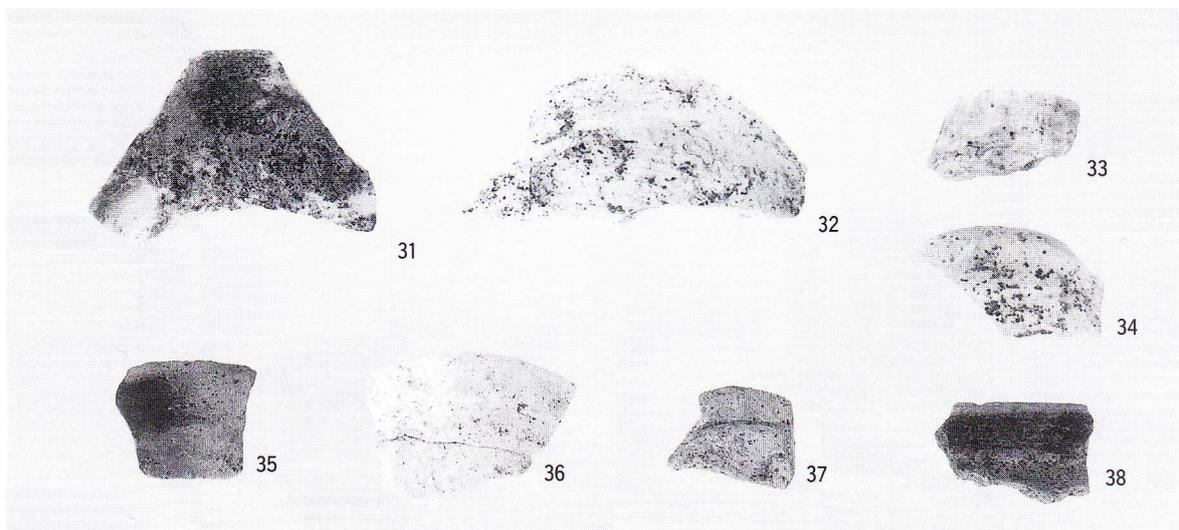
SK-10出土遺物 弥生土器10鉢



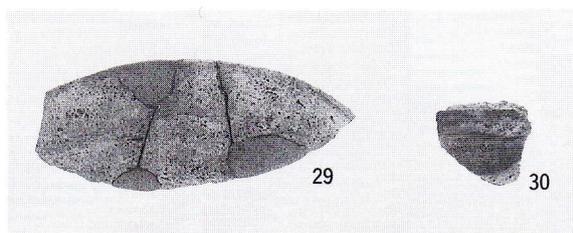
SK-4 出土遺物 土師器16杯蓋、17碗



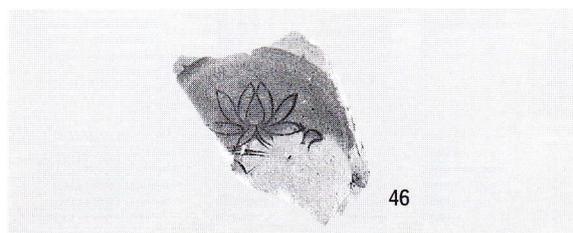
SK-12 出土遺物 土師器18~23皿、24釜、瓦器25碗、26皿、須恵器27・28こね鉢



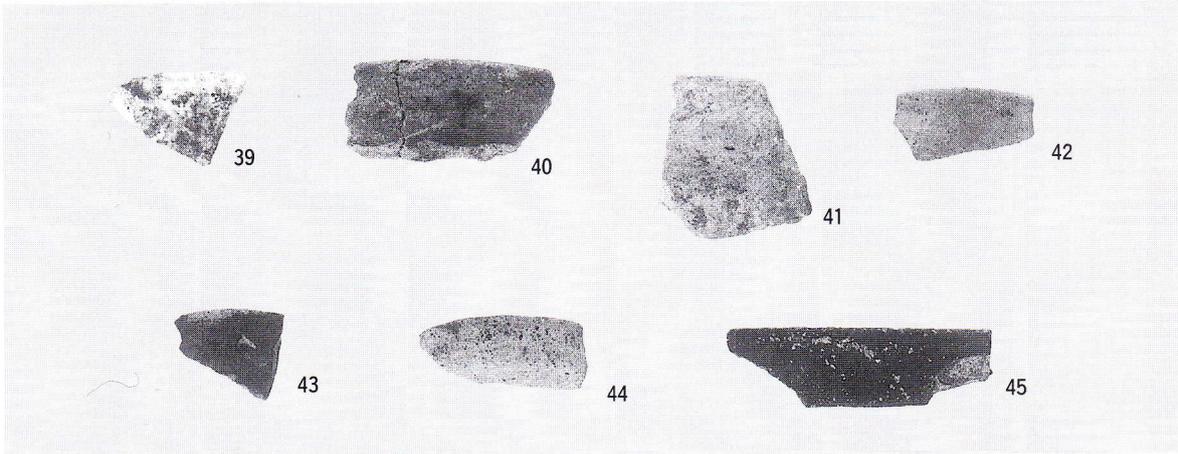
SK-4 出土遺物 土師器31~37皿、38釜



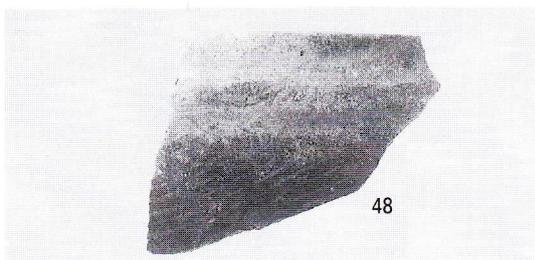
SD-3 出土遺物 土師器29皿、30釜



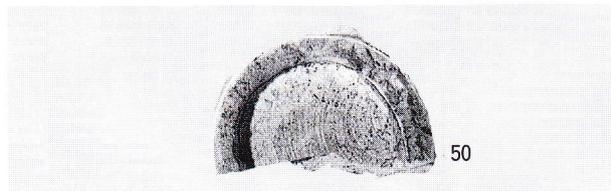
SK-3 出土遺物 中国製青磁46碗



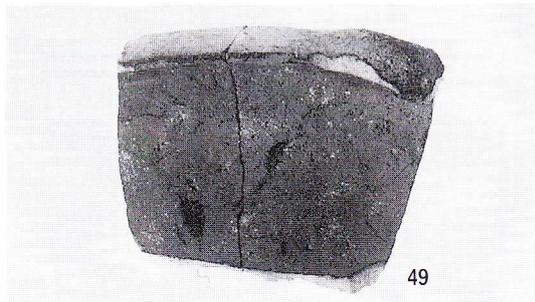
P-9 他出土遺物 土師器39・41・42・44皿、40釜、瓦器 43皿、常滑焼 45甕



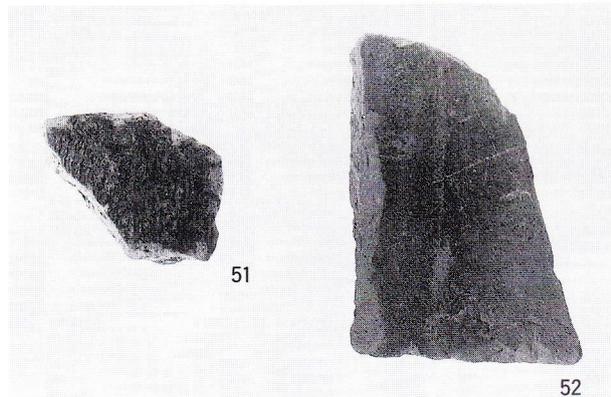
S K-12出土遺物 土師器48鍋



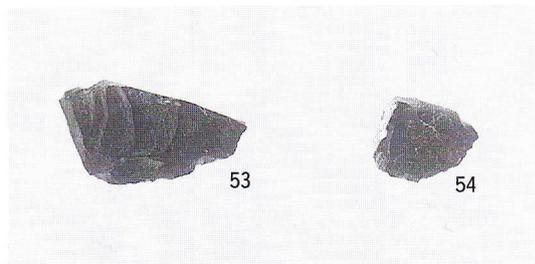
S K-5 出土遺物 瀬戸・美濃系施釉陶器50碗



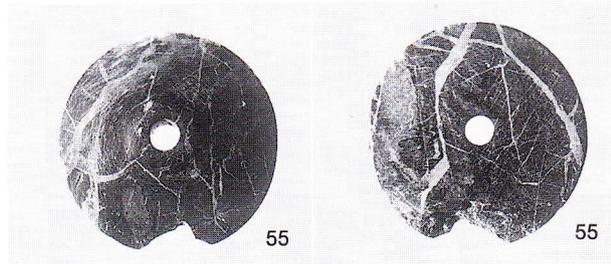
S K-2 出土遺物 瓦質土器49播鉢



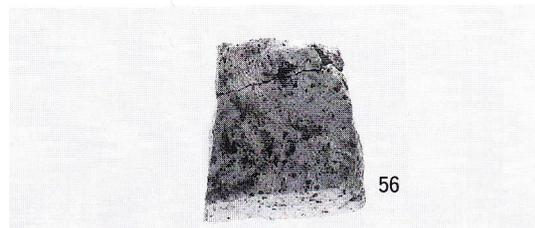
S K-4 出土遺物 51・52平瓦



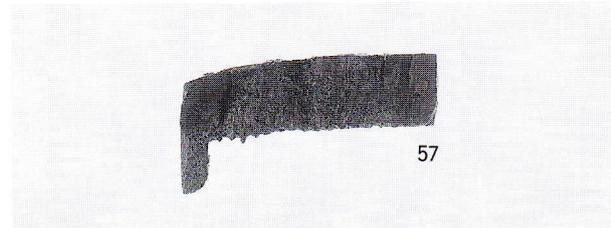
S K-18出土遺物 打製石器53・54スクレイパー



S K-13出土遺物 石製品55紡錘車

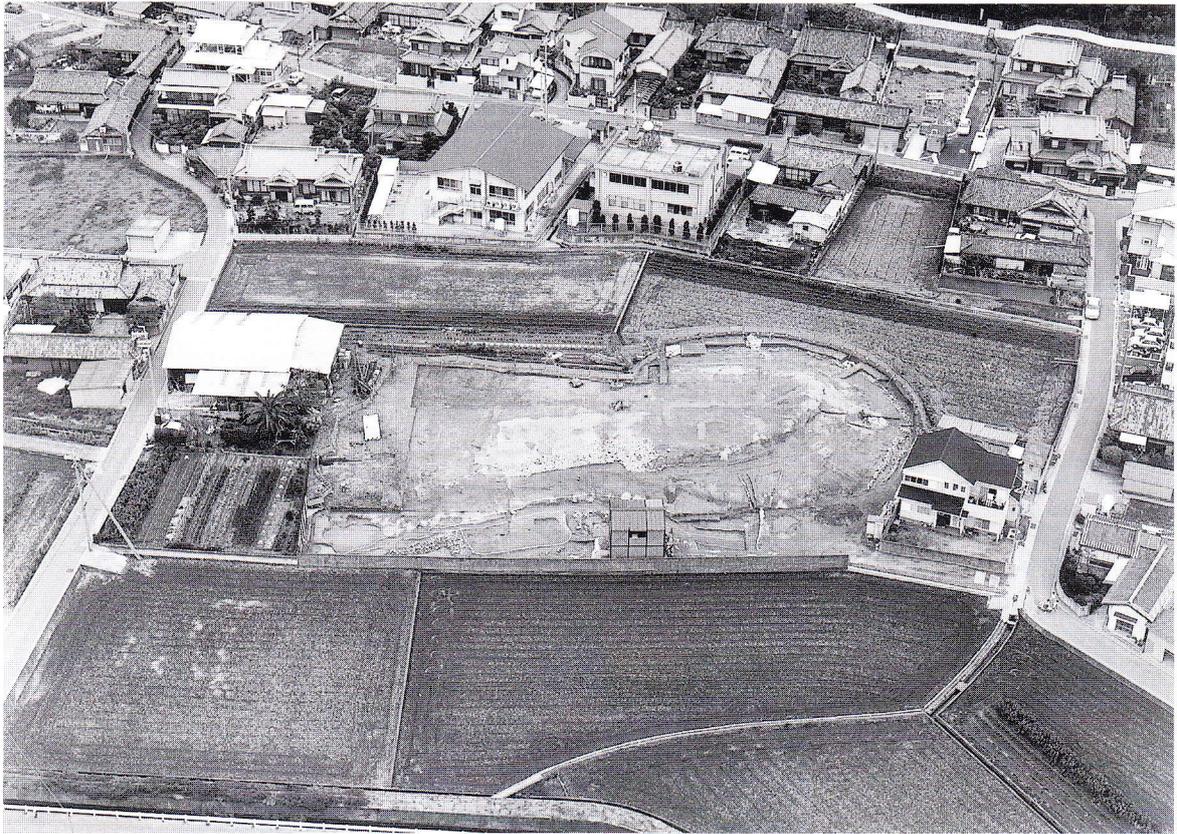


S K-12出土遺物 石製品56砥石



SK-12出土遺物 木製品57櫛

版 圖



車駕之古址古墳 第2次調査時航空写真(南から) 左下が今回の調査地



調査前の状況(南から)



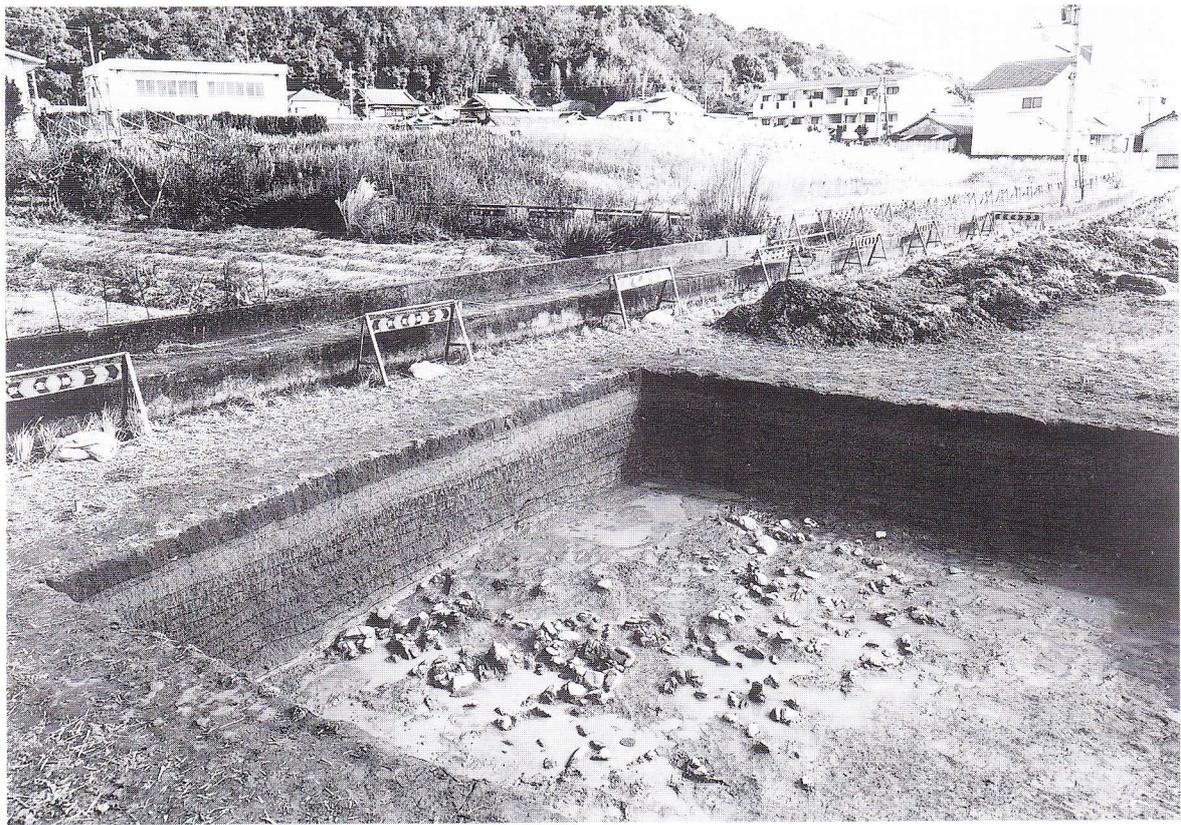
第5遺構面全景(南西から)



第5遺構面全景(北から)



第5遺構面全景(南から)



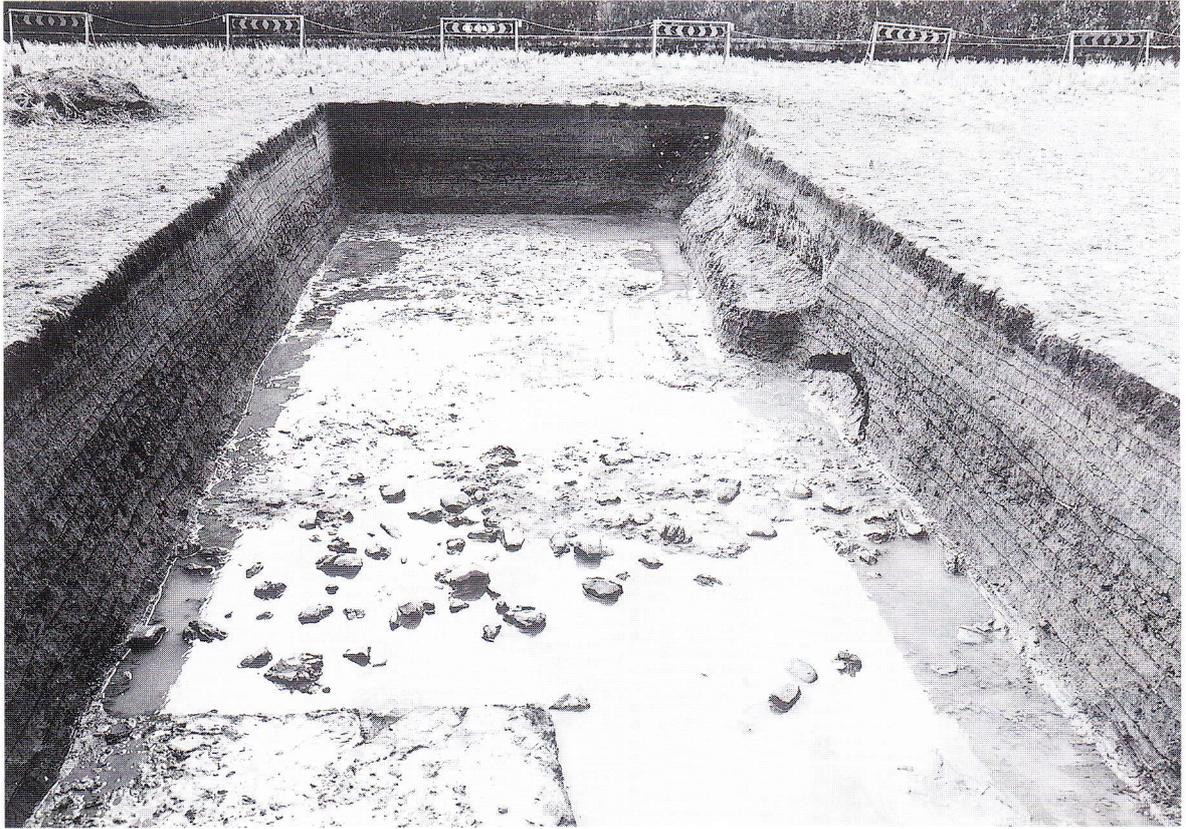
前方部(南西から)



前方部(西から)



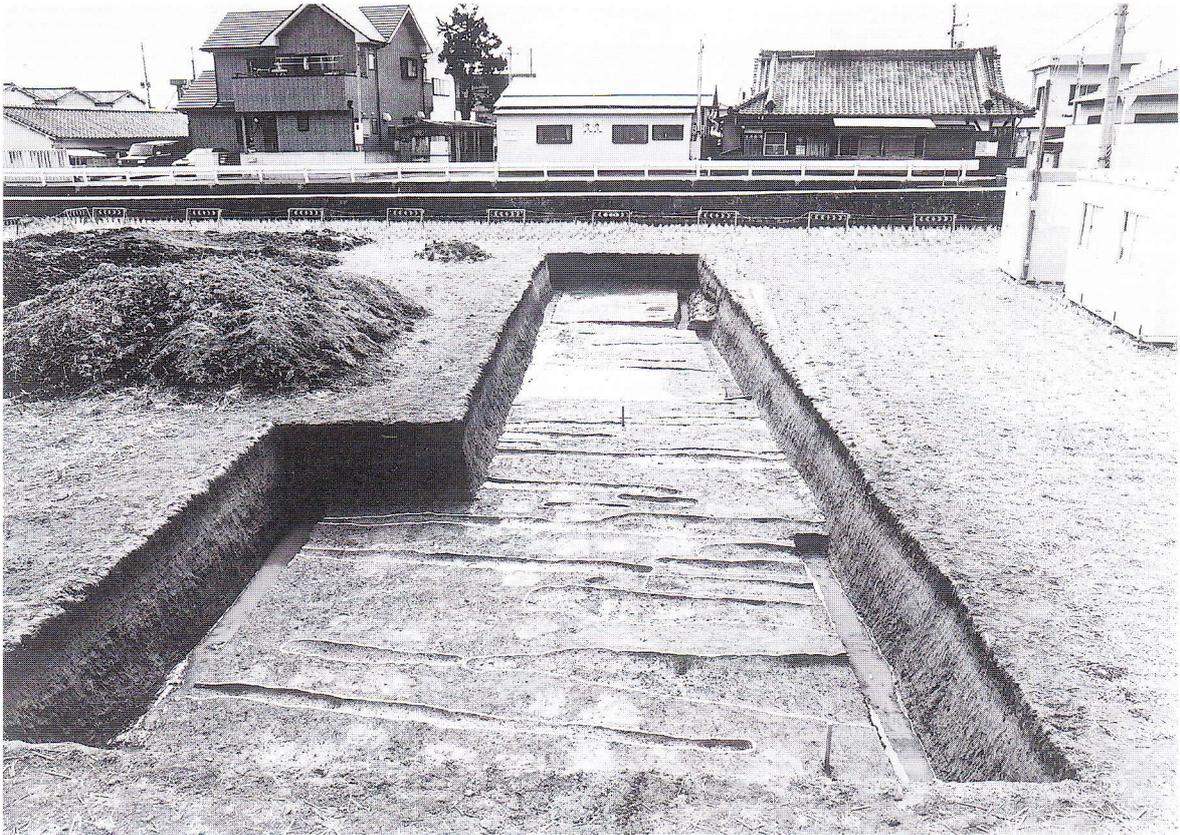
前方部(南から)



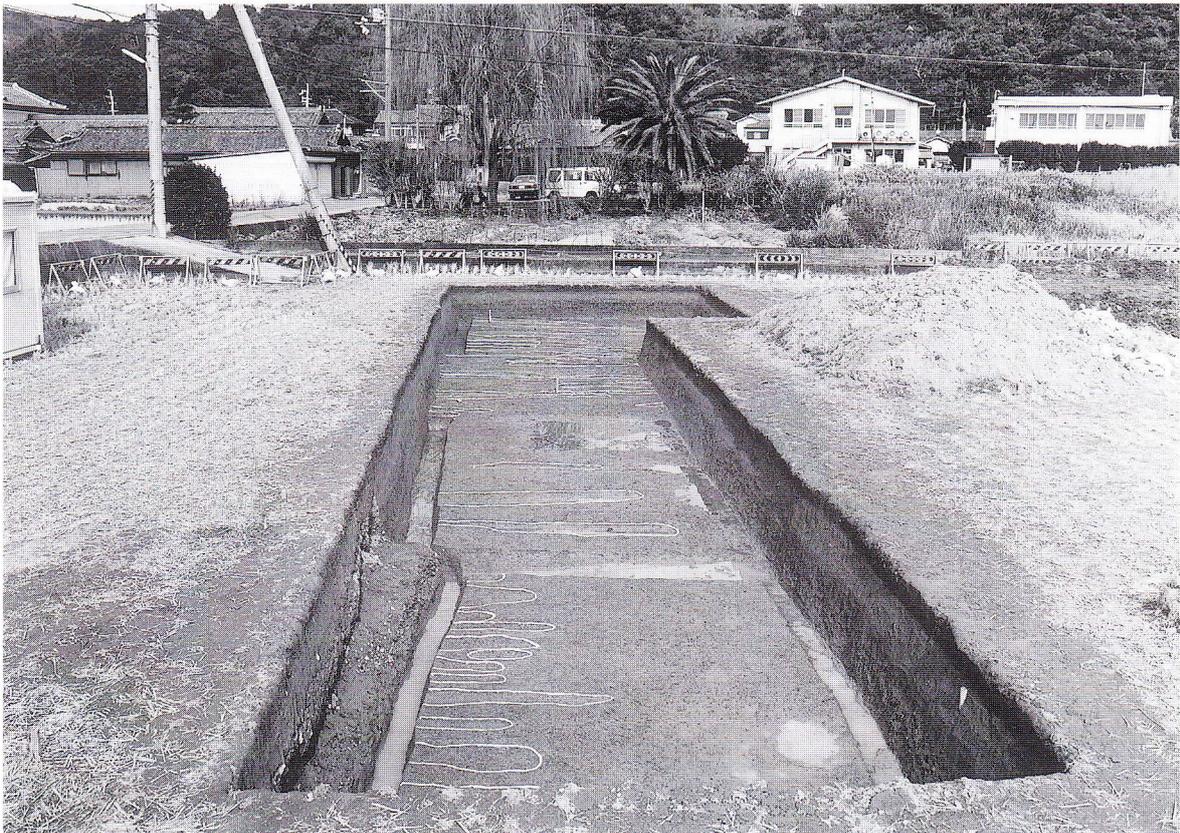
外堤(北から)



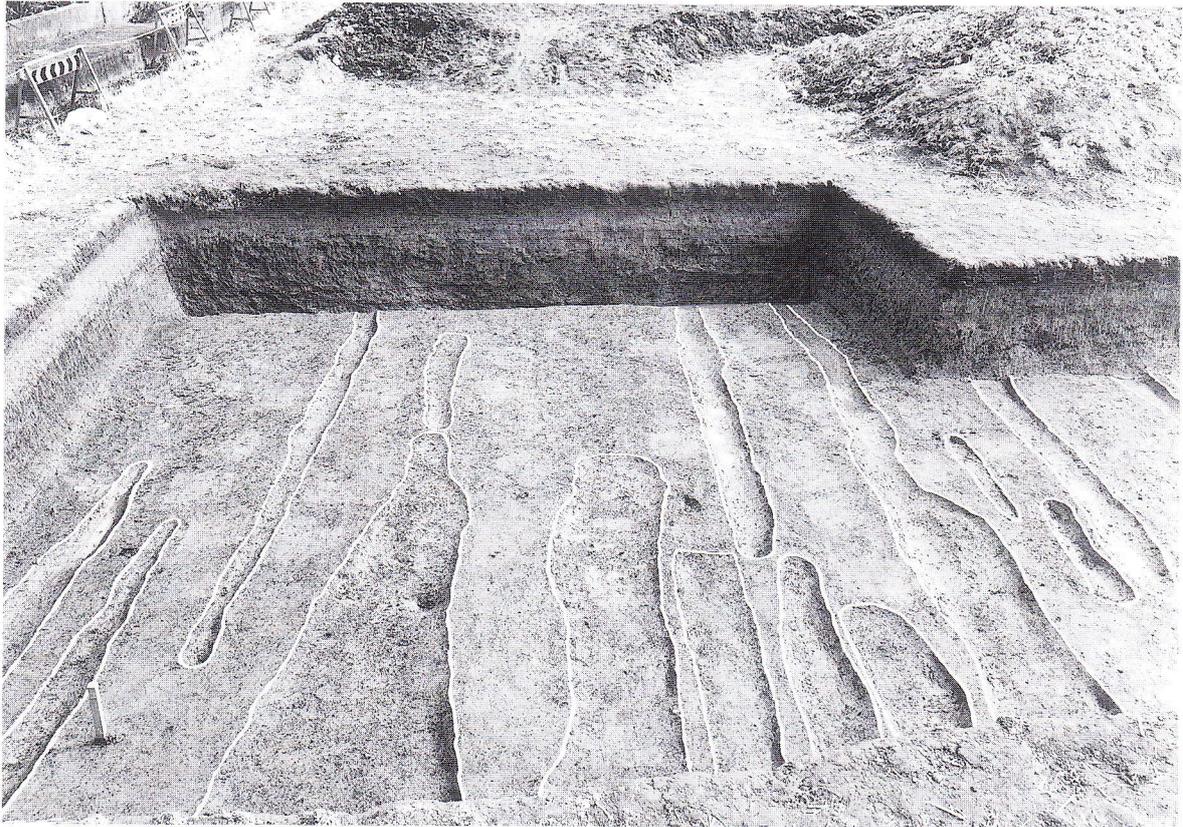
外堤(東から)



第4遺構面全景(北から)



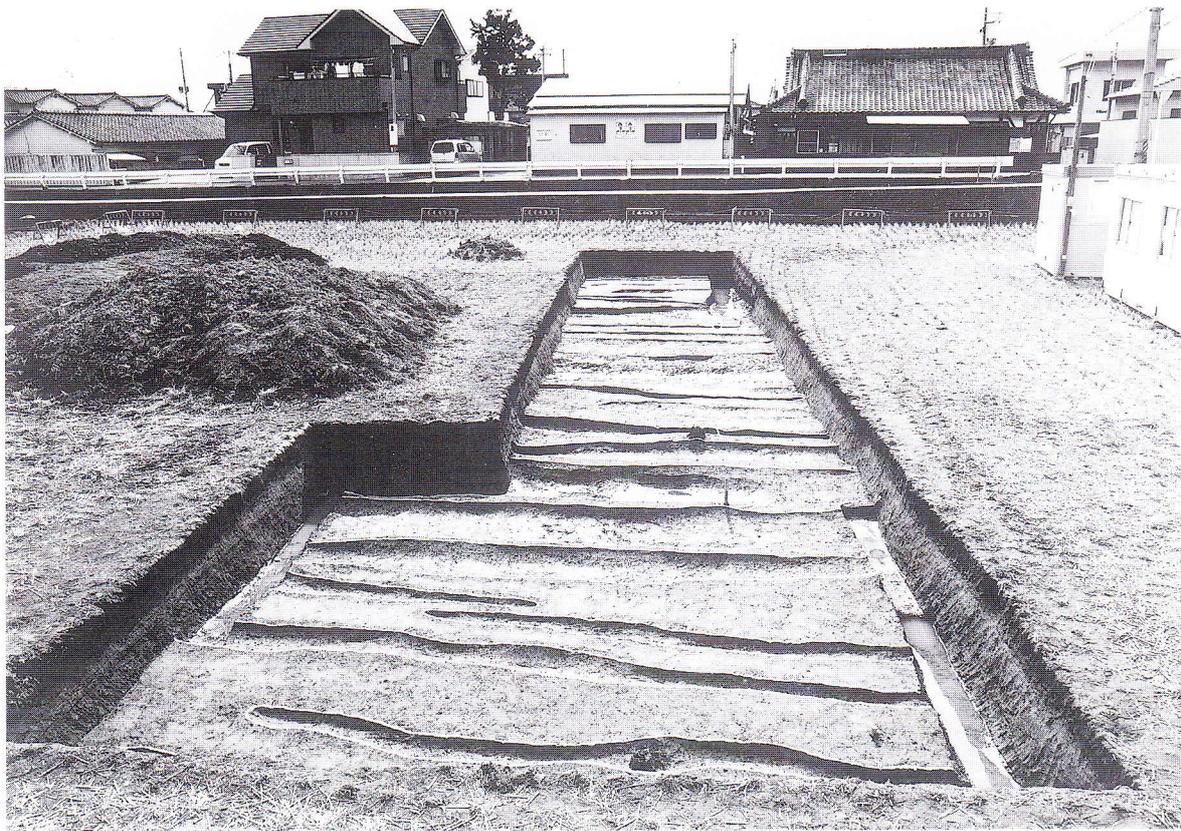
第4遺構面全景(南から)



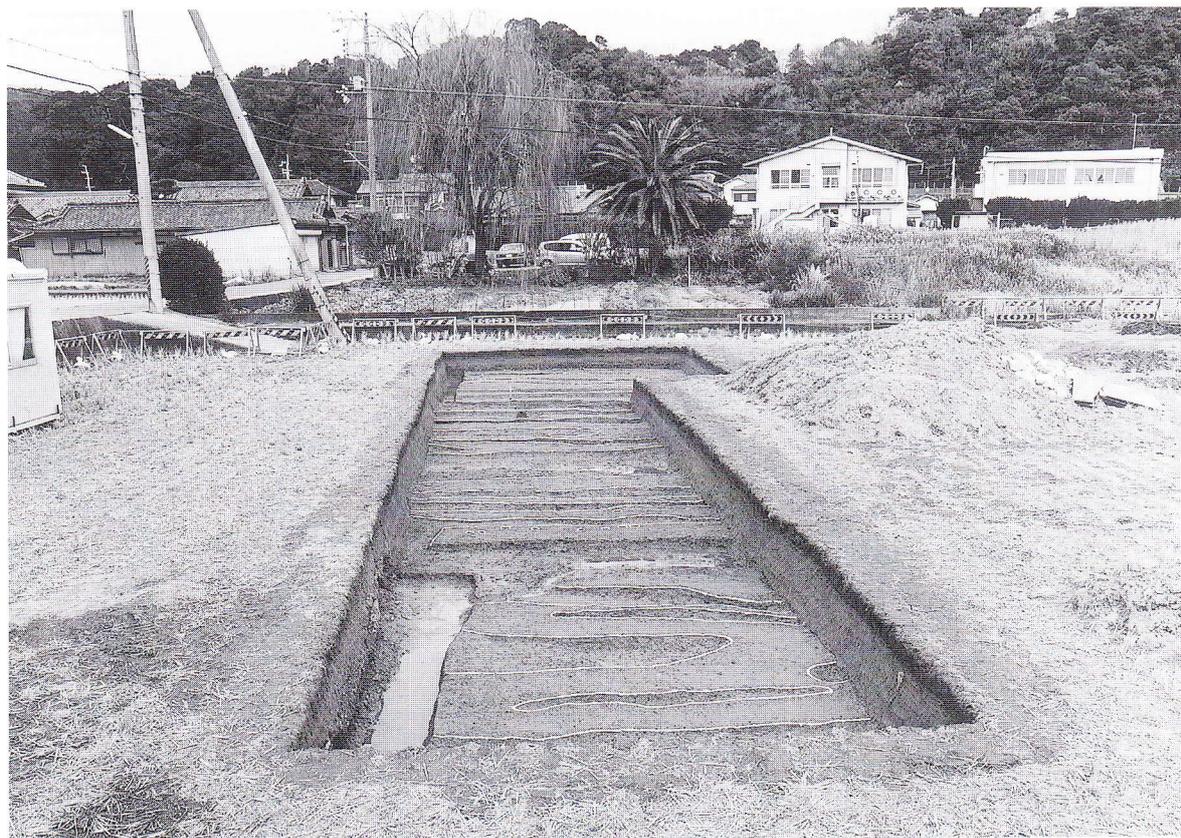
第4 遺構面検出溝群(西から)



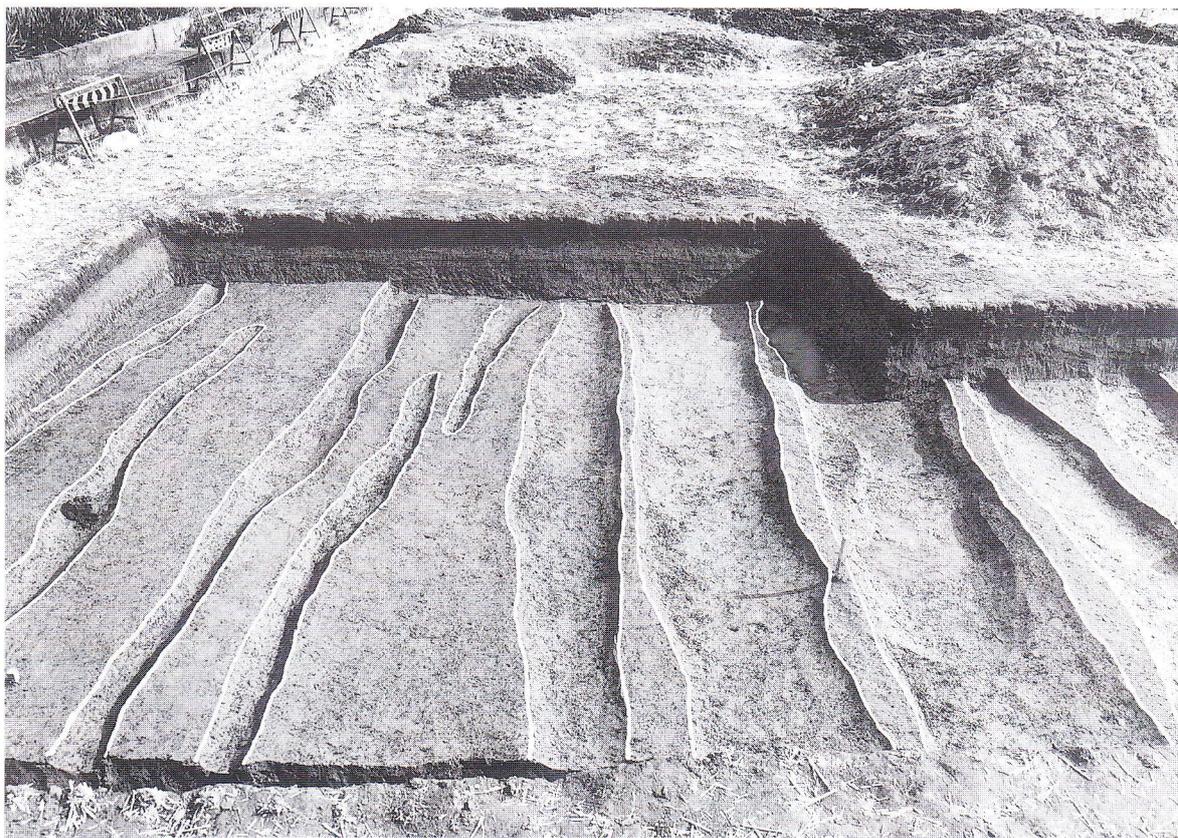
第4 遺構面検出溝群(西から)



第3遺構面全景(北から)



第3遺構面全景(南から)



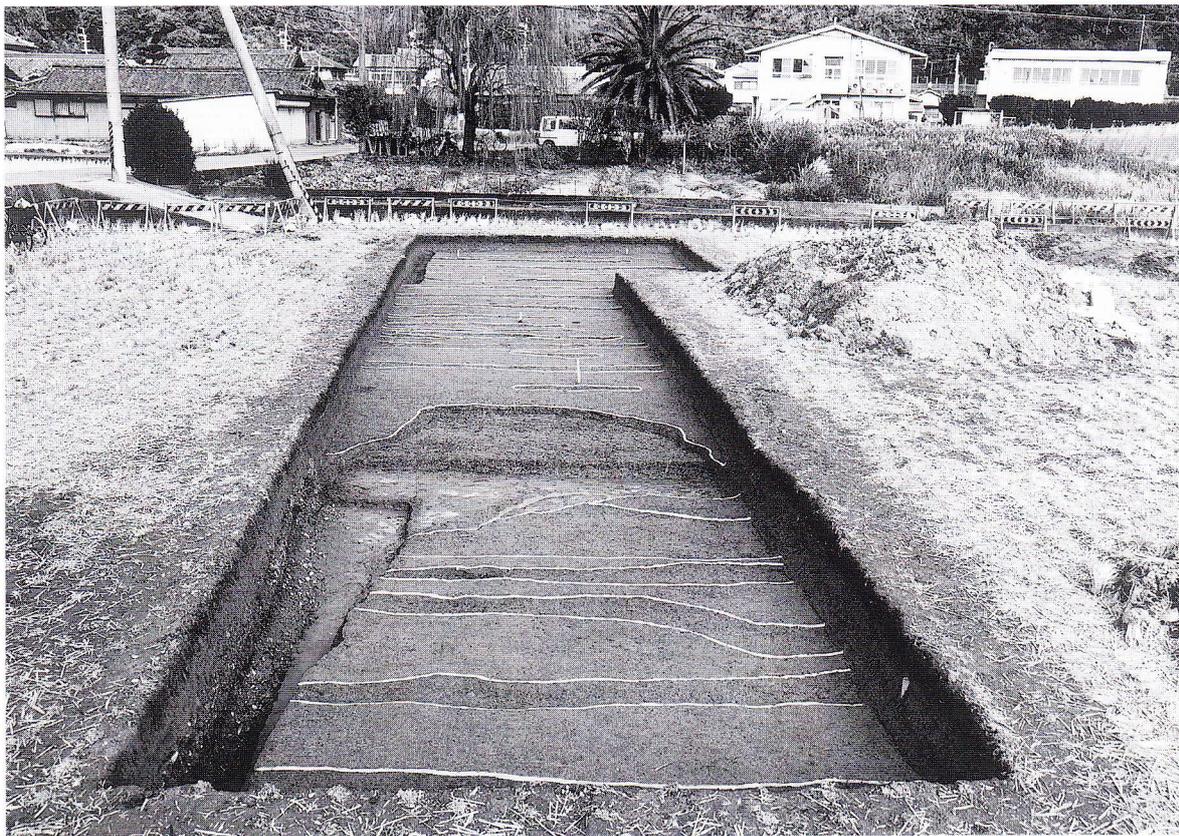
第3遺構面検出溝群(西から)



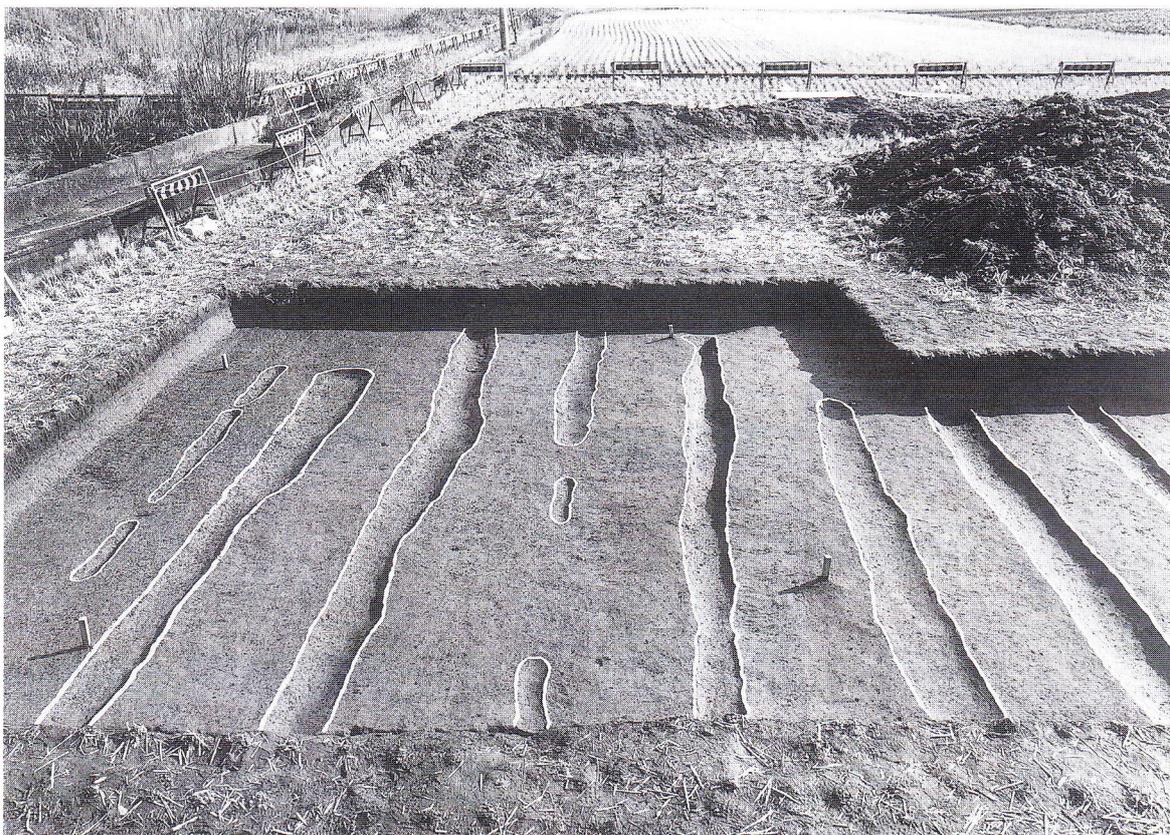
第3遺構面検出溝群(西から)



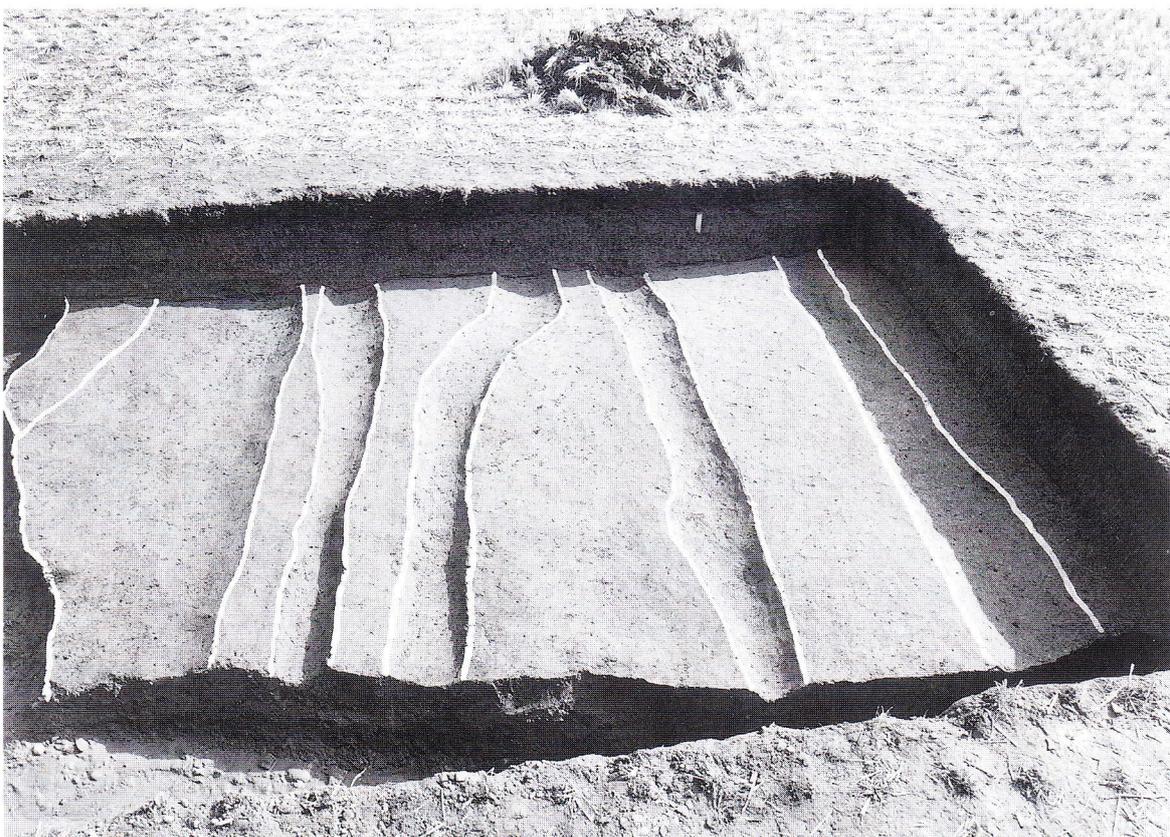
第2遺構面全景(北から)



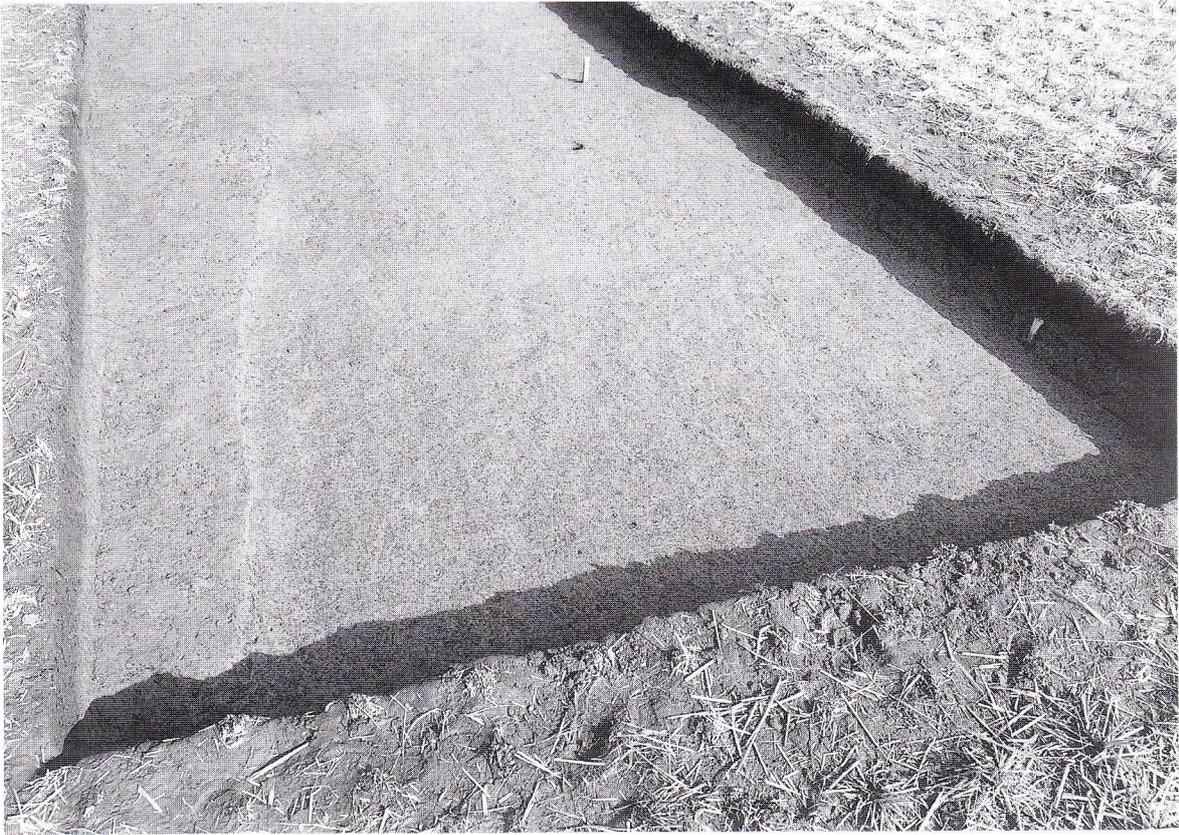
第2遺構面全景(南から)



第2遺構面検出溝群(西から)



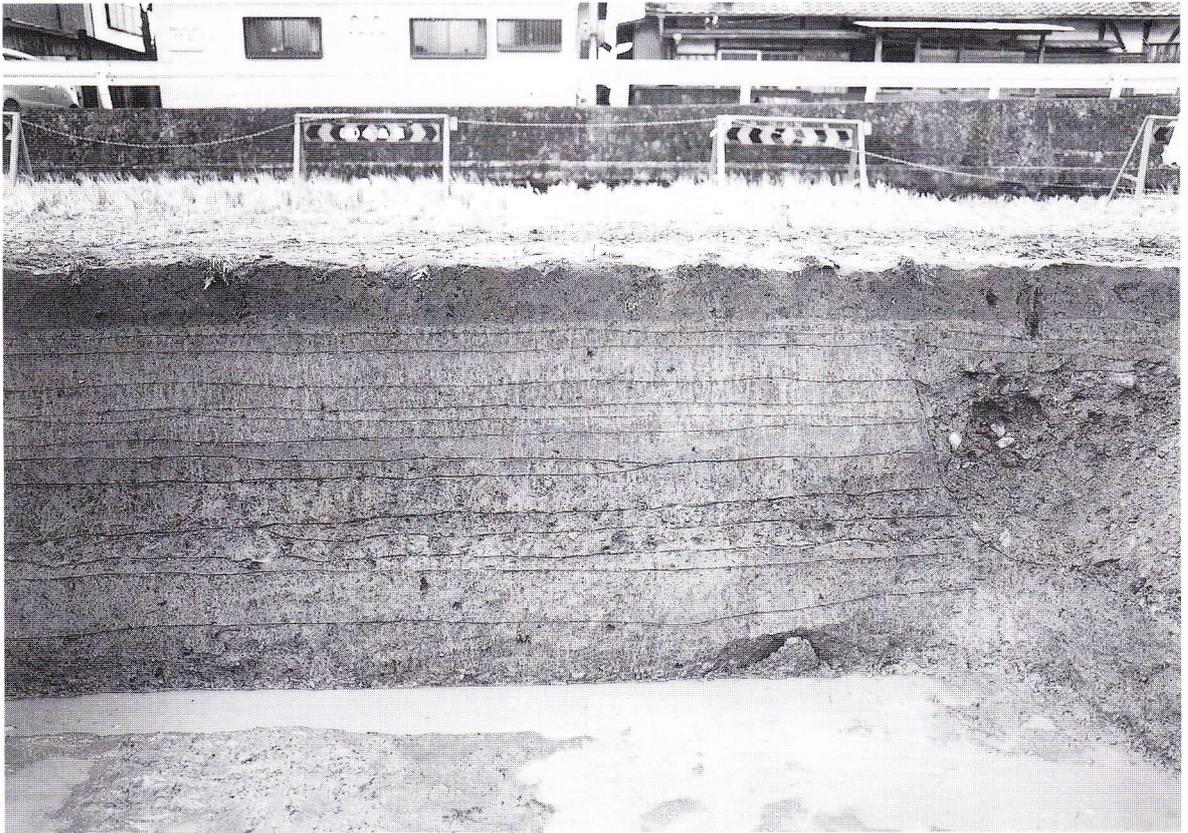
第2遺構面検出溝群(西から)



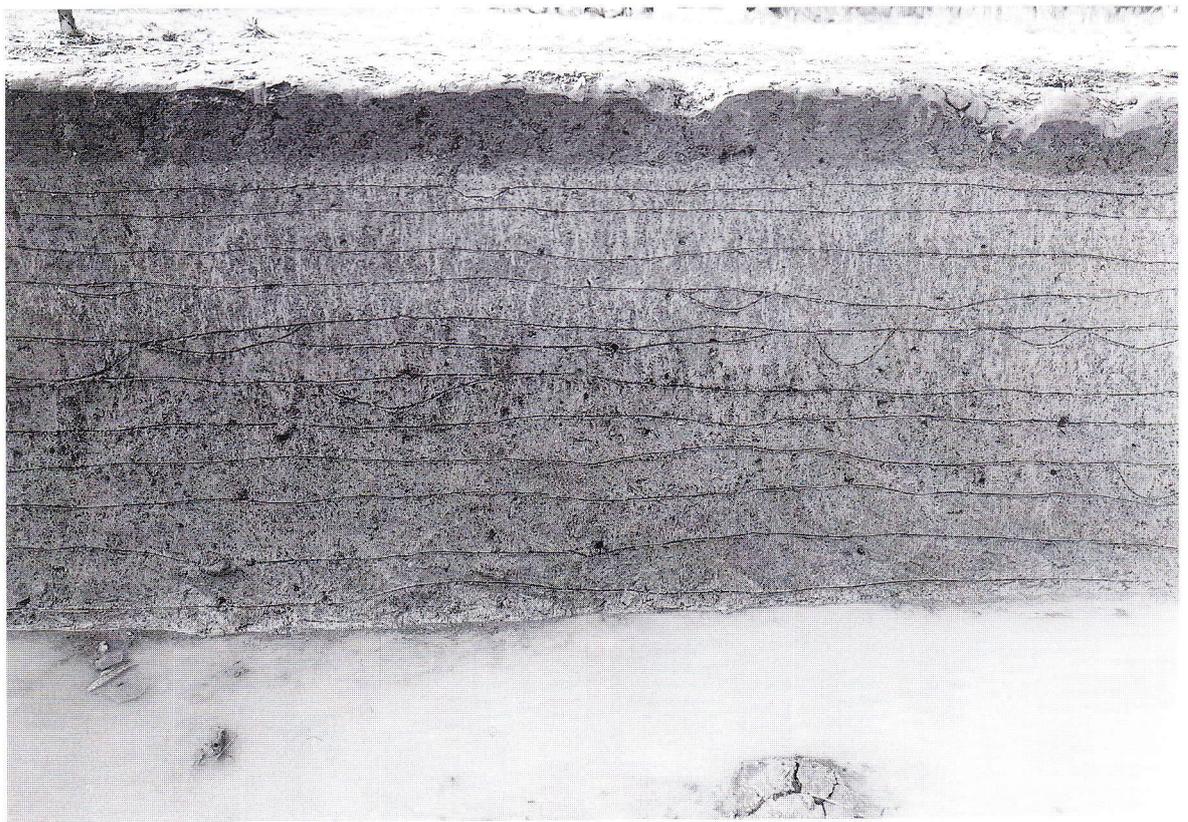
第1遺構面 SX-1 (南から)



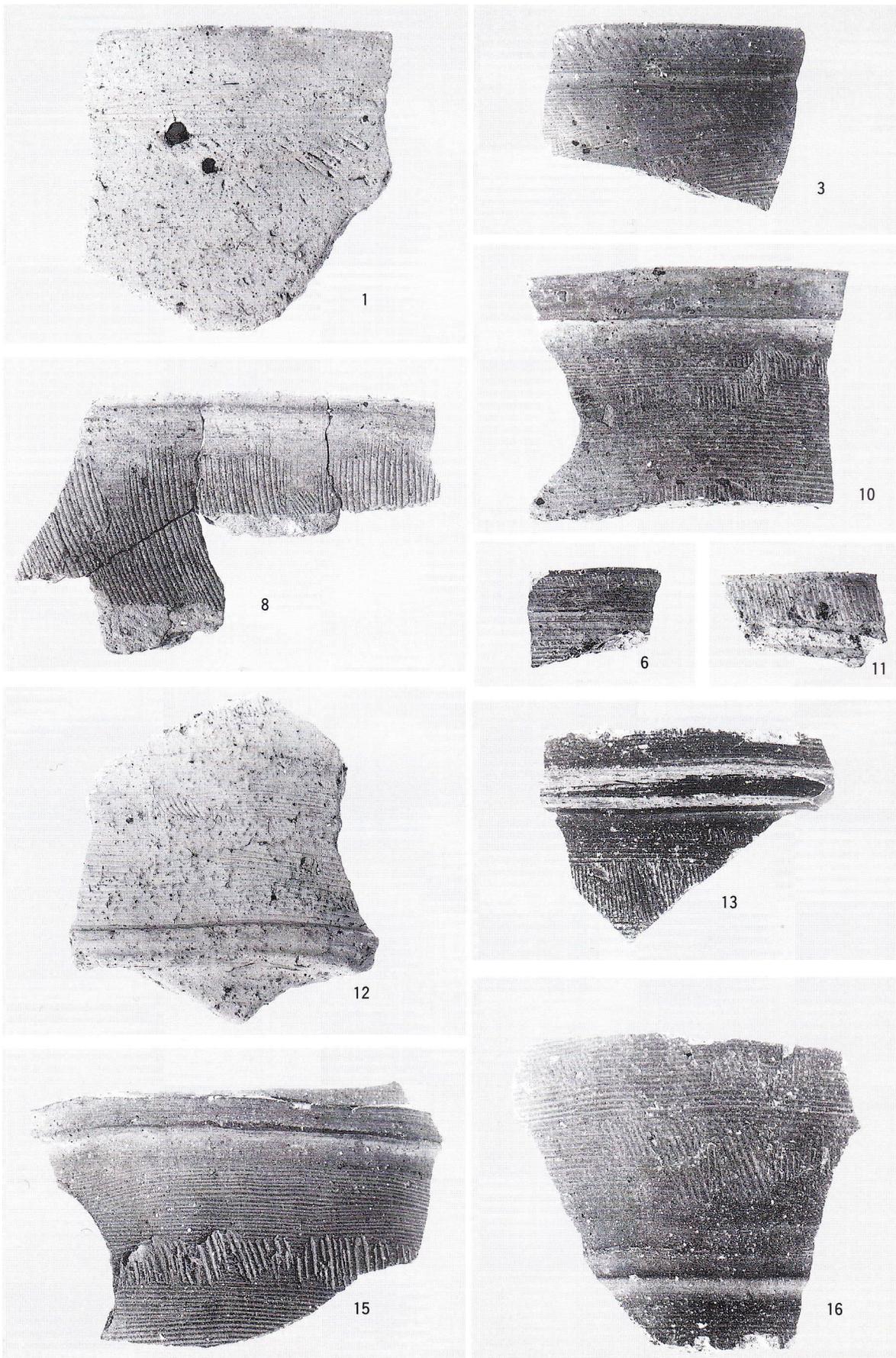
SX-1 断割状況 (南から)



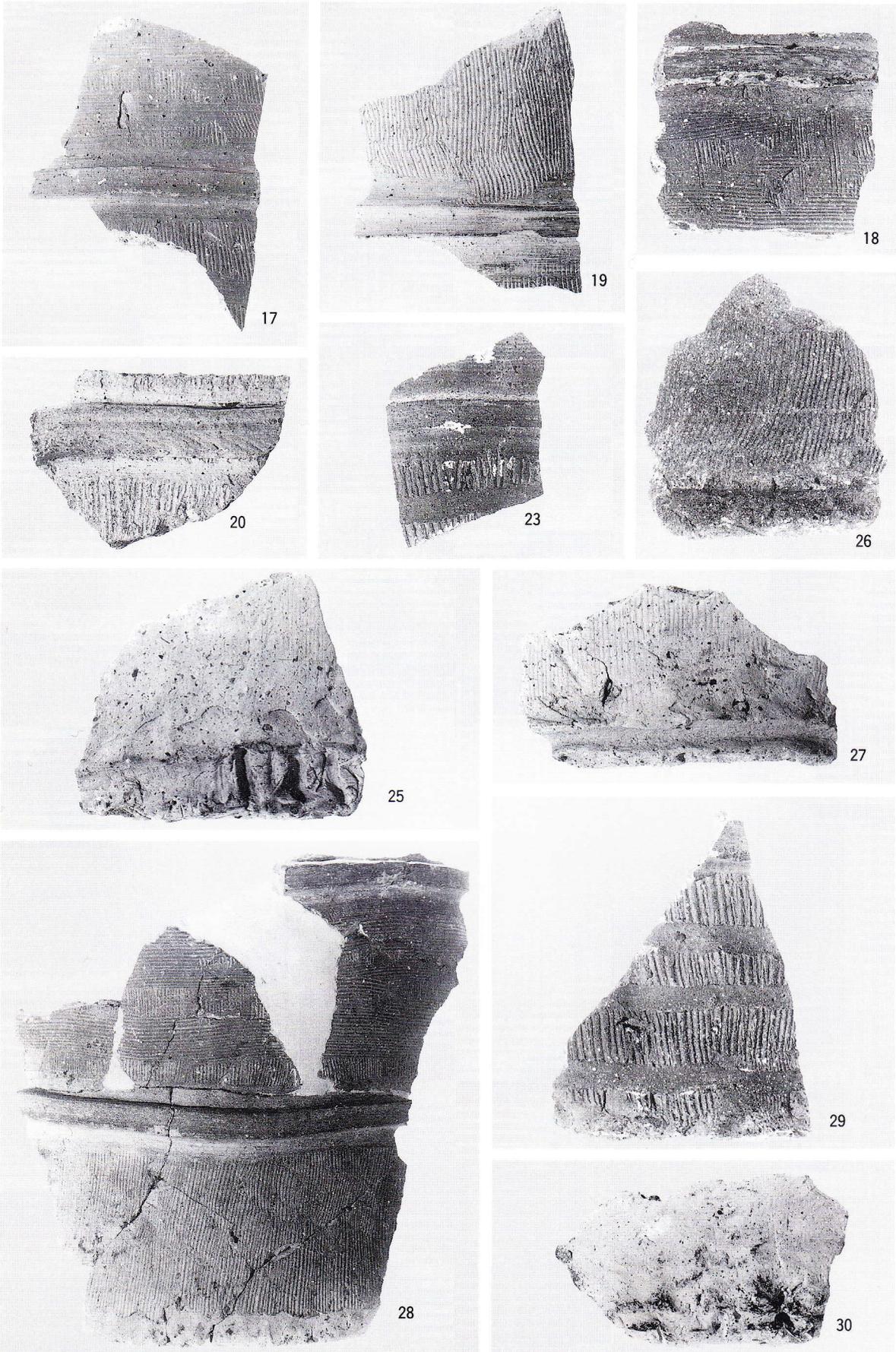
南壁土層堆積状況(北から)



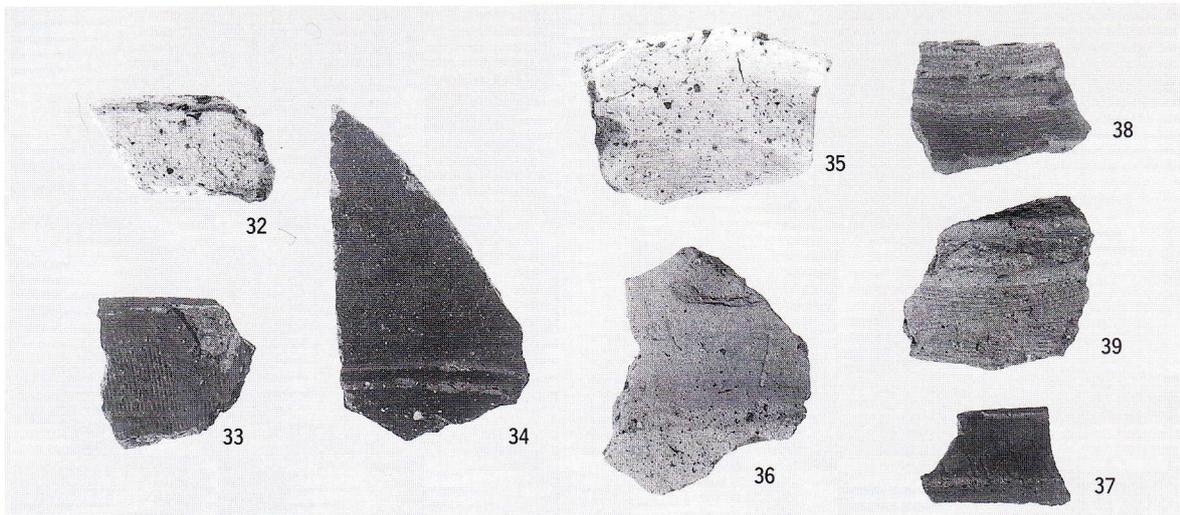
西壁土層堆積状況(東から)



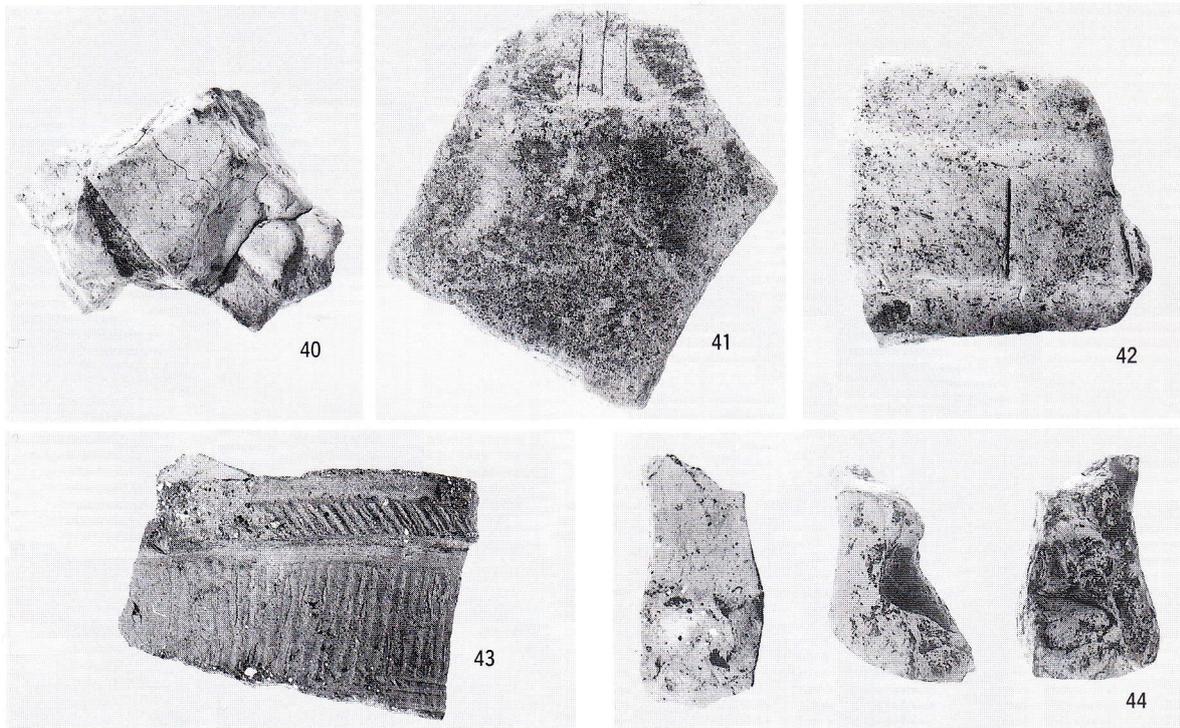
第7c層他出土遺物 円筒埴輪 1・3・6・8・10・11口縁部、12・13・15・16胴部



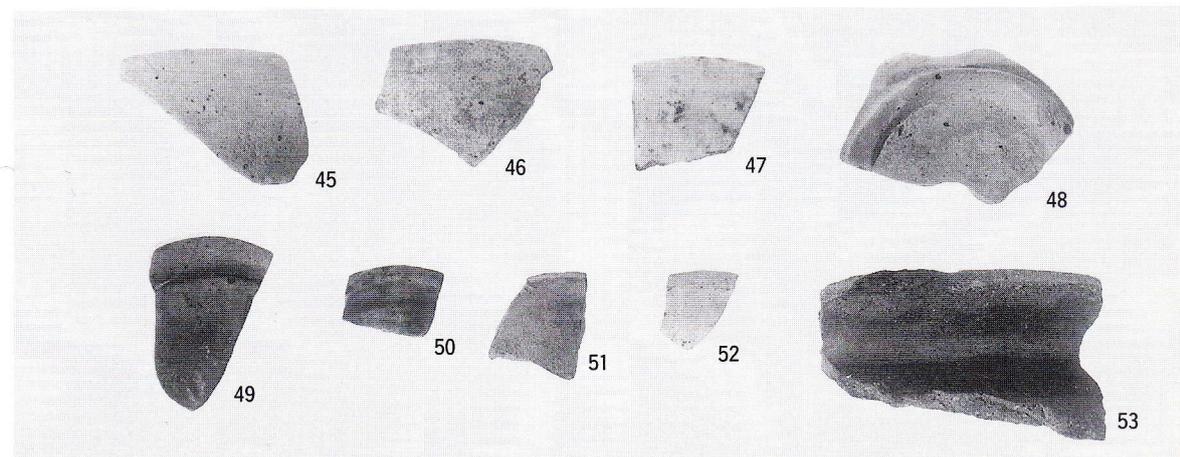
第7c層他出土遺物 円筒埴輪17~20・23胴部、25~30底部



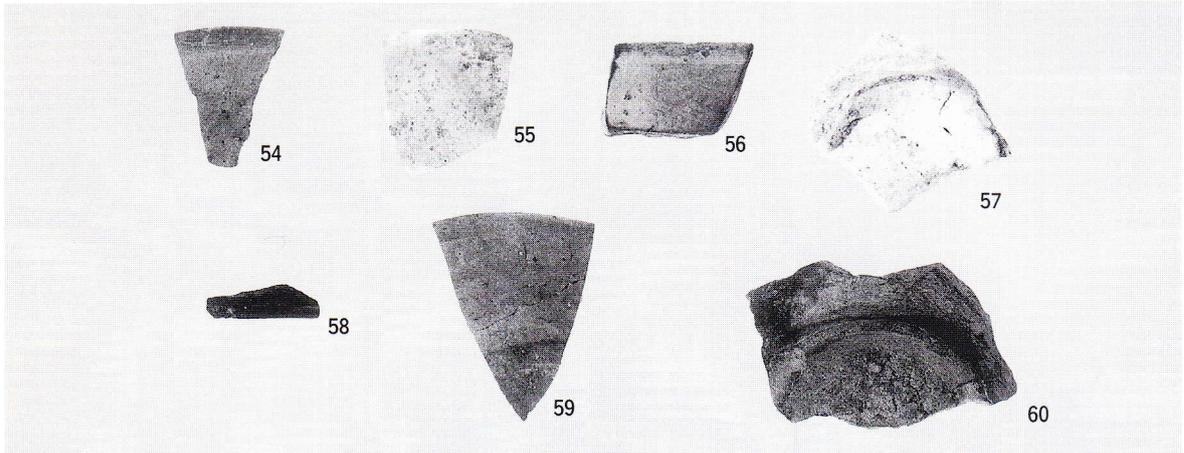
第7a層他出土遺物 32~39朝顔形埴輪



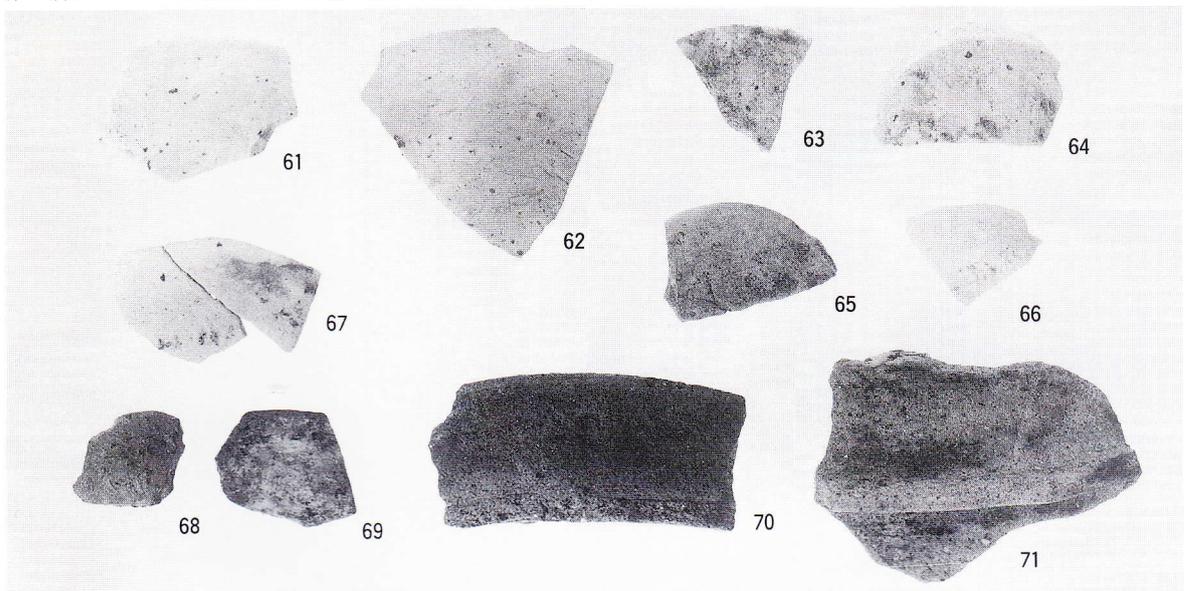
第7a層他出土遺物 40~42蓋形埴輪、43基部、44不明部材



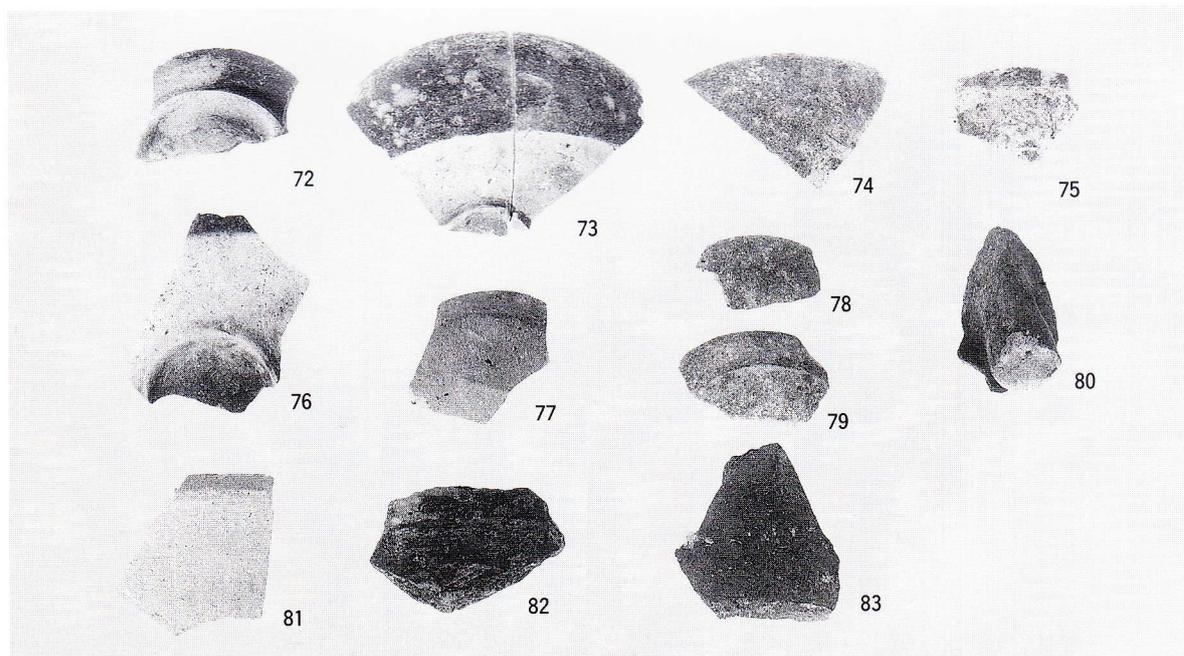
第7c層出土遺物 土師器45~48椀、49~52皿、53甕



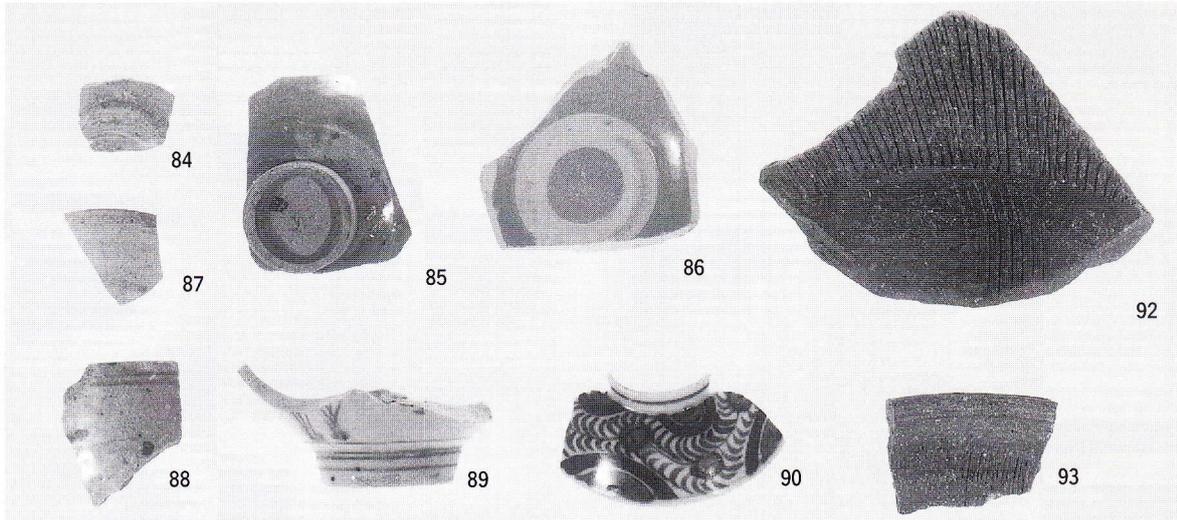
第7c層出土遺物 須恵器54椀、黒色土器55~58椀、瓦器59・60



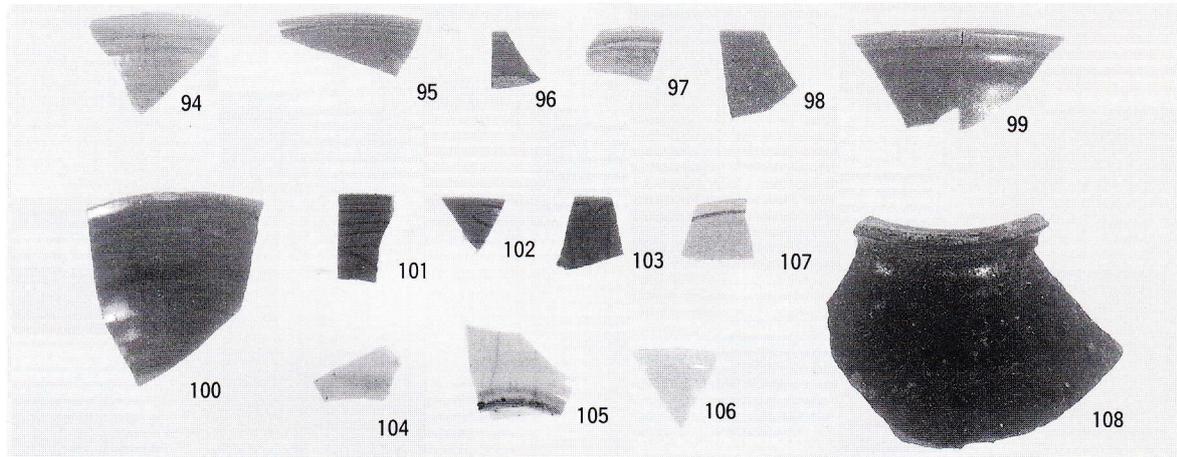
第7a層他出土遺物 土師器61~69皿、70・71釜



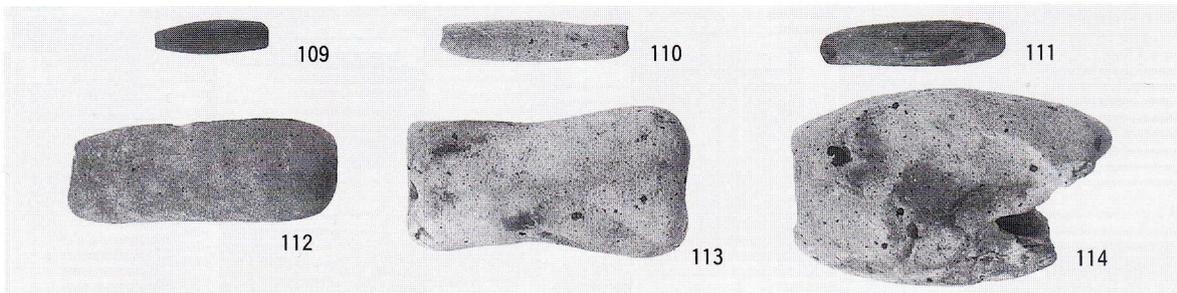
第7a層他出土遺物 瓦器72~76椀、77~79皿、瓦質土器80釜、須恵器81こね鉢、82甕、備前焼83壺



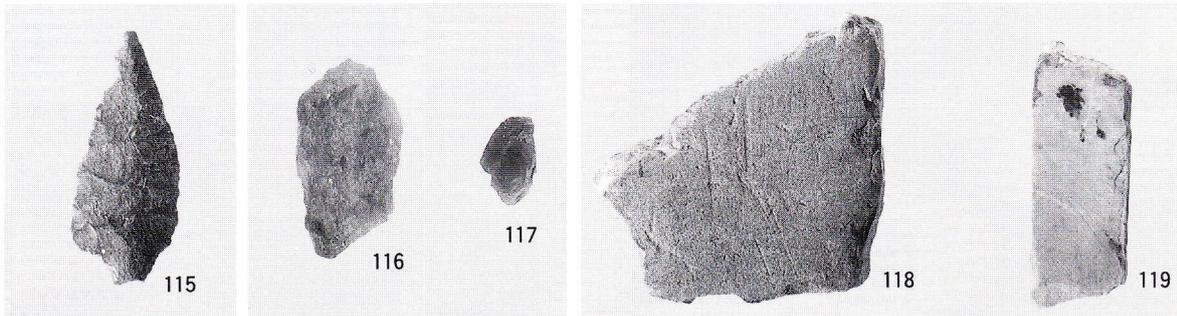
SX-1 他出土遺物 肥前系陶器84~86碗、87皿、肥前系磁器88染付筒形碗、89染付碗、90染付蓋、瀬戸・美濃系陶器91碗、堺焼92播鉢、丹波焼93播鉢



第7a層他出土遺物 中国製白磁94・95碗、96・97・104・105皿、106小杯、中国製青磁98~103碗、中国製染付107碗、中国製褐釉陶器108壺



第7a層出土遺物 土製品109~114土錘



第7c層出土遺物 打製石器115石鏃
第3層他出土遺物 石製品116・117火打石、118・119砥石

報告書抄録

ふりがな	わかやましないいせきはつくつちょうさがいほう
書名	和歌山市内遺跡発掘調査概報
副書名	平成14年度
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	川口修実
編集機関	和歌山市教育委員会・財団法人和歌山市文化体育振興事業団
所在地	☎ 640-8511 和歌山県和歌山市七番丁23 TEL 073-432-0001 ☎ 640-8227 和歌山県和歌山市西汀丁29 TEL 073-435-1195
発行年月日	西暦 2004年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
あきつきいせき 秋月遺跡	わかやまけん 和歌山県 わかやまし 和歌山市 おおだ 太田	3020150	331	34°	135°	20020718	70	個人 住宅 建築
				13′	12′	20020802		
				29″	3″			

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
秋月遺跡	集落跡	弥生時代 鎌倉時代 室町時代	土器棺墓・ 溝・土坑・ 井戸・ピット	弥生土器・土師器・須恵器・ 瓦器・輸入陶磁器・石器・ 石製品・木製品	弥生時代の土器 棺墓や中世の集落 跡を検出。滑石製 紡錘車が出土。

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しゃかのこしこふん 車駕之古址古墳	わかやまけん 和歌山県 わかやまし 和歌山市	3020150	44-2	34°	135°	20021217	100	遺跡 確認
			42	13′	8′	20030219		
きのもとさんいせき 木ノ本Ⅲ遺跡	きのもと 木ノ本			35″	13″			

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
車駕之古址古墳 木ノ本Ⅲ遺跡	古墳 集落跡	古墳時代 鎌倉時代 室町時代 江戸時代	前方部・ 外堤・ 耕作溝・ 畦畔	埴輪・土師器・須恵器・黒 色土器・瓦器・輸入陶磁器・ 中近世陶磁器・瓦・石器・ 石製品	車駕之古址古墳の 前方部南西隅角、 外堤の検出。中世 以降における水田 化の過程を確認。

平成16年3月31日発行

和歌山市内遺跡発掘調査概報

— 平成14年度 —

編集 (財)和歌山市文化体育振興事業団

和歌山市西汀丁29

発行 和歌山市教育委員会

和歌山市七番丁23

印刷 株式会社 高木プリント

© 和歌山市教育委員会 2004